

懣

①ホン、モン。莫困切。願。
②パン、マン。母伴切。早。
③わづらふ(煩)④もたゆ(悶)。
【懣懣】モシ、もたえわづらふ貌。陸游「胸次懣懣思同澆」

憊

①チウ、ゲユ。直由切。尤。
②タウ、ドウ。都老切。皓。
③うれふ(愁)、いたむ(憂)④うれふ(憂)。
【憊憊】チウ、うれふる貌。王粲「決滄兮究志、懼吾心兮憊憊」

憊

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【憊憊】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

憊

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【憊憊】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①君憊而闇、則羣臣詐」
②サン、ソソ。七感切。感。
③いたみ、いたむ。漢書に「支體傷則心

懣

①サ、前に同じ。(懣懣)。楚辭に「霜露懣懣而下兮」
②サ、前に同じ。牛希濟「毀其父母之遺體、罔不懣懣於心者」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①ベツ、メチ。莫結切。屑。
②あなどる(輕易)。
③チヨウ、ゲヨウ。持陵切。蒸。
④こらし(戒)⑤こらし(自戒)。

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①シユ、ニユ。人朱切。虞。
②セン、ネン。乳究切。銃。
③ダン、ナン。奴亂切。翰。④ダ、ナ。奴臥切。箇。
【懣懣】ダ、意氣地なき男。孟子に「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

懣

①サ、前に同じ。(懣懣)。楚辭に「霜露懣懣而下兮」
②サ、前に同じ。牛希濟「毀其父母之遺體、罔不懣懣於心者」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懣

①サ、前に同じ。登樓賦に「心悽愴以感發兮、意切怛而憊憊」
②サ、前に同じ。(憊憊)。任昉「憊入望古、憊恨久之」

懶

ライ。落蓋切。泰。にくむ(嫌悪)。

懷

クワイ、エ。戸乖切。佳。おもひ、おもふ(念思)。

【懷】おもひ、おもふ(念思)かへる(歸)きたる(來)きたす(來)やす(安)いだく(抱)なつく、なつかす(なまむ、かくす(感)いたむ(傷)わたくし(私)いたる(至)とどまる(止)ふとこる(去)かめ、つつむ(包)むれ(胸臆)よこしまなり(伎)。

【懷山】水、山の四方をつつむ。書經に「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵」。

【懷古】むかしをしのぶ。北史に「經涉山水、悵然懷古」。

【懷化】徳になつきうつる。晉書に「察吏盡力、百姓懷化」。

【懷中】ふとこる。梁書に「其一鈴落入、裴懷中」。

【懷民】たみをなつく。漢書に「割據河山、保此懷民」。

【懷孕】はらむ。後漢書、吳祐傳に「妻遂懷孕」。

【懷妊】前に同じ。後漢書に「詔令諸懷妊者、賜胎養穀人三斛」。

【懷危】あやぶむ心をいだく。漢書に「中材苟容求全、下材懷危内顧」。

【懷向】なつく。唐書に「爲政寬惠、人心懷向」。

【懷附】なつきつく。後漢書に「國富

懷

政修、士兵懷附。邪心をいだく。後漢書に「懷邪之臣、懼然自刻」。

【懷奇】奇才をいだく。韓愈「懷奇負氣、不肯隨人」。

【懷抱】いだく。又、ふとこる。後漢書に「三年乃免于懷抱」。

【懷胎】はらむ。

【懷風】「植」うまごやしの異名。四京雜記に「首蓆、一名懷風」。

【懷卷】身の才能をかくす。張舜「懷卷而同其塵」。

【懷服】なつきしたがふ。馬祖常「上國崇懷服」。

【懷柔】なつけやほらぐ。左傳に「其懷柔天下也、猶懼有外侮」。

【懷矜】あはれむ心をいだく。後漢書に「荊州比歲不節、深惟四民農食之本、慘然懷矜」。

【懷祖】せんぞをおもふ。杜篤「悽然有懷祖之思」。

【懷荒】邊地のものをなつく。晉書に「懷荒弭暴、開國化家」。

【懷妊】ふとこる。韓非子に「出其父母懷妊之中、生未嘗見冠耳」。

【懷恩】めぐみになつく。後漢書に「人納其訓、吏懷其恩」。

【懷貳】一心をいだく。齊書に「沈攸之、事起、袁粲懷貳」。

懷

【懷猜】それみないだきもつ。梁書に「使彼留者不用、愚者懷猜」。

【懷組】印綬をもつ。蘇轍「今予命爾懷組而歸」。

【懷病】病氣にかりある(抱病)。朱熹「懷病坐竟日」。

【懷給】よこしまにして口佞なり。淮南子に「不知、而辨慧懷給」。

【懷想】おもふ。李陵「望風懷想、能不依依」。

【懷瑕】きずをもつ。おちどあり。漢書に「或有抱罪懷瑕」。

【懷疑】うたがひをもつ。【哲】Septic。人間の認識を否定し、眞理の存在をうたがふ思想。その論を懷疑論 Scepticism といふ。

【懷撫】なつけやすんず。後漢書に「誠心懷撫、信賞分明」。

【懷緬】ものおもふ。杜甫「反爲後輩製、予實苦懷緬」。

【懷劍】ふとこるに搦ふるちひさき刀。(匕首)。

【懷舊】むかしをしのぶ。李中「感時懷舊思悽悽」。

【懷緇】ふとこるとむつきと。轉じて、小兒を介抱する義。又、幼時に介抱せらるる義。韓愈「爵勳連、儻、警、勞、自懷緇」。

【懷墓】おもひてしたふ。(思慕、戀慕)。

懷

慕。王粲「慨我懷慕思、君子所同」。

【懷願】おもひかへりみる。詩經に「瞻瞻懷願」。

【懷歸】かへりたしと思ふ。詩經に「豈不懷歸、畏此簡書」。

【懷德】ふとこる。又、心情。周砥「仗劍從此別、秋風滿懷德」。

【懷玉其罪】貴きものを所持する爲、卻つて禍を招く。左傳に「初虞叔有玉、虞公求旃、弗獻、既而悔之、曰、周諺有之、匹夫無罪、懷玉其罪、吾焉用此、其以買害也、乃獻之」。

【懷瑾握瑜】瑾瑜は共に美玉なり、之を懷き握るといふは懿徳を保持するに喩ふ。楚辭に「懷瑾握瑜兮、窮不得所示」。

【懷寵】君の愛になつきて退くべきを退かず、位に居つてその爲すべきことをなさず。孝經、注に「見可諫而不諫、謂之尸位、見可退而不退、謂之懷寵、懷寵尸位、國之蠹人也」。

【寵】ロツル。魯孔切。董もとの(戻)。

【懸】ケン、ゲン。胡涓切。先。かく、かかる(掛、繫)。

【懸車】官を辭するにいふ。隋書に「韋世康謂子弟曰、吾聞功遂身退、古人常道、今年將耳順、志在懸車」。

【懸】轉じて、年七十なるをいふ。晉書、劉毅傳

懸

【懸】懸河注火、奚有不滅。急なる流。范傳正「辯如懸河、筆不停綴」。

【懸河】かほの水を注ぎかく。梁書に「懸河注火、奚有不滅」。

【懸泉】たき。(懸泉)。

【懸注】水經、注に「石泉懸注、瀑布而下」。

【懸命】いのちをなす。後漢書に「守塞候望、懸命鋒鏑」。

【懸胃】村人、魯の魯公の兜を魚門に懸けて恥しめたる故事により、敵を恥しむること。左傳に「井陘之戰、邾人獲公胃、懸諸魚門」。

【懸軍】ぐん勢を遠く出す。遠く出しあるぐん勢。張珪「罷金甲之懸軍」。

【懸瓠】かけたるひさこ。薛能「懸瓠難落似村居」。

【懸針】書法の一、豎の畫の下の尖りてかけたる針の如き。法書要録に「善懸針垂露之法」。

【懸解】かきりあひなし。羈絆を脱する義。後漢書に「當此時、天下懸解矣」。

【懸珠】眼のうるはしきに喩ふ。漢書に「目若懸珠、齒若編貝」。

【懸魚】棟木の端につくるうのを尾の形せるもの。白居易「懸魚挂青鬃、行馬護朱闌」。

【懸梁】我國にて「サギ」を訓ず。馬護「朱闌」我國にて「サギ」と訓ず。

【懸梁】沈約「高仞倒危石、百丈注懸梁」。

懸

【懸崖】きりたたるがけ。(斷崖)。

【懸崖】きりたたるがけ。(斷崖)。

【懸照】懸崖樓歸月」。

【懸梯】はしこ。南史に「張綱修攻具、成設飛樓懸梯木幔板屋」。

【懸隔】へだたる。かきはなる。史記、高祖本紀に「秦形勝之國、帶河山之險、懸隔千里」。

【懸瀾】たき。水經、注に「懸瀾題注、崩浪震山」。

【懸絶】かけへだつ。易經、注に「重險懸絶、故水洊至也」。

【懸旗】かけたるはた。はたをかく。鮑照「飛念如懸旗」。

【懸鈞】かきをかく。康庭芝「臺前懸掛鏡、簾外似懸鈞」。

【懸溜】流下する水。劉峻「懸溜瀉于軒」。

【懸遊】かけはなれて遠し。晉書に「吾不減懷祖、而位遇懸遊」。

【懸榻】つり下げたるこしかけ。庾信「倒屣迎懸榻、停琴聽解嘲」。

【懸賞】賞を與ふる方法にて物を募る。鹽鐵論に「懸賞以待功」。

【懸囊】かけたるふくろ。一統志に「囊山在蒲田、形如懸囊」。

【懸橋】かきりくびる。

【懸橋】つりばし。李端「花開深洞、仙門小、路過懸橋、羽節輕」。

【懸瀑】たき。陳傅良「怒號懸瀑從天

【慙】 正直にしておろかなり。韓愈「臣以狂妄慙、不識禮度」
【慙】 コリ、ク。呼孔切。董。きめけす。

戈部

【戈】

クワ。古禾切。歌。
【戈】 一、(戟) いくさ、たたかひ(兵戦)。

【戈矛】

【戈矛】 短者持之。唐書に「長者持

【戈兵】

【戈兵】 武器。易經に「爲日、爲電、

【戈盾】

【戈盾】 兵器。詩傳燕編初。

【戈鋒】

【戈鋒】 庚肩吾「廻天隨、

【戈】

【戈】 エツ、ヲチ。王伐切。月。

【戎】

【戎】 エツ、ヲチ。王伐切。月。

【戎】

【戎】 エツ、ヲチ。王伐切。月。

【戎】

【戎】 エツ、ヲチ。王伐切。月。

【戎】 ホウ、モ。莫候切。宥。
【戎】 つちのえ(十千の) しげりさかんなり。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】

【戎】 シユツ、シユチ。雪律切。質。

【戎】 戎暗、山雲念冷寒。
【戎衣】 戦時の軍服。書經に「戎衣

【戎功】 大いなるいさを。詩經に

【戎狄】 大いなるいさを。詩經に

【戎兵】 軍服と兵器と。詩經に「修

【戎毒】 大いなる害毒。書經に「乃不

【戎軒】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【戎】 大衆。詩經に「廻立冢土、戎

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【成】 文帝紀に「三年始令、人以三十一、成

【戢】 寧殊俗、深恩乃戢兵。【戢】 潛凱風負我心、戢權守窮湖。

【戮】 たて(盾)。【戮】 キ、ギ、退絶切。支。キ。求位切。眞。【戮】 つばもの(兵)。

【戢】 カ。居何切。歌。【戢】 くひ(杙)。

【戢】 セン。子淺切。銃。子賤切。【戢】 セン、セチ。昨結切。屑。

【戢】 とこ(盡)【戢】 ころぶ、ほろぼす(滅)。

【戢】 セン、セチ。昨結切。屑。【戢】 たつ(斷)【戢】 きる(切)【戢】 たくみに説く貌。

【戢】 ばぎをきる。晉書、石季龍載記に「戢、歴剖心、肺腎剝孕」

【戢】 たくみに言説する貌。書經に「惟戢戢善調言」

【戢】 きりたつ。徐照「流來天際水、戢斷世間塵」

【戢】 エン。以淺切。銃。テン、テ。住克切。銃。イン。羊進切。震。イウ、ユ。以久切。有。

【戮】 なかきやり(長槍)【戮】 ほ(矛)【戮】 なきたて(長盾)。

【戮】 リク、ロク。力六切。屋。【戮】 蕭蕭切。蕭。

【戮】 ころす(殺)【戮】 おろかなり(癡行)【戮】 はづかしむ(辱)【戮】 あはす(動に通ず)【戮】 かり(雖に通ず、野

【戮】 求元聖、與之戮力。【戮】 忠誠、必加戮性。

【戮】 つみなひくじく。謝莊「朝廷忠誠、必加戮性」

【戮】 はづかしめ。はづかしむ。はづかしめらる。

【戮】 セン。之膳切。戢。【戮】 たたかふ、たたかひ(鬪)【戮】 ののく、おそる(懼)【戮】 そよぶ(ふるふ)。

【戮】 たたかひのちから。後漢書に「降及秦漢之世、資戮力」

【戮】 いくさびと(鬪士)。史記に「招戮士、明功賞」

【戮】 をののきおそる顔つき。論語に「効如戰色、足縮縮如履薄

【戮】 をののきあせす。隨手録に「驚奮戰汗浹體」

【戮】 敵をうつ。吳越春秋に「子胥力于戰伐、死子諫議」

【戰地】 たたかひをなす場所。又、た

【戰局】 たたかひのなりゆき。た

【戰怖】 ふるひおそる。をののく。(振怖、懾怖)。魏志に「陛下恩養之福、夙宵戰怖、無地自厝」

【戰死】 うちじにす。北史、竇泰傳に「秦父兄戰死」

【戰争】 たたかふ。たたかひ。袁桷「承平五十載、不識戰與争」

【戰後】 いくさのち。張喬「故里行人戰後疎、青崖津寄白雲居」

【戰悚】 ふるひおそる。(震悚)。晉書、羊祜傳に「夙夜戰悚、以榮爲憂」

【戰陣】 いくさのそなへたて。博奕論に「求之于戰陣、明非孫吳之倫也」

【戰捷】 たたかひかつ。劉志に「亮在

【戰俘】 おそれをののく。懣懣、怖悸。晉書に「狼承大禮、憂懼戰悸」

【戰略】 いくさのほかりごと。鄭畋「習起窮之兵書、用關張之戰略」

【戰國】 交戦中のくに。史記に「凡天下戰國七、燕處弱焉」周の威烈王より秦始皇帝の天下を統一せしまで二百四年間の稱。

【戰堡】 とりて。ちんや。(營堡)。蘇轍

もの。輟耕錄に「唐有傳奇、宋有戯曲、金有院本雜劇、其實一也」

【戯言】 たはむれの、とば。史記に「史佚曰、天子無戯言」

【戯弄】 たはむれもあそぶ。魏文帝「余于他戲弄之事、少所喜」

【戯作】 たはむれに作りたる文章。又は、著書。

【戯狎】 たはむれなる。遼史に「好戯狎、不喜繩檢」

【戯毬】 まりをもあそぶ。夢溪筆談に「嘗夢至一處、水殿中觀宮女戲毬」

【戯鴻】 文字の筆勢を形容していふ語。張彦遠「鍾繇書、意氣密麗、若飛鴻戲海、舞鶴遊天」

【戯戲】 時つ貌。七發に「險險戲戲」

【戯言】 おどけ。中論に「君子口無戯言、言必有防」

【戯像】 あそびたのしむ。詩經に「敬天之怒、無敢戲豫」

【戴】 タイ。丁代切。隊。【戴】 サイ。作代切。隊。

【戴白】 としより。白髪を戴くよりいふ。陸游「鄰曲今年又有年、垂髫戴白各欣然」

【戴勝】 「動」ふぶどりの異名。

【城外羅戰堡】

【戰智】 ちんやをきそふ。中説に「疆國戰兵、霸國戰智」

【戰備】 戦争の用意。漢書に「行必爲戰備、止必堅營壁」

【戰慄】 ふるひおそる。法苑珠林に「遍體戰慄、身毛悉豎」

【戰慄】 をののきおそる。(股慄)。論語に「周人以粟、曰、使民戰栗」

【戰懼】 前に同じ。晉書に「當時豫有位望者、咸戰懼失色」

【戰兢】 たたかひをののく。後漢書に「承事陰后、夙夜戰兢」

【戰艘】 いくさぶね。吳萊「東都昔奔潰、南海紛戰艘」

【戰鋒】 たたかひのほこさき。漢書に「漢兵遠圖窮寇、戰鋒不可當也」

【戰戰】 おそる貌。書經に「小大戰戰、罔不懼于非辜」

【戰擊】 たたかふ。(鬪擊)。新論に「猶隨人指授、而能戰擊者、教習之功也」

【戰艦】 いくさぶね。(軍艦、鬪艦、戎艦)。晉書、陶侃傳に「侃乃以運船爲戰艦」

【戰懼】 ふるひおそる。(震懼)。西征賦に「心戰懼以兢悚」

【戰鬪】 たたかふ。たたかひ。左傳に「喜有施舍、怒有戰鬪」

【戴星馬】前額に白毛ある馬。爾雅に見ゆ。
【戴星而往】春秋に「宓子賤爲單父宰、彈琴不下一堂而單父治、巫馬期爲單父宰、戴星出戴星入、而單父亦治」
【戴盆望天】同時に二事を兼行不能はざるに喩ふ。後漢書に「第五倫論諸外戚曰、苦身待士、不知如爲國、戴盆望天、事不兩施」

【十六畫】

【戡】

ク、ゴ。權俱切。虞。ほ（載）。

戸部

【戸】

コ、ケ。後五切。巽。まもる（護）。い（住家）。とどむ（止）。あな（穴）。あや（文采）。飲酒の量（上戸、下戸）。湯の樂の名。説文に「中門を戸といふ、象形」。戸大。大酒する人なをいふ。白居易「戸大嫌甜酒」。戸口。ひとかす。漢書に「黃霸以内外寛内明、得吏民心、戸口歲増、治爲天下第一」。一家のあり。開元戸令に

【尻】シ。組里切。紙。なすところ。なすこと。左傳に「夫上之所爲民之歸也」。【所傳】その受け傳ふる事柄。【所感】心に動き思ふところ。儀禮、傳に「妊子之時、必謹所感」。【所詮】畢竟。歸するところ。法苑義林章に「所詮法者、所詮義也、名四字者、能詮文也」。【所管】その管理するところ。【所謂】いはゆる。いふところ。大學に「所謂誠其意者、毋自欺也」。【所轄】その管轄するところ。【所懷】その思ふところ。王令「南來日日訪人才、始得清詩副所懷」。【所向無敵】兵の向ふ所、敵する者無し。諸葛亮「因天之時、就地之勢、依人之利、則所向無敵、所擊者萬全矣」。

【房】ハウ、バウ。符方切。陽。ハヤ（室）、す（巢窠）、い（家）、やつ（箭室）、ふ（まないた）（牛體の頰）そひ（二十八宿の一）。【房室】後漢書に「帝從三輔言、遂起太學、更開拓房室」。【房杜姚宋】四人の賢明なる宰相。房は房喬（字は玄暉）、杜は杜如晦（字は

【所】

シヨ、ソ。疏舉切。語。ところ（處、故）。る、る（受身の詞）。ほど、ばかり（程）。説文に「斤に従ふ、戸の聲」。【所天】いたなき敬ふ所の人をいふ。即ち、臣は君を、子は父を、妻は夫を所天とす。宋史に「堯舜篤善道、垂化、而民謂之所天」。【所化】佛の弟子。法華經に「如是等大士華光佛所化」。【所用】使ひ用ゐるもの。【所以】なすところ。ゆゑ。ゆゑん。中庸に「博厚所以載物也」。【所由】その事の原因するところ。論語に「子曰、視其所由、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」。【所生】父母をいふ。詩經に「無忝爾所生」。【所在】ところ。後漢書、陳蕃傳に「致令赤子爲青、豈非所在貪虐使其然乎」。【所有】そのもてるもの。【所見】その見るところ。み、み。晉書に「何所聞而來、何所見而去」。【所病】憂苦するところ。史記に「人之所病、病疾多」。

【所得】收得。利益。智度論に「一入佛法寶山、都無所得」。【所務】その務とする事柄。【所期】目的。めあて。南史、蔡約傳に「武帝謂曰、今用卿爲近藩上佐、想副我所期」。【所爲】なすところ。なすこと。左傳に「夫上之所爲民之歸也」。【所傳】その受け傳ふる事柄。【所感】心に動き思ふところ。儀禮、傳に「妊子之時、必謹所感」。【所詮】畢竟。歸するところ。法苑義林章に「所詮法者、所詮義也、名四字者、能詮文也」。【所管】その管理するところ。【所謂】いはゆる。いふところ。大學に「所謂誠其意者、毋自欺也」。【所轄】その管轄するところ。【所懷】その思ふところ。王令「南來日日訪人才、始得清詩副所懷」。【所向無敵】兵の向ふ所、敵する者無し。諸葛亮「因天之時、就地之勢、依人之利、則所向無敵、所擊者萬全矣」。

【房】ハウ、バウ。符方切。陽。ハヤ（室）、す（巢窠）、い（家）、やつ（箭室）、ふ（まないた）（牛體の頰）そひ（二十八宿の一）。【房室】後漢書に「帝從三輔言、遂起太學、更開拓房室」。【房杜姚宋】四人の賢明なる宰相。房は房喬（字は玄暉）、杜は杜如晦（字は

【所】シヨ、ソ。疏舉切。語。ところ（處、故）。る、る（受身の詞）。ほど、ばかり（程）。説文に「斤に従ふ、戸の聲」。【所天】いたなき敬ふ所の人をいふ。即ち、臣は君を、子は父を、妻は夫を所天とす。宋史に「堯舜篤善道、垂化、而民謂之所天」。【所化】佛の弟子。法華經に「如是等大士華光佛所化」。【所用】使ひ用ゐるもの。【所以】なすところ。ゆゑ。ゆゑん。中庸に「博厚所以載物也」。【所由】その事の原因するところ。論語に「子曰、視其所由、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉」。【所生】父母をいふ。詩經に「無忝爾所生」。【所在】ところ。後漢書、陳蕃傳に「致令赤子爲青、豈非所在貪虐使其然乎」。【所有】そのもてるもの。【所見】その見るところ。み、み。晉書に「何所聞而來、何所見而去」。【所病】憂苦するところ。史記に「人之所病、病疾多」。

【房】ハウ、バウ。符方切。陽。ハヤ（室）、す（巢窠）、い（家）、やつ（箭室）、ふ（まないた）（牛體の頰）そひ（二十八宿の一）。【房室】後漢書に「帝從三輔言、遂起太學、更開拓房室」。【房杜姚宋】四人の賢明なる宰相。房は房喬（字は玄暉）、杜は杜如晦（字は

【扁】

ヘン、ベン。補典切。鏡。ハン、ホン。字袁切。元。

【五畫】

【扁】ヘン、ベン。補典切。鏡。ハン、ホン。字袁切。元。

【房】ハウ、バウ。符方切。陽。ハヤ（室）、す（巢窠）、い（家）、やつ（箭室）、ふ（まないた）（牛體の頰）そひ（二十八宿の一）。【房室】後漢書に「帝從三輔言、遂起太學、更開拓房室」。【房杜姚宋】四人の賢明なる宰相。房は房喬（字は玄暉）、杜は杜如晦（字は

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才女】 才女。杜甫「燕趙休矜出佳麗、宮闈不礙選才人」。才あるひと。左傳に「昔高陽氏、有才子八人」。魏志に「才分所長、然稱臨苗尤美」。晉書に「才地、清操過人、自負才地高華、恆有宰輔之望」。才伎、うてまへ。(伎倆)。才名、才ありといふ評判。杜甫「才名四十年、坐客寒無氈」。才秀、才智ひいづ。晉書に「觀朝榮、則敬才秀之士」。才俊、才のすぐれたるもの。晉書に「君性烈而才俊、其能免乎」。才思、才のはたらき。南史に「仲寶少孤貧、篤志好學有才思」。才彥、才のひいてたるもの。韋應物「明世重才彥」。才格、はたらきのしながら。杜甫「吾觀鸚鵡夷子、才格出尋常」。才倍、才智常人に倍す。白居易「才難倍、無益於理矣」。才氣、はたらき。史記に「籍長八尺、力能扛鼎、才氣過人」。才能、才のひいてたるもの。後漢書、班固

傳に「性寬和容、不才而高、人諸儒以是慕之」。才略、はたらきあるはかりごと。晉書、明帝紀に「性至孝有文武才略」。才捷、才智さとし。魏志、注に「臨淄侯植、以才捷愛幸」。才華、心のはたらき。顔氏家訓に「才華不為妻子所容」。才量、才智と度量と。金史に「平日以才量稱」。才智、心のはたらき。吳志、注に「惠好學有才智、後以功封晉興侯」。才短、心のはたらき少し。世説に「伯仁爲人、志大而才短」。才筆、すぐれたる文章。又、すぐれたる筆跡。北史に「延儒涉獵墳史、頗有才筆」。才望、はたらきあるはまれ。晉書に「負其才望、志匡世難」。才雄、はたらきすぐれたり。盧照鄰「公業負奇志、結交盡才雄」。才質、はたらきとまればつきと。晉書に「充女才質令淑」。才媛、才あるをんな。又、詩歌などにひいてたる女。唐書「才術、はたらきとてわざと。唐書「以才術行、擢者十不能一」。才業、前に同じ。蘇軾「如君才業真堪用、願我衰遲不足論」。

【才髦】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才調】 おもむき。韻致。晉書に「才調秀出、見賞知音」。才器、はたらきある人から。晉書に「周浚引譚爲從事、愛其才器」。才學、才と學問と。後漢書に「帝嘗問弘通博之士、弘乃薦沛國桓譚、才學洽聞、幾能及揚雄劉向父子」。才藝、ちるとわざと。後漢書に「嚴才藝、以絞官宜」。才藻、智識文章。宋書、王誕傳に「誕字茂世、瑯琊臨沂人、中略少有才藻」。才辭、才氣ある辯論。たくみな辯口。晉書に「不致顯其才辭」。才學識、才と學と識と。唐書に「禮部尚書鄭惟忠嘗問、自古文士多、史才少何耶、對曰、史有三長、才學識、世

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【才】 才のひいてたるもの。白帖に「李季卿在朝、薦進才髦」。才貌と容貌と。蔡邕別傳に「張衡死日、蔡邕母始懷孕、二人才貌甚類、人云、豈是衡後身」。晉書、潘岳傳に「岳少以才穎見稱」。才數、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。才慧、魏志、鍾會傳に「及壯有才數技藝、而博學精練名理」。

【手部】 才 扎 扱 扑 扒 打 拐 扒 村 托

【扎】 ① サツ、サチ。側八切。黠。② 扱に同じ。③ めく(扱)。

【扱】 ① ロク。歴徳切。職。② リョク、リキ。六直切。職。③ 著(ヤ)を指の間にさむ。④ しぼる(縛)。

【扑】 ① ホク、ホク。普木切。屋。② ハウ、フ。匹候切。宥。

【扒】 ① ハイ、ヘ。布怪切。卦。② ハツ、バチ。布抜切。黠。③ ヘツ、ベチ。彼列切。屑。④ めく(扱)。

【打】 ① テイ、チャウ。都挺切。迥。② テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【打】 ① テイ、テ。都瓦切。馬。② テイ、テ。都瓦切。馬。③ テイ、テ。都瓦切。馬。④ テイ、テ。都瓦切。馬。

【抱志】^{ハク} すぐれたる志をいづく。晋書に「抱志未申之傑」

【抱負】^{ハク} いたくとおふと。又、かんがへ。計畫。後漢書に「四方學士、莫不抱負墳壟、雲會京師也」

【抱素】^{ハク} 飾らざるまを保つ。漢書に「兆民反本、抱素懷樸」

【抱痾】^{ハク} 病氣にかかりてゐる（懷痾）。朱熹「抱痾守窮處」

【抱膝】^{ハク} ひざをかかふ。白居易「邯鄲驛裏逢冬至、抱膝燈前影伴身」

【抱玉哭】^{ハク} 冤罪にかかりて悲しむ。楚の下和の故事に基づく。劉向「荆王立和抱其玉、晝夜哭」

【抱炭希涼】^{ハク} 行ふ所と望む所と相反するなふ。魏志注に「孫盛曰、信不足焉、而祈之物之必附、猶生於我、而望之必懷、何異挾冰求溫、抱炭希涼者之哉」

【抱薪救火】^{ハク} 害をのぞかんとてその害をばさるのみならず、卻つてその害をなすをなすの義。史記に「以地事秦、譬猶抱薪救火」

【抱關擊柝】^{ハク} 門の閉閉を警る者と拍子木を打つ者と、共に位ひきき役。荀子に「抱關擊柝、而不以爲寡」

【扞】^{ハク} カ、ナ、女加切。麻。

【拮】^{ハク} カ、ナ、女加切。麻。待可切。

【推】^{ハク} テイ、タイ、典禮切。齊。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【扞】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【拮】^{ハク} テイ、タイ、直皆切。住。

【抹】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【扞】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【拮】^{マク} マク、マイ、莫貝切。隊。

【抵罪】^{テイ} つみにあつ。史記に「傷人及盜抵罪」

【抵當】^{テイ} ひきあて。衛所「以令不得抵觸人」

【扞】^{テイ} 撃つ。蘇秦見、説趙王于華屋之下、扞掌而談。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拮】^{テイ} チツ、チチ。數栗切。實。

【拵】

【拵】

リウ、ル。力九切。有。ひれる(捫)。

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【拵】

【招喚】カウシヨク。よぶ。册府元龜に「令招喚不得輒傷害」

【招提】カウシヨク。寺をいふ。(拓提。釋書に「招提菩薩、皆古佛號、故寺稱招提」)

【招集】カウシヨク。まねきあつむ。後漢書に「招集豪傑、曉誘羌戎」

【招搖】カウシヨク。さまよふ。漢書に「飾玉棺以舞歌、體招搖若永望」

【招魂】カウシヨク。死者を用ひ祭る。死者のたましひをまねきかへす。史記、屈原傳贊に「余讀離騷天問招魂哀郢、悲其志」

【招募】カウシヨク。のる。又、つづのられたる兵士。後漢書に「選練武衛、招募猛士」

【招會】カウシヨク。よびあつむ。論衡に「待士下客、招會四方」

【招辟】カウシヨク。まねきめす。蔡邕、前後招辟使三人曉諭

【招牌】カウシヨク。かんばん。看板。莊子に「自虞氏招仁義、以撓天下也、天下莫不奔命於仁義」注に「招牌、今人言招牌」

【招聘】カウシヨク。禮を以てまねく。梁書、武帝紀に「上以時招聘」

【招誘】カウシヨク。まねきいざなふ。晉書に「或招誘安撫、以爲己用」

【招慰】カウシヨク。まねきやすんず。後漢書に「今可遣使招慰、與共合力」

【招攬】カウシヨク。よびとる。陸機「招攬遺老、與之遊業」

【招撫】カウシヨク。來りしたがはしむ。後漢書に「屯伊吾、以招撫之」

【招鷹】カウシヨク。さしまねく。荀子に「呂尙招鷹、殷民懷」

【招遊】カウシヨク。まねきむかふ。李白「灑掃黃金臺、招遊青雲客」

【招世士】カウシヨク。世間より歡迎せらるる士。莊子に「招世之士與朝、中民之士榮宦」

【招討使】カウシヨク。從ふ者を招き敵する者を討つ一方の總督の稱。宋史に「招討使掌收招討殺盜賊之事」

【招諷】カウシヨク。臣下より諫言せしめん爲、設け置く投書箱。宋史、高錫傳に「錫徒步詣、招諷、上書」

【拜】カウシヨク。ハ、ヘ。博怪切。卦。ハイ、ヘ。博怪切。卦。ハイ、ヘ。博怪切。卦。ハイ、ヘ。博怪切。卦。

【拜手】カウシヨク。手の邊まで頭を下ぐ。公羊傳に「趙盾逡巡北面、再拜稽首」注に「頭至地曰稽首、頭至手曰拜手」

【拜伏】カウシヨク。ながみふす。北史に「帝唯唯泣拜伏、竟無所言」

【拜年】カウシヨク。年始の禮。

【拜位】カウシヨク。官吏となる。易林に「遊於嘉國、拜位逢時」

【拜見】カウシヨク。みる、この敬稱。神仙傳に「詣門叩頭、求乞拜見」

【拜受】カウシヨク。たまものをいいただく。禮記に

【大夫親賜士、士拜受】

【拜官】カウシヨク。官職をうく。夢溪筆談に「唐制、丞郎拜官、即龍門、謝、今三司副使已上拜官、則拜于階上、百官拜于階下、而不拜階、此亦龍門故事也」

【拜命】カウシヨク。おほせをうけたまはる。又、官職をうく。岑參「拜命宣皇猷」

【拜迎】カウシヨク。禮拜してむかふ。禮記に「不敢拜迎、而拜送」

【拜春】カウシヨク。年始の禮。清嘉錄に「立春日爲春朝、士庶交相慶賀、謂之拜春」

【拜首】カウシヨク。つづしみて首をさぐ。書經に「皋陶拜首稽首颺言」

【拜恩】カウシヨク。めぐみをうく。北史に「受恩天朝、拜恩私室」

【拜除】カウシヨク。官に拜す。後漢書に「刺史太守以下、拜除京師」

【拜納】カウシヨク。つづしみてをさむ。戰國策に「願拜納之於王」

【拜授】カウシヨク。官をさづけあたふ。漢書、翟方進傳に「即軍中拜授」

【拜揖】カウシヨク。兩手を上下し、又、兩手を推して胸につくる禮。唐書、王績傳に「性簡放、不喜拜揖」

【拜詔】カウシヨク。みことのをうく。北齊書に「除清河太守、聲聞甚高、齊天祿中、大赦、郡先無一囚、羣吏拜詔而已」

【拜跪】カウシヨク。ながみてひざまづく。十六國春秋に「爾拜爾跪、而不祇命、斯小臣

之罪矣

【拜答】カウシヨク。つづしみて、たふ。唐書に「諫者拜答不暇」

【拜賀】カウシヨク。よろこびを申しあぐ。漢書、韓信傳に「信曰、大王自料勇悍仁強、孰與項王、漢王默然良久曰、弗知也、信再拜賀曰、唯」

【拜領】カウシヨク。たまものをいいただく。

【拜塵】カウシヨク。石崇の故事より、長者を逢迎すること、又、阿利事ふること、いふ。晉書に「石崇與潘岳、詔事賈謐、康成君、每出崇降車路左、望塵而拜」

【拜賜】カウシヨク。たまものをいいただく。禮記に「君賜車馬、乘以拜賜」

【拜趨】カウシヨク。拜してはしる。薩都刺「奉觴酌酒前拜趨」

【拜謁】カウシヨク。つづしみて上にまみゆ。漢書に「拜謁送迎甚謹」

【拜禱】カウシヨク。ながみいのる。宋史に「呂仲洙女名良子、父得疾、女焚香祝天、請以身代、女弟細良、亦相從拜禱」

【拜聽】カウシヨク。つづしみてきく。

【拜擢】カウシヨク。官にあげ用ゐる。後漢書に「其未及者、亦隨輩皆見拜擢」

【拜丈人】カウシヨク。米芾をいふ。石林燕語に「米芾好奇石、知無爲軍、初入州解、見立石頗奇、喜曰、此足以當吾拜、遂命取袍笏拜之、每呼曰石丈人、爲言者所憚、時人呼芾曰拜石丈

六畫

【根】カウシヨク。コン、ゴン。月恩切。元。下懇切。阮。おす、しりぞく(排擠)。

【括】カウシヨク。クワツ、クワチ。古活切。局。むすぶ(結)くくる(包括)とづ(閉)いたる(至)たつたす(檢)たづねきはむ(根刷)はす(答)に通ず(あふ(會)あつまる(倍)同じ)ともどり(響)に通ず。

【括弧】カウシヨク。文章又は數學に用ゐる符號、() () () () の如きもの。

【括約】カウシヨク。しかとしめくくる。

【括結】カウシヨク。すべくくる。易經に「括結否閉、賢人乃隱」

【括擲】カウシヨク。つまみくくる。盧照隣「蹇產推擲、支離括擲」

【括囊】カウシヨク。口をとちていはず。易經に「六四括囊、元咎无譽」

【拭】カウシヨク。シヨク、シキ。設職切。職。しづかなり(靜)。ぬぐふ(措)きよむ(清)ぬぐふ(拭)めをぬぐひ見る。注意して見る。漢書に「天下莫不拭目傾耳」

【拭拂】カウシヨク。ぬぐふ。韓偓「拭拂朝餐待眼明」

【拭淨】カウシヨク。ふききよむ。

【拈】カウシヨク。キツ、キチ。居質切。質。カツ、ケチ。訖詰切。詰。はたらく(撮)もつ(拈持)する(撮)せまる(逼)かか(掲)同じ(撮)あぐ(擧)もつ。

【拈据】カウシヨク。手口ともになす貌。詩經に「予手拈据」

【拯】カウシヨク。ショウ。之陵切。蒸。たすけすくふ(援救)。宋書に「世間聞之、馳往拯救、分食解衣、以贖其乏」

【拯恤】カウシヨク。すくひめぐむ。晉書に「宜時拯恤救其影困」

【拯弊】カウシヨク。衰へたるをすくふ。濟弊、救弊。北史に「遂有匡拯弊弊之志」

【拯贖】カウシヨク。すくひにきはす。北史に「以六鎮大肌、開倉拯贖」

【拯贖】カウシヨク。すくひあがなふ。蘇武報李陵書に「幸賴聖明、遠垂拯贖」

【推】カウシヨク。サン、ニン。尼漫切。寢。ジン、ニン。如甚切。寢。からむ(搦)。

【核】カウシヨク。カイ、ガイ。胡改切。賄。キ、ケ。許既切。未。カイ、戸代切。隊。キ、子貴切。未。カイ、戸(う)く(動)へる(減)う(う)く

【拱】 ①になふ(擲)②うごく。
③キョウ、ク。古勇切。腫。
居用切。宋。④キク。渠竹切。

⑤おぼたま(拱に通ず、大壁)⑥とる(執) ⑦こまめく(のり、のつとる(法))
⑧まをさ ⑨もろ手をこまめく。人を

敬ふ禮。禮記に「禮先生于道、禮而進、 正立拱手」何事をもせず。後漢書に 「天水隴西、拱手自服」

⑩拱手にして握る。孟子に「拱手之桐、梓人苟 欲生之」

⑪拱手して。⑫両手をこまめきてふしやく す。宋史に「肅然拱揖、不以名呼」

【拳】 ①キョウ、ク。古勇切。腫。
②キョウ、ク。古勇切。腫。

③キク、コク。居六切。屋。
④キク、コク。居六切。屋。

【拑】 ①ケン、ゴン。巨員切。先。
②ケン、クワン。己哀切。元。

③苦遠切。阮。
④かむ(風)⑤うれふ(憂)⑥れんころ (勤懇)⑦いとを(愛)⑧やうやし (恭)⑨ささげもつ貌(ちから(力))⑩ゆ み(考に同じ)。

【拒】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拓】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拔】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拕】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拖】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拗】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拘】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拚】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拒】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拓】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拔】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拕】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拖】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拗】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拘】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拚】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拑】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拒】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拓】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拔】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拕】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拖】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拗】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拘】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拚】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拑】 ①チ。丑豸切。紙。②イ。漢爾切。 紙。③チ。テ。陳知切。支。④イ。 余支切。支。⑤タ。徒可切。笱。⑥イ。 齒者切。馬。

⑦さる(去)⑧うつ(拍)⑨ひく(拽) ⑩ひらく(拆)⑪くはふ(加)⑫おほい なり。

【拒】 ①ケフ、コフ。迄葉切。葉。 ②ラフ、ロフ。落合切。合。

【拓】 ①くじく(拉)②やぶる(擄) ③サク、シヤク。色責切。陌。

④サク、ソク。測角切。覺。 ⑤とる(擄)⑥たすく(扶)⑦さしと る(刺取)。

【拔】 ①エツ、エチ。羊列切。屑。 ②エイ、エイ。以制切。霽。

③エイ、エイ。時制切。霽。 ④ひく(曳、引、拖)。

【拕】 ①身をひく。職を退く時などに 用ゐる語。

【拖】 シフ、ツフ。是執切。耕。 ①ひるふ、とる(擡)②をさむ (收斂)③ゆくて(射隼)④とふ(十に通 じ用ゐる)。

【拗】 ①ひるふ。錄異記に「李跳拾得 小石」

【拘】 ①ひるひあつむ。

【拘】 ①拾集。②拾ひひとる。袁淑、拾撻遺 餘。晉口所便。

【拚】 ①かむ(風)②うれふ(憂)③れんころ (勤懇)④いとを(愛)⑤やうやし (恭)⑥ささげもつ貌(ちから(力))⑦ゆ み(考に同じ)。

【拑】 ①ケン、ゴン。巨員切。先。 ②ケン、クワン。己哀切。元。

【拒】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拓】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【拔】 ①コブ、シにてうつ。南史に「輒 忿拳打車壁」

【手部】 拾拿拑拒拓拔拕拖拗 拍抄搯棟搨拾

〔手部〕 旋 拵 捏 揅 揅 搥 搥 搥 揅 揅 揅 搥 揅 搥 搥

旋

セン。旋の俗字。
①サウ、セウ。師交切。香。
②所教切。效。③セウ。思邀切。

拵

①カスむ(揅) ②はらふ(拂) ③かる(艾) ④サカサ(支) ⑤のぞく(除)
【拵】サカサ(支) ⑥のぞく(除)
【拵】サカサ(支) ⑥のぞく(除)

捏

①オス(捺) ②からむ(摺) ③ひねりあつむ(捻聚)

揅

①シヨウ、ソ。荷勇切。腫。
②シヨウ、ソ。所據切。御。③シヨウ、ソ。色句切。遇。④シヨウ、ソ。沃。⑤シヨウ、シユ。先侯切。尤。

揅

①ツツしむ(疎に同じ) ②敬(あぐ(上)) ③うごく(動) ④よそふ(裝) ⑤つかぬ(束) ⑥しほる(縛) ⑦とる(撒) ⑧同じ(取)

拵

エン。與專切。先。
①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

揅

①オス(損) ②オス(損)

揅

①オス(損) ②オス(損)

拵

ケイ。拵に同じ。

八畫

揅

①トク。他徳切。職。②ウツ(打)

搥

①ワン。烏貫切。翰。②烏丸切。寒。③ウツ、ウチ。好勿切。物。

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

揅

①ウツ(打) ②ウツ(打)

〔手部〕 拵 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥 搥

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

拵

①オス(損) ②オス(損)

【掬】をいふ。宋史、寇準傳に「初丁謂出準門、至參政事、甚謹、嘗會食中書、羹汗準鬚、謂起徐拂之、準笑曰、參政、國之大臣、乃爲官長、拂鬚耶、謂愧之」

【擗】春切。眞。①ロン。盧昆切。元。②リン。龍。③つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【授命】いのちをなげ出してはたらく。論語に「見利思義、見危授命」

【授受】授くると受くると。孟子に「男女授受不親」

【授業】生業を興ふ。又、わざを教へさづく。漢書、董仲舒傳に「孝景時爲博士、下帷講誦、弟子傳以久次相授業、或莫見其面」

【授賞】たまはるべき。公羊傳、注に「明君見勞授賞」

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

【擗】つらぬく(貫)④えらぶ(擇)。

〔手部〕 掬 搦 擗 授 掉 拈 拞 拞

【掣】 ひく貌。海賦に「或掣掣洩洩」。洩子裸人之國。掣斷。ひききる。張養浩「麒麟掣斷黃金銷」。

【擗】 ヒョウ。悲陵切。蒸。やなぐひ(箭筒)。やづつ(ふた(箭筒蓋))。

【接】 フ。色甲切。洽。セフ。檄類切。葉。セツ。慣用音。ハル(交)。あふ(合)。會。うく(受)。もつ(持)。つぐ(續)。つらなる(連)。ちかづく(近)。かつ(勝)。さしはさむ(挾に同じ)。もつ(持)。

【接刃】 ばものをあつ。漢書に「爭接刃于公之腹、以復其怨、而成其功名」。戰端をひらく。晉書に「大軍相臨、交鋒接刃」。

【接比】 ちかづく。漢書に「吳越與楚接比」。

【接木】 木をつぐ。つぎ木。金史、曹望之傳に「栽花接木」。

【接引】 せひく。宋書、張敷傳に「少有三盛名、高祖見而愛之、以爲世子中軍參軍、敷見接引」。

【接手】 うけとる。又、手をたつらぬ。戰國策に「接手俛首欲言、而不取」。國策に「接手俛首欲言、而不取」。

【接好】 よしみをまじふ。和睦す。國語に「兩君偃兵接好」。

【接延】 延賓客をもてなす。舊唐書に「請於私居接延賓客」。

【接近】 ちかづく。宋史に「至境首接近」。向秀「余少與嵇康呂安、居止接近」。

【接武】 後者の足前者の跡の半をふむ。禮記に「堂上接武、堂下布武」。

【接侍】 あしらひもてなす。晉書に「侍從左右、甚見接待」。

【接界】 さかひをつぐ。史記に「楚魏與秦接界」。

【接納】 引き入れて接見す。揚彪「每蒙接納、私自光慰」。

【接樹】 花今復古。木に近よりまじる。庚肩吾「新枝漸接樹、故凍欲含流」。

【接膝】 ひざをつきあはす。陶潛「願接膝以交言」。

【控】 コウ、ク。苦貢切。送。枯公切。東。カウ、コウ。苦江切。江。ひく(引)。つぐ(告)。とどむ(止)。なぐ(投)。のそく(除)。ひく(うつ(打))。

【控制】 おさへとどむ。とりしまる。唐書に「忠嗣帶四將印、勁兵重地、控制萬里」。

【控咽】 要所をしめつく。周邦彥「扼控咽、屏藩表裏」。

【控御】 馬をつかふ如くに人を制し治む。晉書に「善子懷撫、短于控御」。

【控取】 前に同じ。庾信「控取五十州、風行數千里」。

【控禦】 ひかへとどむ。宋史に「控禦以扼其衝」。

【控轡】 くつわをひかふ。呂氏春秋に「約審之、而以控其轡」。

【揚】 テキ、チャク。他回切。灰。かか(挑)。

【推】 シ。昌維切。支。しりぞく(排、御)。おす(盪、擠)。すすむ(進)。うつす(移)。ゆづる(讓)。あたふ(與)。ゆたぬ(讓)。おす。

【推知】 おしはかりてしる。唐書に「藻翰精富、一時流輩推尚」。

【推服】 たふとびて従ふ。南史に「明達果斷、爲當時推服」。

【推効】 吟味を遂ぐ。宋書に「官吏推効累三百日、獄未具」。

【推恩】 愛情を人の身に及ぼす。孟子に「故推恩足以保四海」。

【推原】 たづぬ。陸游「浩歌陌上君無怪、世譜推原自楚狂」。

【推問】 吟味す。晉書に「其父母尋訪得李氏、推問皆符驗」。

【推移】 うつりかはる。楚辭に「聖人不凝滯於物、而能與世推移」。

【推量】 おしはかる。李商隱「驗推或推之、欲無入得乎」。

【推輓】 車を後より推し、前より輓く。轉じて、人をおしすすむるにいふ。左傳に「衛君必入、夫二子者、或輓之、或推之、欲無入得乎」。

【推測】 おしはかる。李商隱「驗推測、成則如周卜」。

【推尊】 すすめたつとぶ。麻九疇「畫史推尊爲第一」。

【推敲】 詩句を鍛煉するをいふ。湘素

【推先】 おしすすめて第一とす。後漢書に「然皆推先子慎」。

【推舟】 ふれを手にておしやる。論語、疏に「能陸地推舟而行」。

【推步】 天文学上の語。數へておしはかる。書經、疏に「故命羲和、以算術推步」。

【推究】 おしきはむ。周書に「精心悉意、推究事源」。

【推來】 ゆくすゑの、ことをおしかんがふ。揚雄「因往以推來、雖千世無不可知也」。

【推治】 おしはかりたす。周禮に「推治獲實」。

【搦】

シユン、ツユン。辭閣切。震。

【搦】

ナツ(摩)る。なぐさむ(慰)。

【搦】

カウ、キヤウ。胡首切。庚。

【搦】

エイ、イヤウ。永兵切。庚。

【搦】

ウツ(擊)る。さす(刺)る。ぬく(抜)る。

【搦】

ヤウ。與章切。陽。

【搦】

アガ。飛ぶ。擧る。おこる。

【搦】

アガ。飛ぶ。擧る。おこる。

【搦】

アガ。飛ぶ。擧る。おこる。

【搦】

アガ。飛ぶ。擧る。おこる。

【搦】

シウ、シユ。疏鳩切。尤。

【搦】

おほくのこころ(衆意)。

【搦】

つまる(聚)る。つよくばやし(勁疾)。

【搦】

さげび(失行聲)る。もむ(求)る。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

【搦】

カフ(交易、變改)。

〔手部〕 換 拵 拵 拵 拵 拵 拵 拵

揚、甚自得也。

【揚歌】ハヤ、はやしてうたふ。孫楚「牧豎吟」嘯於行陌、舟人鼓棹而揚歌。

【揚推】ハヤ、揚はあく、推はひく、あげひきてその趣旨を陳ぶ。漢書、叙傳に揚推古今、鑿世盈虛。

【揚厲】ハヤ、たかくあく。韓愈「揚厲無前之偉績」。

【揚播】ハヤ、あく。あがる。ちる。ちらす。呂氏春秋に「舟中之人盡揚播入于河」。

【揚聲】ハヤ、こゑをはりあく。孔融「天下談士、依以揚聲」。

【揚箴】ハヤ、あふられあがる。あふりあく。王禹偁「撰批任揚箴」。

【揚擲】ハヤ、あげふるふ。舊唐書に「米至京師、或砂礫糠粃、雜乎其間、開元初、詔使揚擲而較其虛實」。

【揚州之鶴】ハヤ、衆善を一身にあつめんと欲するに喩ふ。蘇軾「可使食無肉、不可居無竹、無肉令人瘦、無竹令人俗、人瘦尚可肥、俗士不可醫、傍人笑此言、似高還似癡、若對此君、仍大嚼、世間那有揚州鶴」注に「昔有客、言志、或願爲揚州刺史、或願多財貨、或願騎鶴上揚州、其一人曰、腰纏十萬貫、騎鶴上揚州、蓋兼三人之欲也」。

【換】

セン、ネン。而宣切。先。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

【換】

カフ(交易、變改)。

支。主榮切。紙。慣用音。
 ①はかる(量度)②さだむ(定)③こころむ(試)④のぞく(除)⑤はかる(度)⑥うごかす(擗)⑦あつまる、聚る貌⑧むちうつ。
 【搨知】はかりさとり。漢書に「搨知其指、不致發言」
 【搨度】おしはかる。柳宗元「退自搨度、惕然汗流」
 【搨摩】己の心を以て人の心をおしはかる。朱熹「搨摩心事、惟黄卷、料、理家傳、亦素書」
 【擗】シヨク、シキ。節力切。職。つかむ(拵)②ぬぐふ(拭)③うつつ(衣上より撃つ)④ホウ、フ。方荷切。有。ケイ、ク。傾哇切。齊。あたると(中)⑤さく(到)⑥テイ、タイ。丑例切。齊。都黎切。齊。テキ、チャク。他歴切。擗。を捕ふる首飾)⑦すつ(擗)⑧さす(指)⑨たはむ(戯)⑩とる(取)⑪ラツ、ヲチ。耶達切。曷。とぐ(研)⑫タウ、チャウ。除耕切。庚。ふる(觸)⑬つく(撞)。

【擗】カイ、ケ。丘皆切。佳。苦戒切。卦。カツ、ケチ。訖切。點。ぬぐふ、する(摩)②つく(強突)③つづみの名(擗に通ず)④楽器の名(鼓に同じ)。
 【擗磨】すりみがく。桂海蟲魚志に「擗磨去皮」
 【擗鼓】鼓の名。唐書に「龜茲部有擗鼓擗鼓樓鼓」
 【擗】シユ、拳に同じ。
 【擗】シヤ、シユ。將由切。尤。つかぬ(束)②なきむ(斂)③あつむ(聚)④まかにす(細)⑤トソ、ドチ。佗没切。月。つきあたると(ふる)⑥ケツ、ゲチ。渠列切。月。渠調切。月。ケイ、去例切。かかぐ(たかくあぐ)⑦(高學)⑧になふ(擗)⑨おふ(負)⑩(反)⑪ながし(長)⑫しる(表標)⑬(疾)⑭(擗)⑮(擗)⑯(擗)⑰(擗)⑱(擗)⑲(擗)⑳(擗)㉑(擗)㉒(擗)㉓(擗)㉔(擗)㉕(擗)㉖(擗)㉗(擗)㉘(擗)㉙(擗)㉚(擗)㉛(擗)㉜(擗)㉝(擗)㉞(擗)㉟(擗)㊱(擗)㊲(擗)㊳(擗)㊴(擗)㊵(擗)㊶(擗)㊷(擗)㊸(擗)㊹(擗)㊺(擗)㊻(擗)㊼(擗)㊽(擗)㊾(擗)㊿(擗)。

【擗】新開雜詩等にかきのす。
 【擗】ながき貌。詩經に「葭莢擗擗」
 【擗】たがき貌。楚辭に「擗擗以鏡鏡」
 【擗】速にはしる貌。漢書、注に「擗擗疾驅貌」
 【擗】物のめけんとする貌。淮南子に「濟其擗擗」
 【擗】看板をいたす。周伯琦「明朝擗擗」
 【擗】心おこる貌。射雉賦に「眇箱擗擗」
 【擗】以擗擗、腕、驍、之、變態」
 【擗】すだれをかかぐ。韓偓「半身映竹輕聞語、一手擗簾微轉頭」
 【擗】物を用ゐるにその所を得ざるをいふ。淮南子に「以其所修、而遊三不用之鄉、猶擗山、上、善、火、井、中、操、釣、上、山、擗、斧、入、淵」
 【擗】カク、キヤク。各核切。陌。あらたむ(改)。
 【擗】キ。吁草切。微。クン。吁運切。問。コン、ゴン。胡昆切。ふるふ(奮)②ふる(奮)③ふる(振)④うごく(動)⑤そそぐ(灑)⑥つくす(竭)⑦ちらす(散)⑧さしづばた(塵)⑨しる(擗)⑩ふるふ(奮)⑪やぶれざる(擗)⑫擗。擗斥。ほしひまなり。又、奮迅なり。莊子に「至人者上闚青天、下潛黃泉、擗斥八極、神氣不變」
 【擗】はれをひろげうごかす。曹植

【擗】羽遊。清風」
 【擗沐】あらひ髪をふるふ義。擗沐といふに同じ。後漢書に「擗沐吐餐」
 【擗染】筆をふるふ紙をそむ。書畫をか。又、書畫。唐書、懷素傳に「無紙可書、種芭蕉、供擗染」
 【擗拳】ぶしをふりまはす。(振拳)書評に「歐陽詢書若草裏蛇驚、中略力士之擗拳」
 【擗涕】なみだをふるひ落す。晉書に「莫不北望擗涕」
 【擗毫】書畫をか。杜甫「擗毫落紙如雲煙」
 【擗散】柳宗元「日合邦之學者、論說辨問、貫穿上下、擗散而成、同、幽昏而大明」
 【擗掃】ふるひはらふ。陸游「忽然擗掃不不知」
 【擗筆】書畫をか。李頎「與來灑素壁、擗筆如流星」
 【擗畫】疾き貌。陸機「紛紜擗畫」
 【擗鞭】むちをふるふ。蔡邕「不動干戈、擗鞭而定」
 【擗灑】筆をふるひすすぐ。書畫をか。吳沖之「擗灑每被酒」
 【擗淚斬馬鬣】慈愛の心を以て法を行ふ。蜀志に「亮爲政無私、馬諫素爲亮所知、及敗軍、流涕斬之、而鬣其後」

【擗】コウ。古鄧切。徑。居層切。蒸。きびし(急)。
 【擗】たすく(扶)②あたると(抵)③シヨク、シユ。昌用切。宋。チヨウ、ゲチ。都離切。履。おしうつ(推擊)④すつ(棄)⑤おしうつ。
 【擗】サク、ソク。色角切。覺。相邀切。蕭。シヤク。息約切。臂うるとはしき貌②訓義③に同じ④擗に同じ⑤擗て小さき貌⑥訓義⑦に同じ⑧擗、擗に同じ。
 【擗爾】ほそくそけたる貌。周禮に「望其幅、欲其擗爾而織也」
 【擗】セツ、セチ。食列切。屑。タフ、テフ。直甲切。洽。エフ。與涉切。葉。テフ、デフ。徒協切。葉。えらびもつ(閑持)②セツ、セチ。先結切。屑。ちかぞふ(持數)③はかる(度)④カツ、ケチ。訖切。點。擗に通ず。ふさぐ(塞)⑤ひれる(燃)⑥ぬぐひけす(拭滅)⑦方正ならざる(擗契)⑧はかる(擗に同じ)⑨うちもつ(擗持)⑩うつつ、たたく。

【擗】カン。撼の本字。
 【擗】エン、チン。于元切。元。子眷切。霰。于願切。願。クワン、グワン。胡玩切。翰。ひく(引)②ひきとる(引取)③ぬく(抜)④刃の直くして上に向へること⑤たすく(扶)⑥たよると(たすく)⑦たすけ(救助)⑧まじはると(接)⑨ひきもつ(引持)⑩拵援は、順はす、一に、拔扈。一、希附(權強者)⑪援助。たすけ。後漢書に「招匈奴、迎烏桓、以爲援助」
 【擗】たすけかばふ。元稹「無親黨爲臣援庇」
 【擗】すくひの軍勢。
 【擗】前に同じ。
 【擗】たすけすくふ。舊唐書に「左右援拯、後得累居郡守」
 【擗】すくふ。すくひ。後漢書に「求援救、以濟其患」
 【擗】ふでをとる。字をか。魏志に「植援筆立成、可觀」
 【擗】あひ懸じてたすけあふ。
 【擗】すくひの糧食。
 【擗】クン、グン。渠菊切。先。ケン、グン。巨偃切。銑。あぐ(擗)②になふ(肩に物を擗ぐ)

搥 ソウ、ス。作孔切。董。總に同じ。

搥 カイ。居代切。隊。許既切。未。

搥 ヲソク。滌。ぬぐふ。拭。あらふ。とる。取。ぬぐふ。

搥 サイ。搥に同じ。

搥 ヲコ。ウ。胡故切。遇。搥に同じ。

搥 サ、セ。莊加切。麻。ガ、ナ。女加切。麻。サイ、セ。莊蛙切。

搥 セン。搥の俗字。

搥 シヤウ、サウ。七兩切。養。みがかく。磨。とぎあらふ。磨。滌。搥に同じ。

搥 テツ、テチ。丁結切。屑。なげうつ。搥。タウ、搥の俗字。トウ。

搥 キン、コン。居親切。問。擣欣切。文。

搥 ヲヒらく。排。オス。推。オ。行意被。推到。

搥 しひらく。排。クワ、ゲ。胡化切。偶。ゆたかなり。ひろし。寛。

搥 サイ、セ。昨回切。灰。搥内切。隊。サ、ザ。寸臥切。

搥 ひく。搥。おす。擠。なる。折。おす。擠。なる。折。おす。擠。なる。折。

搥 力くじけて逃ぐ。唐書に「每戦必爲先鋒。所擣推北」。

搥 摧折。くじく。毀折。撓折。漢書に「雷霆所擊。無不摧折」。

搥 摧抑。おさふ。鮑照。摧抑多。嗟思。摧抑。おさふ。鮑照。摧抑多。嗟思。

搥 摧折。くじく。毀折。撓折。漢書に「雷霆所擊。無不摧折」。

搥 摧折。くじく。毀折。撓折。漢書に「雷霆所擊。無不摧折」。

搥 摧折。くじく。毀折。撓折。漢書に「雷霆所擊。無不摧折」。

搥 摧折。くじく。毀折。撓折。漢書に「雷霆所擊。無不摧折」。

搥 摧破。くだけやぶる。くだけやぶる。後漢書に「鐵壁五校。莫不摧破」。

搥 摧挫。くじく。折挫。抑挫。元稹「電卷風收。盡摧挫」。

搥 摧剝。くづればがる。陸游「荒寒過吳宮。摧剝觀三禹穴」。

搥 摧陷。くだけおとしいる。兩史に「所至無不摧陷」。

搥 摧裂。くだけさく。蔡琰「慕我獨得歸。哀叫聲摧裂」。

搥 摧落。くだけちる。王粲「山川于是搖蕩。草木爲之摧落」。

搥 摧殘。くだけそこなふ。陳後主「摧枯樹影。零落枯蔭」。

搥 摧頓。くじく。論衡に「干將之刀。人不摧頓」。

搥 摧感。氣くじけ心うごく。吳志に「權益以摧感。言則限涕」。

搥 摧碎。くだけつぶす。蘇轍「歸來父老。崇尙畏摧碎」。

搥 摧稿。かかれ木をくだく。破れ易きをいふ。徐積「戰而北。若摧稿」。

搥 摧輪。わをくだく。新論に「摧輪則無以行舟」。

搥 摧擣。なれまがる。陸琳「摧擣棟梁。孤弱漢室」。

搥 摧擣。くじきうばふ。玉海に「神臂

搥 弓銘、電激星流、敵胆摧擣

搥 自碎、映空白煙走。陳與義「摧擊竟

搥 「至子覆、車而摧擣」

搥 「摧擣」胸をくじく。孫楚「遂陷首以

搥 「摧擣」其鋒擊之、無不摧擣

搥 「摧擣」摧擣、舟のともなくくじく。寰宇記に

搥 「摧擣」摧擣、舟のともなくくじく。寰宇記に

搥 「摧擣」摧擣、舟のともなくくじく。寰宇記に

搥 「摧擣」摧擣、舟のともなくくじく。寰宇記に

搥 「摧擣」摧擣、舟のともなくくじく。寰宇記に

搥 異相摩拂

搥 摩耶。佛。摩訶麻耶の略。唐に大衛

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

搥 摩訶。佛。摩訶。摩訶。摩訶。摩訶。

【檢】 〇ヨリ、ユ。於臈切。腫。

【擁】 〇おほふ(蔽) 〇いだく(抱) 〇もつ(持) 〇まもる(衛) 〇くま(曲隈) 〇かこ(範圍) 〇したがる(從) 〇さへさる(遮) 〇ささふ(障)

【擁抱】 〇かかへいだく。宋史、燕王德昭傳に「惟吉德昭于五歲、常乘小飛輿及小鞍鞍馬、太祖命黃門擁抱出入常從」

【擁立】 〇たすけたつ。

【擁護】 〇はしらをいだく。史記、齊世家に「莊公問崔杼病、遂從崔杼妻、崔杼妻入室、與崔杼自閉戶不出、公擁柱而歌」

【擁護】 〇はたをもつ。晉書に「長沙勳王擁護戎場」

【擁護】 〇書物をかかふ。本を所持す。裴邕「擁護書抱箱」

【擁腫】 〇はれあがる。莊子に「其大本擁腫、而不中繩墨」

【擁護】 〇たすけそだつ。漢書に「受遺武皇、擁護孝昭」

【擁護】 〇他を顧みずして苦學する義。翻譯名義集に「道超苦學、獨坐一室、以儒佛經典、繞座、手不釋卷、任塵擁室」

【擁護】 〇此篇議、皇父擁護

【擁護】 〇朝廷にて權力をほしいままにする。漢書、成帝紀論に「外氏擁朝」

【擁護】 〇軍勢をほしいままに出す。五代史に「太祖以其擁護、兵挫、失國威、遣劉捍代重師」

【擁護】 〇ほしいままに事をとりきむ。陳琳「擁護斷萬機」

【擁護】 〇ほしいままにはかりさだむ。漢書に「漢宗廟之禮、不得擁護」

【擁護】 〇權力をほしいままにする。漢書に「攝政擁權、而背宗室」

【擁護】 〇へん、ボン。符袁切。元。

【擁護】 〇もむ 〇みあらふ。

【擣】 〇チヤク。陟略切。藥。

【擣】 〇うつ(擊) 〇おく(置)。

【擣】 〇タク、ヂヤク。直格切。陌。

【擣】 〇タク、ダク。達各切。藥。

【擣】 〇えらぶ(選) 〇える(簡) 〇めきとる(拔取)。

【擣】 〇木をえらぶ。晉書、李充傳に「充曰、窮猿投林、豈暇擇木」

【擣】 〇よきものをえらぶ。宋書、謝靈運傳に「非龜非筮、擇其選、奇窮、榛閑徑、尋石覓崖」

【擣】 〇前に同じ。中庸に「擇善固執之者也」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇居處の善惡をえらぶ。説苑に「君子居必擇處、游必擇士」

【擣】 〇巨今切。侵。檢に同じ。

【擣】 〇もつ(持) 〇いそぎもつ。

【擣】 〇サイ、セ。仕壞切。卦。

【擣】 〇崇懷切。佳。

【擣】 〇とりひしく(拉) 〇そこなふ(損)。

【擣】 〇ダウ、ノワ。匿講切。講。

【擣】 〇さす(刺) 〇つく(撞)。

【擣】 〇ロ、ル。耶古切。擊。函に通ず。

【擣】 〇う(獲) 〇かすむ(掠)。

【擣】 〇セン、セン。時戰切。殿。

【擣】 〇もつ(有) 〇ほしいままなり

【擣】 〇ほしいままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擣】 〇思ふままにす(擣) 〇よる(擣)。

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【擗】 **擗** りあがる。孝經に「擗踊哭泣」

【攝政】天子に代りて大政を行ふ。又、その人。歐陽修「所謂攝政者、臣行君事之名也、伊尹周公、共和之臣」。

【攝理】人にかはりて事をなす。左傳に「士服景伯知楚、叔魚攝理」。儲與兮「ちちまる。楚辭に「衣攝葉以儲與兮」。

【攝然】やすらかなる貌。漢書に「天攝然、人安其生」。

【攝養】からだをやしなふ。庚信「小人垂攝養、岐路阻逢迎」。

【攝警】ふるひおそる。漢書に「輜重人衆、攝警者弗取」。

【擲】クワン。姑選切。剛。のつとる(剛)のうの、(魚)かかふる。

【擲】ラ。良何切。歌。剛可切。習。えらぶ(揀)さく(裂)。

【擲】クン、ゴン。擲蘊切。吻。居運切。問。

【擲】(取)ひらふ(擲に同じ)。

【擲】莫臥切。箇。擲に同じ。鐘の撃を受くる處。

【擲】鐘のしゅもくのあたるところ。周禮、注に「擲所擊之處、陸在鼓中」。

【擲】窟、而生光、有似夫陸。擲に同じ。擲に同じ。

【擲】子罕切。早。えらぶ(擲)むらがる(擲)おほふ(擲)むらがりたつ。史記、司馬相如傳に「擲立叢倚」。

【擲】あつまる。宋之間「廻合兮擲叢」。擲鋒成林、按較爲擲。

【擲】あつまる。漢唯暗歌に「擲下何擲、榮華各有時」。

【擲】龍脊切。龍。かかふる(擲)ひく、ひきつらなる(擲)かかふる(擲)手足のかがまる病(擲)たふ(擲)通ず。

【擲】ふたご。戰國策に「夫擲子之相似者、惟其母知之而已」。

【擲】手足のまがりて、のびざる病。柳宗元「可以已大風擲腕痠癢、去死肌、殺三蟲」。

【擲】あつまれる貌。漢唯暗歌に「擲下何擲、榮華各有時」。

【擲】龍脊切。龍。かかふる(擲)ひく、ひきつらなる(擲)かかふる(擲)手足のかがまる病(擲)たふ(擲)通ず。

【擲】ふたご。戰國策に「夫擲子之相似者、惟其母知之而已」。

【擲】手足のまがりて、のびざる病。柳宗元「可以已大風擲腕痠癢、去死肌、殺三蟲」。

【擲】益以銀子擲水。

【擲】かきまはす。部經「擲亂思爲停擲」。

【擲】かきみだす。元稹「擲動皆擲、燒化作流渾渾」。

【擲】いりみだるる貌。韓愈「擲擲爭附託、無入角雌雄」。

【擲】ガツ、ガチ。牙葛切。曷。にざる(把)うつ(擲)もつ(持)。

【擲】クワク、カク。厥縛切。葉。掬玉切。沃。

【擲】うちとる(擲取)もつ(持)とる(取)擲に同じ。つかむ。

【擲】にくをつかむ。戴復古「羣鴉擲肉開飛鳴」。

【擲】かんざしをつかむ。宋史に「有禁卒、白晝擲婦人金銀於市」。

【擲】つかみとる。つかみうつ。禮記「鷺蟲擲搏、不程勇者」。

【擲】つかみひく。淮南子に「擲琴撫絃、參彈復徵、擲擲擲擲」。

【擲】つかむ。下彬「探擲擲擲、日不替手」。

【擲】つかみくらふ。王鰲「擲如虎豹、奮擲擲擲」。

【擲】うでぐみす。うでまくりす。

〔手部〕 擲 擲 擲 擲 擲 擲 擲 擲 擲 擲

【擲】こひしたふ貌。漢書に「上所擲、以擲擲念我者、乃以平生容貌也」。

【擲】他干切。寒。ダン、ナン。乃且切。翰。ゆるむ(緩)ゆるし(緩)ちらす(散)ひらく(開)おさふ(按)。

【擲】書物をひらく。世説に「王戎滿床擲書」。

【擲】ゼにうちのおそびわざ。杜甫「擲錢高浪中」。

【擲】レイ、ライ。郎計切。響。所綺切。紙。釐亦切。レキ、リヤク。郎敵切。錫。レツ、レチ。力結切。屑。サイ、セ。所賣切。卦。をる(折)をる(折)。

【擲】(擲)うつ(擲に同じ)撃(擲)れちる(擲に同じ)擲(擲)ばらふ(擲)。

【擲】タウ。底朗切。養。クワウ、ワウ。戸廣切。養。シヤウ、サウ。止兩切。養。クワウ、ワウ。胡曠切。議。うつ(擲)むれ(黨に同じ)朋群(とどむ)退(擲)おしゆく(推行)うつ(擲)うつ(打)。

【擲】カウ、ケウ。古巧切。巧。カク。慣用音。みだる(亂)擲。かきまはす、つかむ(把)。

【擲】水をかきまはす。東京夢華錄

【擲】をさむ(收)おす(擲)かく(擲)ひらく(排)。

【擲】ワツ、チチ。紆勿切。物。れちりもとる(擲民)。

【支】シ。章移切。支。もつ(持)わかつ、わかる(分)かぞふ、かんぢやう(計算)えだ(枝に通ず)えだ(庶)ささふ(拄)わりふ(券)あてあし(肢に通用す)あて(給與)えと(棍に同じ)説文に「竹枝を去るなり、手、中竹を持するに从ふ」。

【支】次子。又、妾の子。禮記に「支子不祭、祭必告於宗子」。

【支】十二支と十干と。えと。

【支】本流より分かれたる水。えだか。莊子に「九州名川三百、支川三千、小者無數」。

【支】まかにわかつ。戰國策に「支三方城膏腴之地、以薄鄰」。

【支】あてもちある。宋史に「雜物庫掌受内外雜輸之物、以備支用」。

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支】しはらひ。しだし。妾腹

【支部】 支岐 岐 岐 岐 岐 岐 岐

【支抗】^シ さまへふせぐ。晉書に「攻無支抗」。夏口武昌無相支抗。

【支別】^シ わかれ。後漢書に「其先魏之支別」。食采馮城。因以氏焉。

【支吾】^シ ささふ。又、からかふ。史記に「諸將饑服。莫敢支吾」。

【支券】^シ てがた。左券。

【支流】^シ 本流より分れてながるる川。唐書に「佛代國有江。支流三百六十」。

【支計】^シ けいさん。晉書に「置度支尙書。專掌軍國支計」。

【支胃】^シ えだわかれのちすぢ。唐書に「自魏訖唐。支胃扶疏」。

【支柱】^シ ささへばしら。(支柱)。

【支持】^シ ささへもの。杜甫形容真潦倒。答效莫支持。

【支派】^シ えだわかれ。北齊書に「是以具書其支派」。

【支脈】^シ えだわかれのすぢ。宋无支脈。崑崙析。胚渾混沌先」。

【支庶】^シ 妾腹の子。漢書に「封吳芮庶子二人。爲三列侯。故贊曰慶流支庶」。

【支移】^シ うつしやる。宋史に「移此輪彼。移近輪遠。謂之支移」。

【支給】^シ わけあてがふ。

【支路】^シ えだみち。(岐路)。

【支稿】^シ れきらひものを分ち與ふ。宋史に「以常例公用器皿錢二十萬緡。支

稿軍民」。

【支孽】^シ 妾腹の子。(庶孽)。史記に「大巨萌。支孽莠夷」。

【支離】^シ はなれちる。徐鉉「全眞誰見德支離」。軍障の名。左傳に「爲支離之卒」。注に「陣名」。

【支屬】^シ わかれのつづき。漢書に「宗族支屬。至三千石者十餘人」。

【支離滅裂】^シ ちりちりばらばら。莊子に「天支離其形者。猶以養其身。足全其天年。又況支離其德者乎」。駱賓王「生涯一滅裂。岐路幾徘徊」。

【岐】^キ。去智切。眞。かたむく(傾)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

【岐】^キ。古委切。紙。居儻切。眞。キ、ギ。過委切。紙。居儻切。眞。まくらす(枕)。

十六畫

支 部 首 (父)

【支】^シ ホク。普木切。屋。ハク、ホク。匹角切。覺。

【父】^フ ホク。支に同じ。文に異なり。

【收】^{シウ} シウ、シュ。式周切。尤。舒救切。宥。

【收】^{シウ} シウ、シュ。式周切。尤。舒救切。宥。

【收】^{シウ} シウ、シュ。式周切。尤。舒救切。宥。

【收】^{シウ} シウ、シュ。式周切。尤。舒救切。宥。

【收事】^{シウ} 賦税と使役と。漢書、宣帝紀に「毋收事。盡四年」。

【收拾】^{シウ} ひろふ。ひろひあつむ。歐陽修「殘章與斷葉。草草收拾」。

【收恤】^{シウ} 貧者をとりにてめぐむ。史記に「賞賜長老。收恤孤獨」。

【收按】^{シウ} とらへて吟味す。漢書に「於是收按致法」。

【收容】^{シウ} とりいれる。利益をなさむ。

【收益】^{シウ} とりいれたる。

【收納】^{シウ} とりあげてなすむ。周禮に「任之以事。而收教之」。

【收採】^{シウ} とらへ。北史に「不謂天恩復垂收採」。

【收捕】^{シウ} ばたを取りをさむ。王通「秦師收捕亦西遷」。

【收得】^{シウ} 穀類などをとりいれる。

【收掠】^{シウ} 人をころし財物をつばふ。晉書に「可分遣諸將。收掠野穀也」。

【收率】^{シウ} 手に入れひきある。史記に「大王收率天下。以實秦」。

【收族】^{シウ} 家族をまとも。禮記に「敬宗。收族」。

【收接】^{シウ} いれちかづく。田錫「閨門有司。未便收接」。

【收陰】^{シウ} 織女神の異稱。荆楚歲時記に「織女神名收陰」。

【收粟】^{シウ} もみをとりにける。唐書に「歲

收粟二十萬石」。

【收集】^{シウ} なさめあつむ。後漢書に「總攬賢才。收集明智」。

【收稅】^{シウ} みつきなとりいれる。唐書に「定天下賦戶。以月收稅」。

【收葬】^{シウ} ひきとりてはうむる。魏志に「袁譚死。王循詣太祖。乞收葬」。

【收載】^{シウ} とりをさめぬす。史記に「際公常下收載之」。

【收輪】^{シウ} つりいとをなさむ。釣をやむ。陰鏗「林寒正下葉。釣晚欲收輪」。

【收撫】^{シウ} とりあげひろむ。(鈞撫)。申鑒に「遠至漢興。收撫散滯」。

【收糶】^{シウ} わらをとりにける。史記に「毋收糶。糶爲禽獸食」。

【收然】^{シウ} とり入るべくみゆる。陳子昂「白露時降。百穀收然」。

【收緝】^{シウ} つりいとをなさむ。杜甫「釣艇收緝盡。昏鴉接翅歸」。

【收斂】^{シウ} 穀物果實などをとりいれる。陸游「霜晴收斂少。在家。租稅をとりなすむ。禮記に「命百官始收斂」。

【收齒】^{シウ} とり上げもちある。歐陽修「誤夢甄擢。遂見收齒」。

【收蝦】^{シウ} えびをとる。劉基「守卒收蝦屋後池」。

【收養】^{シウ} ひきとりてそだつ。後漢書に「賑恤宗族。收養孤寡」。

【收縛】^{シウ} いましめとらふ。三輔黃圖に

【支部】 岐 【支部】 父 父 收

〔支部〕 救 敝 敵 救 敵 救 敵

「思恭盡力救解」
【救類】 救 くれをすくふ。謝靈運「採
藥救類」
【救類】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救類】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救類】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」

六五七

〔支部〕 敗 敵 救

【敗北】 敗北 まけいくさ。荀子、注に「北者
乖敗之名、故以敗走爲北」
【敗衣】 敗衣 やぶれきもの。司空曙「安貧
著敗衣」
【敗日】 敗日 星の名、後漢書に「敗日察災
而揚輝」
【敗輝】 敗輝 くるる。參同契に「金性不敗
朽、故爲萬物資」
【敗走】 敗走 やぶれはしる。宋史、岳飛傳
に「飛于太行山遇敵、單騎持丈八鐵
槍、刺殺黑風大王、敵衆敗走」
【敗沒】 敗沒 ほろぶ。魏志に「近濟陰魏諷
山陽曹偉、皆以傾邪敗沒」
【敗卻】 敗卻 戦やぶれてしりぞく。史記、
淮陰侯傳に「敗卻彭城」
【敗柳】 敗柳 枯れかかれるやなぎ。韓偓
「敗柳凋花松不知」
【敗篋】 敗篋 こぼれたる本箱。蘇舜欽「修
修張敗篋」
【敗紡】 敗紡 こぼれたるふれ。溫庭筠「荷
疊平橋閣、萍稀敗紡沈」
【敗鮓】 敗鮓 たたかひやぶる。五代史に
「大小百餘戰、未嘗敗鮓」
【敗紙】 敗紙 ほぐ。反故。志林に「以敗紙
半幅、書其上」
【敗敵】 敗敵 やぶる。やぶれ。(毀敵、破
敵)。賈父「有爲義山者、衣服敗敵」
【敗絮】 敗絮 つかひふるしのわた。陳師道
「寒氣挾霜侵敗絮」

六五七

【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」

【敗筆】 敗筆 つかひがらしのふで。太平廣
記に「僧智永學書、敗筆如丘山」
【敗散】 敗散 やぶれちる。やぶりちらす。
宋史に「民散敗散、自然之理」
【敗通】 敗通 戦やぶれてにぐ。水經、注に
「戰于龍澤、田布敗通」
【敗喪】 敗喪 やぶれほろぶ。王羲之「安西
敗喪、公私惋恒」
【敗傷】 敗傷 やぶれそ、なふ。韓非子に
「戰大器、而數徒之、則多敗傷」
【敗碎】 敗碎 やぶれくた。禮記、疏に「若
毀、則敗碎不直」
【敗鼓】 敗鼓 やぶれつづみ。韓愈「牛洩馬
渤、敗鼓之皮」
【敗業】 敗業 仕事をあやまる。しくじりた
る仕事。戰國策に「是故事無敗業」
【敗腐】 敗腐 やぶれくさる。宋史、謝德權
傳に「瘡積多患、地下濕、德權累、號爲
腐、以藉之、遂無敗腐」
【敗穀】 敗穀 こく物をやぶりそ、なふ。禮
記に「介蟲敗穀、戎兵乃來」
【敗艦】 敗艦 底淺く平かなる舟のやぶれ
たるもの。廬山記に「龍逢委船山頂、今
有敗艦」
【敗蕉】 敗蕉 やぶればせを。張時徹「嚴霜
切重、疾風梳敗蕉」
【敗類】 敗類 やぶれくづる
【敗壁】 敗壁 やぶれたるかべ。孫觀「破扉
風自掩、敗壁雨先頹」

【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」
【救】 救 くれをすくふ。國語に「如
救類」

【敗】 敗 まけいくさ。荀子、注に「北者
乖敗之名、故以敗走爲北」
【敗】 敗 まけいくさ。荀子、注に「北者
乖敗之名、故以敗走爲北」
【敗】 敗 まけいくさ。荀子、注に「北者
乖敗之名、故以敗走爲北」
【敗】 敗 まけいくさ。荀子、注に「北者
乖敗之名、故以敗走爲北」

吏。舊唐書に「夫御宰相當委之信之親之禮之、如于事不効、于國無勞、則置之散條、黜之遠郡」

【散條】 散條、黜之遠郡

【散條】 かざりなき本来のきぢをうしなはしむ。吳均「三皇已散條、五帝初尙賢」

【散樂】 野人の音樂。さるがく。周禮に「掌教舞散樂」

【散髮】 かみをちらす。後漢書、袁閔傳に「因終散髮絕世」

【散積】 たくはへをちらす。五代史に「勸其散積以贖之」

【散錢】 ぜにをちらす。晉書に「蒙遜升南景門、散錢以賜百姓」

【散儒】 卑賤の地位に在る儒者。又、束縛を受けざる儒者。荀子に「隆禮雖未明、法士也、不隆禮、雖察辯、散儒也」

【散賜】 わかちあたふ。漢書、儒林張山傳に「散賜九族、田畝不益」

【散職】 定まりたる職務なき官吏。白居易「散職無拘束」

【散擲】 ちらしなぐ。蘇軾「戲將桃核、糝黃泥、石間散擲如風雨」

【散離】 ちらりはなる。後漢書に「關樸散離、人物錯乖」

【散釋】 ちりとく。後漢書に「神色自若、辭對無變、事遂散釋」

【散鬱陶】 うさをばらす。北夢瑣

言に「小猶遊隣寺、以散鬱陶」

ハウ、ヒヤウ。普庚切。庚。うつ、たたく(擊)。

【散】 苦果切。智。クワ。若果切。智。

【散】 一みがく(研)。(うつ(擊))。セウ。先了切。儀。

【散】 シヤク。尺約切。藥。

【散】 うつ(撲)とる、かすむ。

【散】 ロク。盧谷切。屋。

【散】 リョク、ロク。力玉切。沃。

【散】 ばく、こゑ(剝聲)。(うつ(擊))。う(擊聲)。

【散】 トン、ドン。都昆切。元。

【散】 タイ、テ。都回切。灰。タ、タ、度官切。寒。テウ。丁聊切。蕭。タウ、ドウ。大到切。號。ト、ト、主尹切。軫。ト、ト、都困切。願。ト、ト、杜本切。阮。

【散】 さかんなり(盛)いかる(怒)とがむ(誰何)つらぬ(陳)つとむ(勉)そしる(貳)せまる(迫)なげうつ(擲)おほいなり(大)さだむ(斷)なまむ(治)獨處りて移らざる貌(あつまりむらがる貌)ふる(影)ふ(畫)おほひ(覆)はば(幅)な(か)たつ(堅)くら(し)く(ら)し。

【散】 篤厚なるをし。又、篤厚の風に化す。中庸に「小德川流、大德敦化」

【敦至】 敦至。あつくつくす。後漢書、鄭均

傳に「恩禮敦至」

【敦朴】 情あつくしてかざりなし。唐書に「以敦朴爲先、雖文爲後」

【敦牟】 黍稷を入る器。禮記に「敦牟、非餽莫敢用」

【敦尙】 あつくたつとぶ。圖書見開志に「高麗國敦尙、文雅、漸染華風」

【敦固】 あつくかたし。後漢書、吳良傳に「資質敦固、公方廉格」

【敦厖】 風俗あつし。左傳に「民生敦厖、和平以聽」

【敦忠】 心あつくしてまことあり。史記に「端直敦忠、事業有常」

【敦和】 あつくやはらぐ。禮記に「樂者敦和、率神而從天」

【敦勉】 あつくつとむ。史記に「安和敦勉、莫不順命」

【敦故】 舊知に情あつくす。白居易「達人益敦故」

【敦厚】 人情あつし。禮記に「溫柔敦厚、詩教也」

【敦圉】 虎に似て小なる獸の名。淮南子、注に「畫廉獸名、長毛有翼、敦圉似虎而小」

【敦害】 大いなるわざはひ。漢書に「淺爲尤悔、深作敦害」

【敦悅】 あつくよるこぶ。後漢書に「執義賢固、敦悅詩書」

【敦崇】 あつくたつとぶ。晉書、載記

に「慕容寶字通祐、垂之第四子也、少輕果無志操、及爲太子、砥礪自修、敦崇儒學、工談論、善屬文」

【敦琢】 選擇す。えらぶ。詩經に「有美且敦、琢其旅」

【敦圍】 いさまく。魏都賦に「白虎敦圍乎崑崙」

【敦雅】 質朴にしていやしからず。蜀志、裴盛傳に「雅容敦雅、而幹闥非所長、是以待之以上賓之禮」

【敦諭】 れんごろにさとす。晉書に「宣旨優詔敦諭」

【敦睦】 あつくむつまじし。宋史、竇偁傳に「太祖嘗謂宰相曰、竇儀實重慶整有法、閭閻敦睦、人無謫語」

【敦業】 仕事に手あつくす。管子に「上惠其道、下敦其業」

【敦恩】 人情あつくしてすなほなり。史記に「政尙忠樸、猶有先王之風、類川敦恩」

【敦樂】 黍稷を盛る器ととかきと。荀子に「斗斛敦樂者、所以爲噴也」

【敦閑】 丁寧にさんみす。潘尼「留精儒術、敦閑古訓」

【敦樂】 あつく好む。後漢書に「退隱山谷、敦樂詩書」

【敦學】 あつく學ぶ。又、學にあつき人。蘇頌「用儒今作相、敦學舊爲師」

【敦篤】 てあつなり。後漢書に「感時

澆薄、慕尙敦篤」

【敦穆】 人情あつくやはらぐ。王儉「仁義義緯、敦穆于閭庭」

【敦居】 居宜切。支。去倚切。紙。ユフ、フ。於業切。業。

【敦】 つく、相著く。そむく、相反す。

九書

【敬】 ケイ、キヤウ。居慶切。敬。

【敬】 うやうやし(恭)いましむ

【敬】 つつしむ、つつしみ(慎)うやまふ、うやまひ。

【敬用】 死者をうやまひ用ふ。孝徳裕「臨風敬用、願與神遊」

【敬止】 つつしみてとどまるべき所にとどまる。詩經に「穆穆文王、於緝熙敬止」

【敬白】 つつしみて申す。

【敬同】 君親に事ふるに敬意を同じくす。孝經に「資於事父以事君、而敬同」

【敬共】 つつしみうやまふ。左傳に「敬共朝夕」

【敬戒】 符いましむ。左傳に「與二三子、生在敬戒、不在富也」

【敬身】 身を大切にす。禮記に「君子無不敬也、敬身爲大」

【敬忠】 尊敬し忠義をつくす。論語に「季康子問、使民敬忠以勸、如之何」

【敬承】 つつしみてうけつぐ。孟子に「啓賢能敬承繼禹之道」

【敬服】 うやまひ従ふ。搜神記に「百姓敬服、從者如歸」

【敬厚】 うやまひてあつくす。後漢書に「此眞儒生也、以是愈見敬厚」

【敬待】 うやまひあしらふ。優待、禮待。後漢書、杜根傳に「酒家知其賢、厚敬待之」

【敬昵】 うやまひしたしむ。北史に「竝敬昵之」

【敬重】 うやまひおもんす。

【敬若】 うやまひしたがふ。後漢書に「敬若昊天、以綏兆人」

【敬神】 かみをうやまふ。禮記に「夏道尊命、事鬼神、而遠之」

【敬虔】 つつしむ。つつしみ。皮日休「爲之加敬虔」

【敬恭】 つつしみうややし。詩經に「敬恭明神」

【敬挹】 たつとびうやまふ。南史、王虛之傳に「宗人江梁位至侍中、性豪侈、惟見軻(江軻)則敬挹焉」

【敬祭】 まつることをつつしみてす。史記に「吾甚重祠、而敬祭」

【敬終】 事の結末を全からしめんと心かく。禮記に「事君慎始、而敬終」

【敬異】ウヤまひて特別に。東觀漢記に「郷黨士大夫莫不敬異之」
 【敬敏】ウヤまひて。周禮に「書其敬敏任恤者」
 【敬尊】タツとぶ。禮記に「君子雖自卑而民敬尊之」
 【敬視】ウヤまひてみる。禮記に「膳宰之饌、必敬視之」
 【敬順】ウヤまひてしたがふ。左傳に「兄愛而友、弟敬而順」
 【敬愛】ウヤまひてつくしむ。應瑒「公子敬愛客、樂飲不知疲」
 【敬意】ウヤまひて。邵軫雲韶樂賦に「昭敬意於廉直」
 【敬勤】ウヤまひて。韓愈「克自敬勤」
 【敬遠】ウヤまひて。論語に「敬鬼神而遠之」
 【敬遇】ウヤまひて。困學紀聞に「武王出門銘、敬遇賓客、貴賤無一」
 【敬從】ウヤまひて。吳志に「大小敬從、不以爲恨」
 【敬遜】ウヤまひて。漢書に「聖王溫恭敬遜」
 【敬稱】ウヤまひて。人々をウヤまひていふ。南史に「學徒敬慕、不敢指斥」
 【敬憚】ウヤまひて。史記に「呂公

太子及大臣、皆素敬憚之」
 【敬數】ウヤまひて。書經に「敬數五教、在寛」
 【敬諾】ウヤまひて。晉書に「敬諾」
 【敬賢】ウヤまひて。漢書に「敬賢下士、樂善不倦」
 【敬教】ウヤまひて。隨手雜録に「俸吏皆敬教」
 【敬慎】ウヤまひて。禮記に「敬慎者、仁之地也」
 【敬親】ウヤまひて。孝經に「敬親者、不敢慢於人」
 【敬禮】ウヤまひて。鮑照「助人為善、猶加敬禮」
 【敬讓】ウヤまひて。任昉「今便敬讓、于梁」
 【敬謹】ウヤまひて。書經に「誰敢不讓、敢不敬謹」
 【敬謹】ウヤまひて。宋皇太子冠樂章に「歷階而升、敬謹將冠」
 【敬職】ウヤまひて。忠經に「天下敬職、萬邦以寧」
 【敬禮】ウヤまひて。禮書に「敬禮異於他國」
 【敬懼】ウヤまひて。書經、傳に「有土之君、不可不敬懼」
 【敬覺】ウヤまひて。蘇軾「新詩

幸得敬覺」
 【敬聽】ウヤまひて。蔡邕「率爾苗民、慎不敬聽」
 【敬讓】ウヤまひて。孝經に「先之以敬讓」
 【敬敷】ウヤまひて。詩に「敬敷」
 【敬徹】ウヤまひて。昌免「切、紙、丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」

【敬異】ウヤまひて特別に。東觀漢記に「郷黨士大夫莫不敬異之」
 【敬敏】ウヤまひて。周禮に「書其敬敏任恤者」
 【敬尊】タツとぶ。禮記に「君子雖自卑而民敬尊之」
 【敬視】ウヤまひてみる。禮記に「膳宰之饌、必敬視之」
 【敬順】ウヤまひてしたがふ。左傳に「兄愛而友、弟敬而順」
 【敬愛】ウヤまひてつくしむ。應瑒「公子敬愛客、樂飲不知疲」
 【敬意】ウヤまひて。邵軫雲韶樂賦に「昭敬意於廉直」
 【敬勤】ウヤまひて。韓愈「克自敬勤」
 【敬遠】ウヤまひて。論語に「敬鬼神而遠之」
 【敬遇】ウヤまひて。困學紀聞に「武王出門銘、敬遇賓客、貴賤無一」
 【敬從】ウヤまひて。吳志に「大小敬從、不以爲恨」
 【敬遜】ウヤまひて。漢書に「聖王溫恭敬遜」
 【敬稱】ウヤまひて。人々をウヤまひていふ。南史に「學徒敬慕、不敢指斥」
 【敬憚】ウヤまひて。史記に「呂公

太子及大臣、皆素敬憚之」
 【敬數】ウヤまひて。書經に「敬數五教、在寛」
 【敬諾】ウヤまひて。晉書に「敬諾」
 【敬賢】ウヤまひて。漢書に「敬賢下士、樂善不倦」
 【敬教】ウヤまひて。隨手雜録に「俸吏皆敬教」
 【敬慎】ウヤまひて。禮記に「敬慎者、仁之地也」
 【敬親】ウヤまひて。孝經に「敬親者、不敢慢於人」
 【敬禮】ウヤまひて。鮑照「助人為善、猶加敬禮」
 【敬讓】ウヤまひて。任昉「今便敬讓、于梁」
 【敬謹】ウヤまひて。書經に「誰敢不讓、敢不敬謹」
 【敬謹】ウヤまひて。宋皇太子冠樂章に「歷階而升、敬謹將冠」
 【敬職】ウヤまひて。忠經に「天下敬職、萬邦以寧」
 【敬禮】ウヤまひて。禮書に「敬禮異於他國」
 【敬懼】ウヤまひて。書經、傳に「有土之君、不可不敬懼」
 【敬覺】ウヤまひて。蘇軾「新詩

幸得敬覺」
 【敬聽】ウヤまひて。蔡邕「率爾苗民、慎不敬聽」
 【敬讓】ウヤまひて。孝經に「先之以敬讓」
 【敬敷】ウヤまひて。詩に「敬敷」
 【敬徹】ウヤまひて。昌免「切、紙、丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」
 【敬】ウヤまひて。昌免「初委切、紙、セン」
 【敬】ウヤまひて。昌免「丁果切、智」

敷

②フ、ホ。芳無切。虞。傳に同じ。

敷 ①つらぬ、つらなる(陳)②しく(布)③ほどこす(施)④ちらす(散)⑤あまれく(徧)⑥ひろく(廣)。

敷

敷演 ①しきのぶ。成公綏「分賦物理、敷演無方」。

敷 ①シニス。爽主切。麌。②ス。色句切。遇。③サク、ソク。色角切。④ソク。蘇谷切。屋。⑤シヨク、ソク。趙玉切。沃。⑥スウ。慣用音。

敷

敷 ①断蓬之風敷四。

敷行 ①カク。いくすぢ。柳宗元「今來敷行涙」。②カク。五六行。羊士謏「蜀國魚腹敷行字」。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

敵

敵 ①お、たる(憎)。

〔支部〕 斂 斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂斂

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

文部

部首

【文】アン、モン。無分切。文。アヤ、トク。斂角切。文。キづく(築)。キます(刺)。キつく(授)。キうすつく(春)。キいたむ(痛。斂斂)。

【文皮】アヤ、トク。斂角切。皮。ふ。淮南子に「東北方之美者、有斥山之文皮焉」。

【文】アン、モン。無分切。文。アヤ、トク。斂角切。文。キづく(築)。キます(刺)。キつく(授)。キうすつく(春)。キいたむ(痛。斂斂)。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【斂】カウ、ケウ。胡教切。斂。又、斂に作る。學に同じ。

【文敵】紙の異名。
 【文馬】裝飾せるうま。史記に「兵車百乘、文馬四百匹」
 【文豹】斑文のある豹。後漢書に「國多文豹」
 【文脈】文章上に貫ぬけるすぢみち。
 【文祖】陶堯の始祖。書經に「受終于文祖」注に「文祖者堯始祖之廟」
 【文弱】おとなしくしてよわし。世説に「土龍爲人、文弱可愛」
 【文酒】文を作り酒を酌む。南史、江革傳に「革性強直、爲權貴所疾、謝病還家、除光祿大夫、優游閑放、以文酒自娛」
 【文圃】文學をまなぶところ。駱賓王「馳文圃以遊魂」
 【文書】かきもの。漢書に「文書盈于几閣、典者不能偏嗜」
 【文陣】文學者の社會。玉堂遺事に「張九齡爲文陣領袖」
 【文庫】書籍を納めおくくら。又、筆紙などを入れおく手箱。宋史に「金耀門有文庫、藏三司帳簿」
 【文格】文章のしなから。于頔「深論窮文格」
 【文魚】あやあるうを。山海經に「唯水其中多文魚」
 【文章】あや。史記に「刻鏤文章、所以養目也」のり。禮記に「近文

章」◎文字を以て思想を發表するもの。漢書に「文章則司馬遷相如」
 【文教】文學のなしへ。晉書に「三百里揆文教」
 【文組】あやあるくみひも。阮籍大人先生傳に「挾金玉、垂文組」
 【文梓】木目あるあづき。史記に「文梓爲榔」
 【文集】文章を集めたる書物。白居易「塵架多文集、偶取一卷披」
 【文華】文明の光華。後漢書に「敷文華、以緯國典」
 【文備】學問上の用意。史記に「有武事者、必有文備」
 【文犀】あやある犀角。後漢書、馬援傳に「援征交趾、載犀象歸、人以爲明珠文犀」
 【文雄】文章にひいてたる人。唐明皇「既調翰翰、又擅雕龍、有典有則、是爲文雄」
 【文棟】文士なかまのかしら。鍾嶸「平原兄弟、鬱爲文棟」
 【文場】官吏を登用する試験場。劉孝綽「義府文場、詞人髦士」
 【文話】文章に關するはなし。
 【文雅】みやびやかなり。風流。吳志に「乾德博好、文雅是貴」
 【文意】文章の意味。元史に「操筆立就、文意蒼古」

【文運】文學の運命。袁桷「清寧閣文運、覽彼古帝都」
 【文會】文學に關するつどひ。南史に「文會之盛、當時莫比」
 【文墨】詩文書畫などのわざ。史記に「使刀筆之吏弄文墨」
 【文禽】羽毛にあやある鳥。應璩「文禽散綠水」
 【文義】文章の意味。南史、陸澄傳に「讀易三年、不解文義」
 【文幌】あやあるとばり。袁宏「文幌曜瓊扇」
 【文豪】文章にひいてたる人。宋名臣言行錄に「眞一代之文豪也」
 【文飾】かざり。宋史に「言無文飾、洞見肝膈」
 【文綬】あやある印の紐。虞世南「帶文綬而旁垂」
 【文綵】あや。古詩に「文綵雙鸞」
 【文語】文字とことば。論衡に「故其文語與俗不通」
 【文練】あやあるれりぎぬ。喬知之「平姑搗文練」
 【文綾】あやぎぬ。唐書に「河南府河南郡土、貢文綾數綵葛」
 【文綺】かざりをつく。吳志に「美貌者、不待華采、以崇好、黜姿者、不待文綺、以致愛」
 【文綱】おきて。法律。史記に「漢興

有朱家田仲王公劇孟郭解之徒、雖時扞當世之文網、然其私義廉潔退讓、有足稱者」
 【文藻】あやあるくつひも。楊維禎「曰大聖之所履、豈遠異夫文藻」
 【文縷】紋あるたるき。七啓に「彤軒紫柱、文縷華梁」
 【文箴】作文につきてのいましめ。唐詩記事に「李德裕嘗爲文箴」
 【文樂】文道の音楽。武樂の對。公羊傳に「婦人無武事、獨奏文樂」
 【文毅】あやあるうすぎぬ。曹植「被文毅之華柱」
 【文駟】うつくしき四馬。顏延之「文駟列乎華殿」
 【文學】あらゆる學問の總稱。史記、灌夫傳に「夫不喜文學、好在俠」
 【文錦】あやあるにしき。淮南子に「管子文錦也」
 【文龜】模倣あるかめ。爾雅に「五曰文龜」
 【文談】文章に關するはなし。
 【文儒】文才に長けたる學者。晉書に「逮于孝武、崇尙文儒」
 【文壇】文學者の社會。
 【文檄】ふれぶみ。晉書、劉超傳に「專掌文檄」
 【文翰】かきもの。文書。王禹偁「兩朝

掌文翰、十年侍冕旒」
 【文燭】「植」なんてんしよくの異名。文繁「植」かざり多し。後漢書に「文繁者質荒」
 【文憲】かくもん。索靖「多才之英、篤藝之彦、役心精微、矚此文憲」
 【文筆】文を作るに巧なるはまれ。宋史、孔文仲傳に「文仲與弟武仲、平仲、皆以文聲起、江西時號三孔」
 【文織】あやあるおりもの。周禮に「凡王之獻、金玉兵器、文織、良貨賄之物、受而織之」
 【文綺】あやあるきぬ。説文に「綺、文綺也」
 【文藝】文學上のわざ。中論に「盛德之士、文藝必衆」
 【文證】文章のしるし。禮記、序に「文證詳悉、義理精審」
 【文牘】かきもの。通賢「文牘日冗繁、民力愈疲竭」
 【文籍】書物。書經に「由是文籍生焉」
 【文辭】文章のことば。唐書に「劉知幾與兄知柔、並以善文辭知名」
 【文簿】かきもの。晉書に「文簿盈積」
 【文縷】あやのぬひとり。孟子に「所以不願人之文縷也」
 【文藻】文章。あや。唐書に「有文藻智數」
 【文曜】日月・星辰の類。晉書に「文

曜麗乎天」
 【文耀】うつくしきひかり。劉陶「敵三光之文耀、視山河之分流」
 【文瀾】天子の遊樂に用ふるふれ。子虛賦に「游於清池、浮文瀾」
 【文辯】文章と辯説と。淮南子に「治國有理、不在文辯」
 【文譽】作文に巧なるはまれ。宋史、陳宜中傳に「少甚質而性特俊拔、既入大學、有文譽」
 【文體】文章のすがた。隋書に「世有澆淳、時移治亂、文體三變、邪正或殊」
 【文字飲】詩文の會をなして酒を飲む。韓愈「不解文字飲、惟能醉紅裙」
 【文武勳】政を施し及び戦をなすいさを。蔡邕「昭公文武之勳焉」
 【文法吏】法規に精通せる吏。漢書、元帝紀に「宣帝所用多文法吏、以刑名繩下」
 【文無害】刑法を用ゐて人を害する所なきをいふ。史記、蕭相國世家に「以文無害、爲沛主吏掾」
 【文人相輕】文章家は互に相輕んじあはぶる。典論に「文士相輕、自古而然」
 【文不加點】文を作りて全く美なるをいふ。據言に「李白在翰林、詔草白蓮花序及宮詞、方大醉中、貴人以水沃之、稍醒索筆、文不加點」

【文王之圃】フンワウ 周の文王の動物を畜へる圃。孟子に「文王之圃、方七十里」。

【文行忠信】ブンギョウチュウシン 文藝、行狀、道に親切なり、言行違はず、この四つは孔子の人を教へし道。論語に「子以四教、文行忠信」。

【文如春華】ブンニハルハル 文詞のはなやかなるをいふ。曹植「文如春華、思若湧泉」。

【文武兩道】ブンブニョウドウ 文と武との二道。李義山集に「貴忠孝之兩全、則忠可移、孝正文武之二道、則武可輔文」。

【文武兼備】ブンブケンビ 文と武とを兼ね備ふ。唐書、裴行儉傳に「帝曰、行儉提孤軍、深入萬里、兵不血刃、而叛黨禽夷、可謂文武兼備矣」。

【文恬武嬉】ブンテンブキ 文官も武官も安逸にふけりて禍亂の起るを知らざる意。韓愈「相臣將臣、文恬武嬉」。

【文章絕唱】ブンギョウケツカウ 世に稀なる名文をいふ。鶴林玉露に「太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絕唱也」。

【文章宿老】ブンギョウシュクロウ 文章界に於ける老大家。唐書に「李嶠富才思、然其仕前與王勃、楊盈川、接、中與崔融、蘇味道、齊名、晚諸人沒、而爲文章宿老、一時學者取法焉」。

【文章四友】ブンギョウシユウ 崔嶠・崔融・蘇味道・杜審言をいふ。

【文過其實】ブンカクシツジツ 文飾する、こと實地に過ぎたり。後漢書、馮衍傳に「以文過其實、遂廢於家」。

【文場元帥】ブンギョウゲンシュウ 文壇の驍將。事文類聚に「唐張九齡號詞人之冠、又號文場元帥」。

【文獻不足】ブンケンブツ 徵證すべき典籍と賢者に乏し。論語に「子曰、夏禮吾能言、杞不足徵也、文獻不足故也、足則吾能徵之矣」。

【文質彬彬】ブンシツヒンビン あやときちと雜りて均しき貌。論語に「文質彬彬、然後君子」。

【文章一小技】ブンギョウコウコウ 文章は「小技藝」なり。これは杜甫が激する處ありて作りし句なりと傳ふ。杜甫「文章一小技、於道未爲尊」。

【文陣之雄師】ブンジンノユウシ 文章の大家。唐書、蘇頌傳に「張九齡嘗覽頌文卷、謂同列曰、蘇生之後、瞻無敵、眞文陣之雄師也」。

【文臣不愛錢】ブンシンブアイゼン 文臣金錢を貯ふる考をせず。宋史に「或問岳飛、天下何時太平、飛答曰、文臣不愛錢、武臣不惜死、則天下平矣」。

【文選淵秀才半】ブンセンエンシュウタイハン 宋代に、科擧の士、競ひて四六駢儷の文を學び、文選を熟誦せり、故に文選一部を淵然せば試験に及第し、秀才となるべき資格の半分を得たりとの意。老學庵筆記に

「國初尙文選、當時文人專意此書、故草必稱王孫、梅必稱驪使、月必稱望舒、山水必稱清暉、至慶曆後、惡其陳腐、諸作者始一洗之、方其盛時、士子至爲之語曰、文選淵秀才半、建炎以來尙蘇氏文章、學者翕然從之、而蜀士尤盛、亦有語曰、蘇文熟喫羊肉、蘇文生喫菜羹」。

【文者貫道之器也】ブンシャクワンダウノキ 文章は人たる道載せて、永遠につらぬくつはなり。李華の崔孝公文集序に見ゆ。

【文章經國之大業】ブンギョウケイコクノオホノノトキ 文章は國家をなさむる一大事業なり。典論に「文章經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止於其身、二者必至之常期、未若文章之無窮」。

【文籍雖滿腹不如一囊錢】ブンシツニハミツクハコトナクハヒツツ 學問に長ずとも、之を實行せざれば、囊中の錢にも及ばず。後漢書、趙壹傳に「河清不可俟、人命不可延、順風激靡草、富貴者稱賢、文籍雖滿腹、不知一囊錢、伊優北堂上、抗辯倚門邊」。

六 畫

【救】キウ ハン、ヘン。連閉切。刷。ビ。微に通ず。

【聳】ソウ セイ、サイ。前四切。齊。やし(疾)。

七 畫

【斌】ヒン ヒン。府巾切。眞。あやあり(さ)かんなり。

八 畫

【斐】ヒ ヒ。敷尾切。尾。連悲切。支。あや(う)るはし。

【斐回】ヒクワイ さまふ貌。又、進まざる貌。馬融「緩節舒容、斐回安步」。

【斐然】ヒゼン あやある貌。論語に「狂簡斐然成章、不知所以裁之」。

【斐有光】ヒゼンクワ うつくしくひかる。嵇康「豐融披離、斐然煥爛」。

【斐靄】ヒゼン くものかたちのあやあるさま。孫綽「形雲斐靄」。

【斑】ハン ハン、ヘン。布還切。刷。まだら(雜)色(ぶ)ち。

【斑文】ハンブン 虎豹などの皮のまだら。上林賦に「被斑文、跨野馬」。

【斑白】ハンハク 白髪まじりの老人。史記に「斑白不提挈」。

【斑石】ハンシツ 「鑽」滑石の異名。

【斑竹】ハンチク 「植」まだらの紋あるたけ。唐書に「嶺南雷州土、貢斑竹」。

【斑馬】ハンバ 「動」しまうま。蘇頌「斑馬長嘶落景催」。

【斑然】ハンゼン まだらなる貌。禮記に「狸首之斑然、執女手之卷然」。

【斑斑】ハンハン 前に同じ。陸游「花根土潤雨斑斑」。

【斑駁】ハンカク 種種の色彩の雜れる貌。楚辭に「雜斑駁與蘭茸」。

【斑駁】ハンカク 「動」くるまえばの異名。

九 畫

【煥】クワン ハン、ヘン。方閑切。刷。まだら。呼玩切。翰。いろどる(文采)。

【敷】フ タン。他旦切。翰。文采なき貌(敷敷)。

十一 畫

【稜】リョウ リ。里之切。支。うすくまがく(微畫)。

【敷】フ パン、マン。莫牛切。翰。文采なき貌。

【缺】ケツ ヌ。缺に同じ。

【爛】ラン ラン、レン。力閑切。刷。まだら(爛爛)。

斗 部

【斗】トウ トウ、ツ。當口切。有。シユ、ス。腫庚切。寔。ト。慣用音。

【斗米】トウベイ 南北にある一羣の星宿の稱。たちまち(忽地)どら(均)ひつき(二十八宿の一)ひし(均)。

【斗大】トウダイ どのの曲れる如く、かどだち入る。史記に「成山斗入海」。

【斗牛】トウウ 斗ほどの大いさ。蜀志、姜維傳、注に「維死時見割、瞻如斗大」。

【斗米】トウベイ 一斗の、め。唐書、張柬之傳に「張柬之東鹿人、長七尺、飯至斗米肉十斤」。

【斗食】トウシキ 日に七十二升を稟けて之を

食む者、即ち、賤吏の稱。戰國策に「邑中自斗食以上、至尉內吏」
 【斗室】ト せまきへや。黃中堅「斗室何來豹脚蚊、殷如雷鼓、聚如雲」
 【斗酒】ト 一斗のさけ。張說「斗酒貽朋愛、蜘蛛出御溝」
 【斗栱】ト 柱上のますがた。爾雅に「栱一名案、即爐也、皆謂斗栱也」
 【斗斛】ト 量の名。ます。管子に「衡石也斗斛也」
 【斗帳】ト ちひさきとばり。釋名に「小帳曰斗帳」
 【斗桶】ト 十升を盛る器。史記に「平斗桶權衡丈尺、行レ之」
 【斗量】ト ますにてはかる。吳書に「趙香使魏、文帝善之曰、吳如大夫者幾人、香曰、聰明特達者八九十人、如臣之比、車載斗量、不可勝數」
 【斗絶】ト かけはなる。後漢書に「河西斗絶、在羌胡中」
 【斗筲】ト 竹にて作り飯米など盛る器。俸祿の少きにいふ。後漢書に「大丈夫焉能處斗筲之役乎」
 【斗筲】ト 人の器量のちひさきにいふ。論語に「斗筲之人、何足算也」
 【斗祿】ト す、このふち。歐陽修「試問塵埃勒斗祿」
 【斗綱】ト 北斗の第一・第三・第七の三

星。漢書に「斗綱之端、連貫營室」
 【斗箕】ト 二十八宿の二つの星の名。爾雅に「斗箕之間漢津也」
 【斗稱】ト ますとばかりと。淮南子に「令、市、同度量、鈞衡石、角斗稱、端權槩」
 【斗權】ト わづかの兵糧の義。戰國策に「不費斗糧、不煩一兵」
 【斗筲】ト けはしくそばだつ。水經、注に「二壁争高、斗筲相亂」
 【斗鷄】ト 時計、もと鷄の形を作りて時刻をしらめたるに起る。
 【斗覺】ト たちまちおほゆ。韓愈「吟君詩、罷看雙鬢、斗覺霜毛一半加」
 【斗儲】ト す、このたぐはへ。左思「内顧無斗儲」
 【斗膽】ト 斗大のきも。廣き度胸。胡曾「推、莫亮之心、負、姜維之斗膽」
 【斗升活】ト 少しばかりの恵を以てのすくひ。莊子に「我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉」
 【斗南一人】ト 天下第一の賢才といふ意。唐書、狄仁傑傳に「蘭仁基曰、狄公之賢、斗南以南一人而已矣」
 【斗折蛇行】ト 北斗星の折れ曲れるが如く、蛇の行くが如き状。柳宗元「潭西南而望、斗折蛇行、明滅可見」

外 三 畫 ショウ。識蒸切。蒸のぼる、のぼす(登)。
 四 畫 カツ、ケチ。訖點切。點はかる(量)。
 五 畫 ハン。博慢切。翰。わく、物を量りて半に分つ。シン。斟に同じ。
 六 畫 ヨク。烏八切。黠。斟に同じ。
 七 畫 ワツ、ワチ。烏括切。曷。クワツ、クワチ。呼括切。曷。とる(指に同じ、取)くむ(杼)。レウ。落蕭切。蕭。
 八 畫 カス。かす(敷)をさむ(理)はかる(量)かんがへはかる(度)とりもつ(杼)ふりつづみ(小)さしる(材質)あてがひ(給與物)。料力。ちからをはかる。史記に「勾踐頓首再拜曰、孤嘗不料力、以與吳戰、困於會稽、痛入于骨髓」

【料峭】リョウキョウ 春風の肌寒く感ぜらるるさま。蘇軾「東風料峭羊角轉」
 【料得】リョウトク おしはかる。杜甫「蒼天變化誰料得」
 【料揀】リョウケン ばかりえらぶ。韓愈「婦孺恣料揀、兒癡盡髡」
 【料量】リョウリヤウ ますにてはかる。史記、孔子世家に「及、長爲、委吏、料量平」
 【料理】リョウリ 事をばかりをさむ。晉書、王徽之傳に「桓沖謂曰、卿在府日久、比當、相料理」
 【料簡】リョウカン ばかりえらぶ。蔡邕「沙汰虛冗、料簡眞實」
 【料簡眞實】リョウカンシンジュツ 我國の俗語にて、意見、又は宥恕の意に用ゐる。カフ、ケフ。苦洽切。洽。ひしやく。
 七 畫
 【斛】コク 胡谷切。屋。量目の名、斗の十倍、こくます、ますめ。
 【斜】シャ シヤ、セ。徐嗟切。麻。ちる(散)くむ(杼)ななめに(ななめなり)谷の名。斜月。かたむけるつき。子夜歌に

「斜月垂光照」
 【斜日】シャジツ ゆふひ。(夕日)。虞世南「綠野明斜日、青山淡晚煙」
 【斜雨】シャウ ななめにふるあめ。林逋「細風斜雨不堪聽」
 【斜插】シャカク ななめにさしはさむ。白居易「水邊斜插一漁竿」
 【斜斜】シャシャ 正しからざる貌。杜牧「整整斜斜、雨雪などのふる貌。劉克莊「曉風細細雨斜斜」
 【斜徑】シャキョウ 月かげなどの斜にさす貌。蘇轍「窺、月斜斜」
 【斜視】シャシ ななめなる、みち。元行恭「草深斜徑沒、水盡曲池空」
 【斜視】シャシ ななめに見る。何遜「托斜視于遺簪」
 【斜貫】シャクワン ななめにうがつ。北戸録に「斜貫一溪」
 【斜鼓】シャコ かたむく。(傾鼓)。杜甫「舟楫任斜鼓」
 【斜陽】シャヤウ ゆふひ。(夕陽)。劉滄「雁叫斜陽背塞雲」
 【斜暉】シャキ ゆふぐれのひかり。(晚暉、夕暉)。徐陵「岸水帶斜暉」
 【斜傾】シャケイ かたぶく。(傾斜)。温庭筠「流水斜傾出武關」
 【斜漢】シャカン 天の河。李嘉祐「斜漢初過斗、寒雲正護霜」
 【斜據】シャコ ななめによる。王延壽「枝掌斜據而斜據」

斜 九 畫
 八 畫 カ、ケ。古雅切。馬。たまのさかづき(玉爵)。
 九 畫 シン。職深切。侵。ます(益)はかる(計)くむ(勺)とる(取)。斟酌。くみはかる。國語に「後王斟酌焉」
 斟。ためらふ。うたがふ。後漢書に「志斟而不澹」

樹木をきる。禮記に「樹木方盛、乃命虞人、入山行木、毋有斬伐」。
 【斬決】 斬りきりやぶる。揚雄「秦作無道、斬決天紀」。
 【斬毒】 斬りきりそなふ。宋書に「執藥隨親非情味、子甘苦、揮斤斬毒、豈忘痛于肌膚」。
 【斬斫】 斫る。晉書に「便皆斬斫」。
 【斬級】 敵のかうべをきる。宋史、徽宗紀に「詔、西邊用兵能招納羌人者、與斬級同賞」。
 【斬衰】 喪服。縫はざるを斬といふ。禮記に「斬衰括髮以麻」。
 【斬首】 斬りきりやぶる。
 【斬新】 あたらしく、この語は唐人の方言なりといふ。洛浦禪師「斬新日月、特地乾坤」。
 【斬罪】 くびきりの刑。
 【斬斷】 斬りきりたつ。杜甫「天兵斬斷青海戎、殺氣南行動坤軸」。
 【斬賊】 斬りきりやぶる。陸游「被堅執銳提戈斬賊」。
 【斬馬劍】 馬をきるするどきつる。漢書に「朱雲曰、臣願賜尚方斬馬劍、斷佞臣一人頭、以厲其餘」。
 【斬刻哀】 喪中のかなしみ。禮記に「三年之喪如斬、期之喪如刻」。
 【斬蛇劍】 漢の高祖が蛇をきりし名劍。西京雜記に「高祖斬白蛇劍、十二」

年一加磨盤、刃上常若霜雪」。
 【斬將奪旗】 敵將をきりころして旗をさしあぐ。李陵「斬將奪旗、追奔逐北」。
 【斬將刈旗】 敵將をきり、敵の旗をきり倒す。史記、項羽紀に「爲諸君潰圍、斬將刈旗、令諸君知天亡我、非戰之罪也」。
 【斬】 ダン。斬の俗字。
八 畫
 【斬】 タク、ツク。側角切。覺。
 【斬】 たつ(斬) ①きる(斬) ②けづ(削)。
 【斬】 シ。息移切。支。
 【斬】 ①この、これ、こ(此) ②すなはち(即) ③さく(斬) ④しろし(白) ⑤いやし(賤) ⑥かく(斬) ⑦これ、こ(句調を助くるに用ゐる字) ⑧無意味の助字 ⑨かしらづつみ(纏)に通ず。
 【斬】 「天の將喪斯文也、後死者不得與於斯文也」。
 【斯民】 シ、このたみ。孟子に「子將以斯道覺斯民也」。
 【斯界】 カ、この道。

【斯須】 シュ。しばらく。禮記に「禮樂不可斯須去身」。
 【斯道】 シュ。仁義の道。論語に「子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也」。
 【斯人而有斯疾】 シュ。深くその病に罹りしを惜むにいふ。論語に「伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也」。
九 畫
 【新】 シン。息鄰切。眞。
 【新】 ①はじめ(初) ②あたらしく ③あらたにす ④あたらしくもの開墾より二年目の田畝の稱 ⑤木を取る。
 【新水】 シン。あたらしくきみづ。李孝光「雪消新水鴨頭綠」。
 【新方】 シン。あたらしくしかた。耿津「老醫述舊疾、朽藥誤新方」。
 【新戸】 シン。あたらしく世帯もち。北史に「詔給內徙新戸耕牛、計口受田」。
 【新民】 シン。日に改進する教を民に施して面目をあらたにせしむ。大學に「康誥曰、作新民」。

【新田】 シン。あたらたにひらきたる田。韻會に「田一歲曰苗、二歲曰畝、三歲曰新田、四歲則曰田」。
 【新立】 シン。あたらたに位につく。左傳に「魯公新立、鄰國及時來朝」。
 【新式】 シン。あたらたしきた。又、あたらしき法式。北史に「不依新式者、悉追停之」。
 【新年】 シン。あたらたなるとし。後漢書に「太史令一人、掌天時景曆、凡歲將終、奏新年曆」。
 【新竹】 シン。ことしだけ。わかたけ。司空圖「數竿新竹當軒上」。
 【新曲】 シン。あたらたに作りたる樂のふし。魏文帝「絃歌奏新曲」。
 【新衣】 シン。あたらたしきもの。古辭に「新衣誰當補、故衣誰當縫」。
 【新任】 シン。あたらたに官に任ぜらる。
 【新米】 シン。その年出來たるこめ。北史に「人有餽新米一斛者」。
 【新妝】 シン。今なしたるけしやう。杜甫「借問漢宮誰得似、可憐飛燕倚新妝」。
 【新砌】 シン。あたらたにせしめつく。沈亞之「新砌仙亭覆石壇」。
 【新知】 シン。あたらたしきしりびと。顏真卿「新知滿座笑相視」。
 【新味】 シン。はつもの。王灣「新味瓜初剖」。
 【新柔】 シン。あたらたに出でたる草木の芽。
 【新郊】 シン。野蔬拾新柔」。

【新柯】 シン。あたらたしきえだ。劉基「新柯荏苒舊柯壯」。
 【新苔】 シン。あたらたしきけ。李德裕「松逕長新苔」。
 【新律】 シン。あたらたにつくられたるおきて。北史、周高祖紀に「保定三年二月庚子、初頒新律」。
 【新奇】 シン。あたらたしくめづらし。宋史、張焯傳に「上疏進言者多矣、今皆以爲陳腐、而別取新奇之說」。
 【新建】 シン。あたらたになつ。後漢書に「時許都新建、賢士大夫、四方來集」。
 【新胎】 シン。はじめてはらむ。庾信「解角新胎、戴藤初孕」。
 【新郎】 シン。はなむこ。
 【新英】 シン。あたらたに生じたる花又は葉。元稹「新英蜂採擷」。
 【新鬼】 シン。あたらたに死にたるもの。左傳に「吾見新鬼大、故鬼小」。
 【新茶】 シン。あたらたに作りたるちや。劉禹錫「松花滿枕試新茶」。
 【新茗】 シン。前に同じ。趙師使「一縷水沈香散後、半甌新茗味回時」。
 【新脆】 シン。あたらたしくして柔かなり。周邦彥「夏里收新脆」。
 【新涼】 シン。はじめてすずし。はじめて立つすすずし。朱熹「晝永倦殘暑、宵分喜新涼」。

【新國】 シン。あたらたに建てたるくに。禮記に「維興之日、從新國之法」。
 【新習】 シン。あたらたに習ふ。又、あたらしく習慣。孟郊「時文有新習」。
 【新設】 シン。あたらたにつくりまうく。
 【新梢】 シン。あたらたしきえだ。杜甫「綠竹半含箨、新梢纔出牆」。
 【新莖】 シン。あたらたに生じたるくき。韓愈「新莖未徧半猶枯」。
 【新訟】 シン。あたらたしきうたへ。隋書に「受領新訟、皆不立文案」。
 【新報】 シン。あたらたしきしらせ。伊洛淵源錄に「一人云有新報云」。
 【新晴】 シン。あたらたにはる。杜甫「久雨巫山暗、新晴錦繡文」。
 【新參】 シン。あたらたにまじはる。又、その者。東都事略に「種中彈文、乃新參也」。
 【新粧】 シン。あたらたに成りしよそほひ。蘇軾「我裁兩煙鬢、曉鏡開新粧」。
 【新婿】 シン。はなむこ。全唐詩話に「姚家新婿是房郎」。
 【新菊】 シン。あたらたに芽を出したるきく。許渾「新菊亦侵籬」。
 【新陽】 シン。あたらたしきはる。初春。陸游「新陽蘇醒春前柳」。
 【新萍】 シン。あたらたに生じたるうきぐさ。王融「新萍泛沚、華桐發岫」。
 【新詩】 シン。あたらたしく作りたる詩。杜甫「新詩改罷自長吟」。

【新會】あらたにあふ。漢書に「將吏新會」

【新義】あたらしき説。晉書、王接傳に「接注公羊春秋、多有新義」

【新穀】その年出來たる穀類。論語に「舊穀既沒、新穀既升」

【新聞】みみあたらしき話。安得長者言に「吳俗坐定、輒問新聞、此游閒小入門之漸」

【新説】あらたなる言説。

【新嘗】新穀を廟にすめて神を祭る。にひなめ。禮記に「志嘗不食新」

【新緑】若葉のみどり。白居易風吹新緑、草芽拆

【新稻】あたりにみのりたるいね。蘇軾「新稻香可飯」

【新製】あたりに作る。あたりに作りたる型。陶潛「衣裳無新製」

【新製】あたりに土地をひらく。

【新撰】あたりに著作す。舊唐書に「其舊本不得注、破候新撰成同進」

【新築】あたらしきづく。朱松「軒新築飲柴荆」

【新編】あたりにあみ作る。又、その詩文。李商隱「舊著思玄賦、新編雜擬詩」

【新醅】あたりに醸す。白居易「陸游一笑舉新醅」

【新趣】あたらしきおもむき。武少儀「不易舊所、別成新趣」

【新蓮】あたりに生じたるはす。孫登「新蓮夾岸紅」

【新禧】新年のよろこび。

【新機】あたらしきかた。張祜「新機花紋配蜀羅、同心雙帶蹙金蛾」

【新盤】はつはたる。賈島「一點新盤報秋信」

【新鮮】あたらし。太玄經に「新鮮自求光于己也」

【新舊】あたらしきとふるきと。晉書「張華傳に「撫納新舊、戒夏懷之」

【新薦】あたらしきむしろ。晉書、陶侃母湛氏傳に「湛氏乃撤所臥新薦、自對給其馬」

【新醪】あたらしきさけ。周禮、疏に「事酒爲新醪」

【新籜】あたらしきたけのかは。程垓「竹粉翻新籜」

【新鑄】あたりにいる。舊唐書、食貨志に「乾封新鑄之錢、今有司貯納、更不須鑄」

【新體】あたらしきていさい。王惲「舊聲今漸遠、新體此無加」

【新相知】あたらしきしりびと。楚辭に「樂莫樂兮新相知」

【新發意】佛の發意とは上求菩提、下化衆生の大心を發したることにて、新に佛門に入りたるものなること。法華經に「新發意菩薩、供養無敬佛」

【新機軸】今までありしものよりは一きは新らしき工夫。

【新陳代謝】ふるきものは去りてあたらしきもの、これに代る。

【新涼燈火】涼氣や生じ、燈火に對ひて讀書するに由るし。宋松「新涼宜燈下、永夜勸書帙」

【新沐者彈冠】あらたにかみ洗ふ者は、冠の塵をばらふ。外物に汚さるるを懼るるなり。荀子に「新浴者振其衣、新沐者彈其冠、人之情也」史記に「新沐者必彈冠、新浴者必振衣」

【新涼入郊墟】あたらしき涼風は村はづれまで来れり。韓愈「時秋積雨霽、新涼入郊墟」

【新】トク、トク。當侯切。尤。

【新】テイ、チャウ。都挺切。通。三足兩耳の鎗、かなへ。

【新】タク、トク。竹角切。覺。

【新】さかひをさだむ。

【新】けはしきみね。(絶峯、峻峯)。

【新】江淹「臨江上之新峯」

【新】前提より推論せられたる断定。

【新】ある日限内食事せず。佛本行經に「若因斷食、當得大福者、其野獸等、應得大福」

【新】あみをたちきる。國語に「里革斷其罟、而棄之」

【新】せなをきる。商子に「吏遂斷頤頤之脊」

【新】梅雨のをはり。陸游「輕雷轉轆斷梅初」自注に「鄉人謂梅雨有雷、曰斷梅」

【新】飄轉して定まらざる貌。元好問「半生無根著、飄轉如斷梗」

【新】つるいとなきる。元稹「孤琴在幽匣、時進斷絃聲」

【新】後漢書に「未有不斷斬以示武威者也」

【新】あしなざる。唐書、刑法志に「太宗即位、嘗謂侍臣曰、肉刑前代除之久矣、今復斷人趾、吾不忍也、於是除斷趾法」

【斷】コウ、ク。墟侯切。尤。

【斷】オウ、ウ。烏侯切。尤。

【斷】けづる(剛に同じ、剋)。(優紐)。

【斷】シヨ。章恕切。御。

【斷】キョ、ゴン。渠巾切。眞。

【斷】セリ(芹菜)。(つよし)。

【斷】リン。離珍切。眞。

【斷】石澗を流るる水の響音。

【斷】チャク。張略切。藥。

【斷】すき(鑿に同じ、鑿)。(やぶる)。(破)。

【斷】タク。斷の俗字。

【斷】タク、トク。徒管切。早。

【斷】(杜玩切。翰)。

【斷】(片段)。(截)。(たつ)。(絶)。(きり)。(さだむ)。(守りて變ぜざる貌)。(專一なる貌)。(さだめ)。(決行)。(敢爲)。

【斷正】裁決して是非をただす。晉書に「凡斷正臧否、宜先稽之禮律」

【斷乎】きつぱりしたる貌。蘇軾「斷乎如藥石必可、以伐病」

【斷行】おしきりておこなふ。きりざれとなりて列をなさす。庾信「驚鳥灑異度、濕雁斷行來」

【斷言】いひきる。

【斷決】とりきむ。後漢書、馮異傳に「時以私心斷決、未嘗不有悔」

【斷私】私慾をたつ。諸葛亮「斷私降意、以養將士」

【斷金】極めて固きまじはり。易經に「二人同心、其利斷金」

【斷念】おもひきる。あきらむ。

【斷佞】わるものを斬る。高啓「鹹妖正思今、斷佞猶幕昨」漢書、朱雲傳に「雲曰、臣願賜尚方斬馬劍、斷佞臣一人頭、以厲其餘」

【斷岫】けはしき山のほら。皇甫松「歷斷岫、而峰巒」

【斷崖】きりたちたる如きがけ。周賀「斷崖曾向壁中禪」

【斷坡】されたるとて。趙元鼎「斷坡斷崖對寒松」

【斷岸】罪人を處分したる例。晉書、杜預傳に「法者蓋繩墨之斷例、非窮理盡性之書也」

【斷岸】きりたちたるきし。蘇軾「江

流有聲、斷岸千尺」

【斷定】たしかにきむ。裴夷直「斷定今年不看花」

【斷面】物のきりくち。

【斷限】さかひをさだむ。

【斷峯】けはしきみね。(絶峯、峻峯)。

【斷案】江淹「臨江上之斷峯」

【斷】前提より推論せられたる断定。

【斷】ある日限内食事せず。佛本行經に「若因斷食、當得大福者、其野獸等、應得大福」

【斷】あみをたちきる。國語に「里革斷其罟、而棄之」

【斷】せなをきる。商子に「吏遂斷頤頤之脊」

【斷】梅雨のをはり。陸游「輕雷轉轆斷梅初」自注に「鄉人謂梅雨有雷、曰斷梅」

【斷】飄轉して定まらざる貌。元好問「半生無根著、飄轉如斷梗」

【斷】つるいとなきる。元稹「孤琴在幽匣、時進斷絃聲」

【斷】後漢書に「未有不斷斬以示武威者也」

【斷】あしなざる。唐書、刑法志に「太宗即位、嘗謂侍臣曰、肉刑前代除之久矣、今復斷人趾、吾不忍也、於是除斷趾法」

【斷脰】^{ダン} くびをきる。戰國策に「斷脰決腹」

【斷機】^{ダン} 切斷せるかけはし。陸遊「馬經」

【斷絡】^{ダン} 危無路。又、きるとつながらず。沈遼「我生無庸如斷絡」

【斷絶】^{ダン} 絶たざる。杜甫「厚祿故人書」

【斷絶】^{ダン} 恒飢稚子色凄凉。朱超「孤生如斷雲」

【斷然】^{ダン} きっぱりしたる貌。韓琦「斷腕」

【斷腕】^{ダン} うでをきりはなす。韓琦「斷腕未足駭」

【斷割】^{ダン} 刀にてきりたつ。又、物ごとをきりもりす。書經に「水能灌漑、火能烹飪、金能斷割、木能興作、土能生殖、穀能養育」

【斷腸】^{ダン} ①はらわたを絶ちきる。魏志に「病若在腸中、便斷腸滿洗」②心を痛むること甚だし。杜牧「芳草復芳草、斷腸還斷腸」

【斷割】^{ダン} 刀にてきりはなす。范曄「百怪日夜出、思爾一斷割」

【斷落】^{ダン} 文章の句切り。品字箋に「篇章斷落亦曰節」

【斷碑】^{ダン} かけたるいし。黄庭堅「斷碑零落臥秋風」

【斷崖】^{ダン} きれきれとなりたるいかた。陸遊「低昂泛斷崖」

【斷絰】^{ダン} ほころぶ。ほころび。韓維「補裝斷絰、搜三尺寸」

【斷碧】^{ダン} きれきれなるみどり。范後「行雲飛斷碧」

【斷魂】^{ダン} 甚だしく心をいたむ。章莊「自是春愁正斷魂」

【斷獄】^{ダン} 罪を裁判す。鹽鐵論に「今斷獄以萬計、犯法滋多」

【斷疑】^{ダン} うたがはしきを裁決す。易經に「以斷天下之疑」

【斷截】^{ダン} たちきる。(截斷)。謝靈運「彭排鳥槍、斷截衝卷」

【斷流】^{ダン} きれきれに成りたる氷。范曄「前輩風流逐斷流」

【斷察】^{ダン} しらへみる。(檢察)。後漢書、王吉傳に「能斷察疑獄、發三起姦伏」

【斷箭】^{ダン} 射たれたる矢。五代史、契丹録に「德光擊晉、戰於威、城兵既交、殺傷相半、陣間斷箭遺鏃、布厚寸餘」

【斷編】^{ダン} みじかき文章。きれきれの文書。宋史に「凡周漢以降、金石遺文、斷編殘簡、一切綴拾、謂之集古錄」

【斷樹】^{ダン} 木をきる。きりたる木。禮記に「斷一樹、殺一獸」

【斷橋】^{ダン} しなをおとす。おちたるはし。杜甫「斷橋無復板」

【斷礎】^{ダン} ちぎれたるいし。周震夏「荒碑斷礎悉興致」

【斷臂】^{ダン} ひちを絶ちきる。歐陽修「京師歲旱、有浮屠人、斷臂請雨」

爲田八十萬億、一萬億畝

【斷章取義】^{ダン} 詩文を解するに、作者の本意に拘らず、取りて自己の用となすをいふ。孟子に「魯頌曰、戎狄是膺、荆舒是懲、周公方且膺之」朱注に「按今此詩爲魯公之頌、而孟子以周公之言、亦斷章取義也」又、孝經、孔傳に「斷章取義、上下相成」

【斷髮文身】^{ダン} 頭髮を剪りいれずみす。左傳に「仲雍嗣之、斷髮文身、嬴以爲飾、豈禮哉」

【斷機之戒】^{ダン} 學事を中途にして廢するをいましむるなり。孟母の故事より出づ。列女傳に「及孟子既學而歸、孟母問學所、孟子曰、自若也、孟母以刀斷其織、曰、子之廢學、若吾斷其織、孟子懼、且夕勤學不息、師事子思、遂爲名儒」

【斷港絶潢】^{ダン} 港は支流、潢は池、連絡の絶えたるをいふ。韓愈「學者必慎其所道、道於楊墨老莊佛之學、而欲之聖人之道、猶航斷港絶潢、以望至海也」

【斷頭將軍】^{ダン} 決死の將軍をいふ。蜀志、張飛傳に「至江州、破巴郡太守嚴顏、生獲顏、飛呵顏曰、大軍至、何以不降而敢拒戰、顏答曰、卿等無狀、侵奪我州、我州惟有斷頭將軍、無有降將軍也」

【斷齋畫粥】^{ダン} 質にして力學するをいふ。書言故事に「范希文修學、最貧、在長白山僧舍、煮粟二升、作粥一器、經宿遂凝、以刀畫爲四塊、早晚取二塊、斷齋數十莖、而啗之」

【斷爛朝報】^{ダン} 王安石が春秋をそしめる語。周麟之春秋經解、跋に「王荊公初欲釋春秋、以行天下、而孫莘老之書已出、一見而思之、自知不能復出、其右、遂詆聖經、而廢之曰、此斷爛朝報也、不列於學官、不用於貢舉」

【斷牛馬】^{ダン} 盤區。盤區は銅器なり、極めて銳利なる劍の義。戰國策に「吳子之劍、肉試則斷牛馬、金試則截盤區」

【斷而敢行鬼神避之】^{ダン} 斷じて行へば障礙に打ち勝ち得べきをいふ。史記、李斯傳に「願小而忘大、後必有害、狐疑猶豫、後必有悔、斷而敢行、鬼神避之、後有成功」

方部

【方】^{ハウ} 分房切。隅。ハウ。分房切。隅。

【方寸】^{ハウ} 一寸四方。漢書に「黃金方寸而重一斤」心をいふ。列子に「吾見子之心矣、方寸之地虛矣、幾聖人也」

【方丈】^{ハウ} 一丈四方なり。孟子に「食前方丈、侍妾數百人、我得志不爲也」

【方丈蓋】^{ハウ} 釋氏要覽に「方丈蓋寺院之正寢也、唐顯慶年中、敕王玄奘往西域、至毗耶黎城東北四里許、維摩居士宅、示疾之室、遺趾、疊石爲之、玄奘躬以手板縱橫量之、得三十笏、故號「方丈」轉じて、長老の稱。白居易「方丈若能來問病」海中の神仙の住むといふ山の名。史記に「齊人徐市等上書言、

海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛洲、仙人居之、謂得寶戒與童男女、求之【方土】^{ハツ}、くに。書經、疏に「盡貢其方土所生之物」

【方士】^{ハツ}、周代の官名。●仙術を行ふ人。江淹「方士練玉液」

【方内】^{ハツ}、くにうち。史記に「方内之治亂、在陛下所執」

【方外】^{ハツ}、よすてびと。後には、主として佛教徒を指す。莊子に「孔子曰、彼遊方之外、而丘遊方之内者也」●中國の方域外、即ち夷狄の地の稱。楚辭に「覽方外之荒忽兮」

【方冊】^{ハツ}、しよもつ。陸倕「布在方冊、無彰器用」

【方今】^{ハツ}、ただいま。魏志、齊王傳に「正始元年、詔曰、方今百姓不足、而御府多作金銀」

【方田】^{ハツ}、田圃の縱横を等分の長さにする、こと。(均田)。通典に「宋熙寧五年、修方田」

【方冬】^{ハツ}、十月の異名。(初冬)。杜甫「方冬變所爲」

【方正】^{ハツ}、ただし。漢書、董仲舒傳に「陛下擊賢良方正之士」

【方舟】^{ハツ}、ふねをならぶ。史記、蘇秦傳に「方舟而下」

【方羊】^{ハツ}、苦勞の貌。一説に、遊戯。左傳に「如魚窺尾衡流、而方羊焉」

●彷彿に通ず。さまよふ。史記に「外隨大王後車、彷彿天下」

【方式】^{ハツ}、方法上の形式。

【方行】^{ハツ}、普くゆきわたる。書經に「方行天下、至于海表、罔有不履」

【方技】^{ハツ}、醫術の書籍。晉書、張華傳に「華於圖緯方技之書、莫不詳覽」

【方志】^{ハツ}、ただしき、ころざし。●地方のこと、がらを記したる書籍。皇甫謐「其鳥獸草木、則驗之方志」

【方言】^{ハツ}、一地方にのみ行はるる言語。王維「因入見風俗、入境聞方言」

【方伯】^{ハツ}、一方面の大諸侯。又、權力の最も大なる地方官。禮記に「千里之外、設方伯」

【方位】^{ハツ}、方角位置。朱子語錄に「孤虛以方位言、如俗言某方利某方不利之類」

【方折】^{ハツ}、四角にまがる。尸子に「水圓折者有珠、方折者有玉」

【方命】^{ハツ}、王命にさからふ。書經に「兪曰於鯀、帝曰吁、咈哉、方命圯族」

【方物】^{ハツ}、その地方に産するもの。書經に「無有違遺、畢獻方物」●各別に命名す。史記に「民神雜糅、不可方物」

【方社】^{ハツ}、四方の神と土地の神と。詩經に「祈年孔夙、方社不莫」箋に「祈豐年、甚早、祭四方與社、又不晚」

【方牀】^{ハツ}、四角なると。南史、賀革傳に「革有六尺方牀」

【方京】^{ハツ}、四角なる倉庫。說文に「圓謂之圜、方謂之京」

【方皇】^{ハツ}、さまよふ。(彷彿)。荀子に「方皇周浹、曲得其次序、是聖人也」

【方便】^{ハツ}、(佛)便宜にしたがって人を導く方法。維摩經に「以無量方便、饒益衆生」

【方面】^{ハツ}、一方面に當る大將の義。通鑑に「袁紹與操共興兵、紹問操曰、若事不輯、則方面何所可據」かくばりたるかほ。後漢書、高獲傳に「爲人尼首方面」一方の土地。石關銘に「區宇又安、方面靜息」

【方直】^{ハツ}、ただしき。晉書、郭琦傳に「琦少方直有雅量」

【方案】^{ハツ}、しかたのかんがへ。方法の工夫。(考案)。

【方虛】^{ハツ}、まさになふ。詩經に「天之方虛、無然諸語」

【方軌】^{ハツ}、わたちをならぶ。史記に「車不得方軌」

【方針】^{ハツ}、羅針盤の方位をさししめす針。●めざす方。一定の目的。

【方祇】^{ハツ}、土地。顏延之「方祇始擬」

【方峻】^{ハツ}、ただしき。唐書、於陵傳に「於陵器量方峻、進止有常度、節操堅明」

【方書】^{ハツ}、方術の書籍。唐書、李聽傳に「聽好方書」四方の文書。漢書、張蒼傳に「秦時爲御史、主柱下方書」

【方重】^{ハツ}、方正にして嚴重なり。後漢書、牟融傳に「融代伏恭爲司空、舉動方重、甚得大臣節」

【方矩】^{ハツ}、かね。曲尺。玉篇に「圓曰規、方曰矩」

【方術】^{ハツ}、方士のわざ。仙術。北史、周潛傳に「潛多方術、尤善醫藥」

【方略】^{ハツ}、はかりごと。史記、驃騎傳に「天子欲教之孫吳兵法、對曰、願方略如何耳、不至學古兵法」

【方術】^{ハツ}、ふねをならぶ。晉書、魚豎方術集

【方陳】^{ハツ}、方形のちんだて。國語に「以萬人爲方陳」

【方壺】^{ハツ}、神仙の住むといふ島。列子に「渤海之東有大壺焉、其中有五山焉、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛州、五曰蓬萊」

【方客】^{ハツ}、道士の稱。太玄經に「大開帷幕、以引方客」

【方望】^{ハツ}、近郊にて四方の神を祭る。又その祭。公羊傳に「天子有方望之事、無所不通」

【方程】^{ハツ}、數學の名。算經に「九章名義、八曰方程」

【方策】^{ハツ}、しよもつ。中庸に「文武之政、

布在方策」

【方雅】^{ハツ}、ただしきしてのりあり。(端雅)。北史、婁昭傳に「昭方雅正直、有深度深謀」

【方慎】^{ハツ}、ただしきしてつしむ。●(眞慎)。北史に「孝伯性方慎忠孝」

【方廉】^{ハツ}、たたくしていさぎよし。李虞仲「清貞不撓、方廉自持」

【方綱】^{ハツ}、四角なるゆか。宋書に「自非二三器、不得止方綱」

【方縑】^{ハツ}、紙の異名。

【方際】^{ハツ}、道たたく智ひろし。漢書、武帝紀に「詳延天下方聞之士、咸薦諸朝」注に「方、道也、聞、博聞也」

【方箱】^{ハツ}、四角なる車のものを入れたる箱。玉海に「爲車者、有廣箱、有方箱」

【方潔】^{ハツ}、ただしきしていさぎよし。後漢書、王丹傳に「丹資性方潔、疾惡強豪」紙の異名。

【方輦】^{ハツ}、こしきなならぶ。魏文帝「列翠星陳、戎車方輦」

【方檠】^{ハツ}、ただしき。元經傳に「何充器局方檠、有萬夫之望」

【方頰】^{ハツ}、四角なるほほ。梁書、太宗紀に「方頰豐下、鬚髮如畫」

【方諸】^{ハツ}、月より水をとる鏡。晉書に「方諸可取、以取水于月」

【方劑】^{ハツ}、くすりを調合す。又、調合し

たる藥。

【方瞳】^{ハツ}、方形なるひとみ。拾遺記に「有父老五人、方瞳握青筠杖」

【方輶】^{ハツ}、ながえをならぶ。西京賦に「冠帶交錯、方輶接軫」

【方檢】^{ハツ}、ただしき。北史、裴駿傳に「弱冠通涉經史、方檢有禮度、鄉里宗敬焉」

【方輿】^{ハツ}、地をいふ。(坤輿)。宋玉「方地爲輿、圓天爲蓋」

【方礎】^{ハツ}、方形のいし。元稹「方礎荆山採、修椽郢匠鉤」

【方額】^{ハツ}、四角なるひたひ。唐書、太平公主傳に「太平公主、則天皇皇后所生、方額廣頤、多陰謀」

【方嚴】^{ハツ}、ただしきしておこそかなり。(整嚴、端嚴)。晉書、王雅傳に「王恭風神簡貴、志氣方嚴」

【方類】^{ハツ}、四角なるひたひ。五代史に「郭無爲棗州人、方類烏曠、好學多聞」

【方響】^{ハツ}、くつわをならぶ。晉書に「佞人方響、竝后載馳」

【方寸地】^{ハツ}、一寸四方ばかりの地。唐書、員中干傳に「陛下何惜玉陸方寸地、不使臣披露肝膽乎」

【方山冠】^{ハツ}、古の樂人の用おしかんむり。後漢書に「方山冠、制似進賢、前高七寸、後高三寸、纓長八寸、似進賢冠、五采穀爲之、祠宗廟、天子八佾、四

【昌運】^{ウツ} さかんなる運勢。高啓「獻符多士歌昌運」

【昌盛】^{ウツ} さかんなり。南史、齊高帝紀「子孫當昌盛」

【昌樂】^{ウツ} さかたのしむ。史記に「驍兵休卒養馬、世世昌樂」

【昌熾】^{ウツ} さかんなり。說苑に「夫穀者國家所以昌熾、士女所以姣好」

【明】^{メイ} あきらかなり(明)。元、ケン、ガン、許元切。元、メイ、ミヤウ、武兵切。庚、あきらかなり(早旦)あきらかに(照)たふとし(尊)とほる(通)そなほる(は)はじめあきらむ(目)の精(智)能(日)書(現)世(有)形。

【明才】^{メイ} 事の理非に明かなるはたらき。管輅別傳に「既有明才、遭朱陽之運、於時名勢赫奕」

【明夕】^{メイ} あすのばん。儀禮に「厥明夕爲期于廟門之外」

【明允】^{メイ} あきらかにしてまことなり。左傳に「高陽氏有才子八人、齊聖廣淵、明允篤誠、天下之民、謂之八愷」

【明水】^{メイ} 神に供ふるみづ。禮記に「夏后氏尙明水」

【明文】^{メイ} 法典にあきらかに記しある文言。典引に「展放唐之明文」

【明日】^{メイ} あす。あくるひ。論語に「明日子路行以告」

【明王】^{メイ} かしこききみ。莊子に「明王之治功蓋天下、而似不自己」

【明火】^{メイ} 日光よりとりたるひ。又、あかるきひ。周禮に「凡卜以明火蒸爇」

【明月】^{メイ} くもりなきつき。張若虛「海上明月共潮生」

【明旦】^{メイ} あくるあさ。張說「故歲今宵盡、新年明旦來」

【明目】^{メイ} あきらかなるめ。又、めをあきらかにす。管子に「聰耳明目、不爲愛金財」

【明示】^{メイ} あきらかにしめす。左傳に「明示百官」

【明白】^{メイ} あきらかなり。莊子に「夫明白于天地之德者、此之謂大本」

【明光】^{メイ} あきらかにひかる。又、あきらかなるひかり。書經に「惟公德明光于上下、勤施于四方」

【明夷】^{メイ} 易の卦の名。易經に「明夷利銀貞」

【明衣】^{メイ} 布にて作りたる衣。齋戒の時「著る。論語に「齊必有明衣、布」

【明年】^{メイ} あくるとし。來年。劉廷芝「明年花開復誰在」

【明妃】^{メイ} 前漢元帝の妃の王昭君。杜甫「羣山萬壑赴荆門、生長明妃尚有餘」

【明教】^{メイ} あきらかなるいさを。あきらかなるしるし。曹植「伯樂馳千里、明君致太平、任賢使能之明教也」

【明神】^{メイ} ひかるたま。蔡邕「明珠不瑩、焉發其光」

【明時】^{メイ} あたらかなるかみ。左傳に「國之將興、明神降之、監其德也」

【明時】^{メイ} あきらかにしめる。杜甫「罷歸無舊業、老去戀明時」

【明悉】^{メイ} あきらかに知る。あきらかにつくす。南史に「樞博學明悉舊章」

【明細】^{メイ} くはしくまかなり。

【明章】^{メイ} あきらかにあらはす。禮記に「聽天下之內治、明章婦順」

【明規】^{メイ} あきらかなるのり。阮瑤「傳告後代人、以此篇明規」

【明旌】^{メイ} あきらかにあらはす。子華子「明旌善類、而誅勦醜厲」

【明晦】^{メイ} あきらかなるとくらきと。賢きと愚なると。梁武帝「相去既路遠、明晦亦懸殊」

【明淨】^{メイ} けがれなくきよし。晉書に「火珠皎然明淨、以瓢取吞之」

【明淑】^{メイ} あきらかにしてきよし。馮衍「以明淑之德、秉大使之權」

【明清】^{メイ} あきらかなり。書經に「今天相民作配在下、明濇于單辭」

【明朝】^{メイ} ほがらかなり。淮南子に「文彩明潤潤澤」

【明教】^{メイ} あきらかなるをしへ。又、教をあきらかにす。史記に「魏王曰、寡人不肖、未嘗得聞明教」

【明敏】^{メイ} さとし。北史に「唐邕少明敏、有才幹」

【明堂】^{メイ} むかし、王者の諸侯を朝參せしめし殿堂の名。又、朝廷。孟子に「明堂者、王者之堂也」

【明嬪】^{メイ} あざやかにうつくし。鮮嬪。李成「春山明嬪、夏木繁陰」

【明詔】^{メイ} あきらかなるみこと。董仲舒「陛下發德音、下明詔」

【明犀】^{メイ} 角のひかるさい。洞冥記に「吹勒國貢犀四頭、狀如水兕、角表裏有光、因名明犀」

【明智】^{メイ} あきらかにしてちふあり。崔駰「求莫辨於明智」

【明綯】^{メイ} あきらかにしてあやあり。蘇軾「岡巒回合、金碧爛明綯」

【明朝】^{メイ} あすのあさ。高適「霜覺明朝又一年」

【明發】^{メイ} 夜のあけんとするころ。詩經に「明發不寐、有懷二人」

【明盛】^{メイ} 道あきらかにしてさかん

【明府】^{メイ} 縣令をいふ。類書纂要に「稱太守縣令、皆曰明府」

【明治】^{メイ} あきらかになむ。あきらかになまざる。易經に「聖人南面聽天下、嚮明而治」

【明星】^{メイ} 金星をいふ。詩經に「昏以為期、明星煌煌」

【明幽】^{メイ} 現世と冥土と。韓愈「病味臥牀褥、分知隔明幽」

【明宣】^{メイ} あきらかにしめす。崔瑗「辛尹願訪、文武明宣」

【明者】^{メイ} 智あきらかなる人。易經、注に「闇者求明、明者不語于闇」

【明度】^{メイ} あきらかなる才能。晉書、山濤傳に「帝手詔曰、中書君之明度、豈當介意耶」

【明指】^{メイ} あきらかなる旨。あきらかなるさしづ。漢書に「顧有至愚極陋之累、不足厚望、願明指」

【明信】^{メイ} たしかなるおとづれ。朱熹「亦不得明信、令人懸心耳」

【明澗】^{メイ} ちかかなる心。左傳に「苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩蕰藻之菜、中饋可薦、於鬼神、可羞於王公」

【明訓】^{メイ} あきらかなるをしへ。逸周書に「選官以明訓、頑民乃順」

【明眞】^{メイ} あきらかにしてまことなり。又、あきらかなる天理。阮瑤「何患處貧苦、但當守明眞」

【明悟】^{メイ} あきらかにささる。又、さとし。晉書に「傳咸、風格峻整、復性明悟」

【明哲】^{メイ} あきらかにして能く事を察す。又、その人。書經に「知之曰明哲、明哲實爲則」

【明效】^{メイ} あきらかなるいさを。あきらかなるしるし。曹植「伯樂馳千里、明君致太平、任賢使能之明效也」

【明時】^{メイ} ひかるたま。蔡邕「明珠不瑩、焉發其光」

【明神】^{メイ} あたらかなるかみ。左傳に「國之將興、明神降之、監其德也」

【明時】^{メイ} あきらかにしめる。杜甫「罷歸無舊業、老去戀明時」

【明悉】^{メイ} あきらかに知る。あきらかにつくす。南史に「樞博學明悉舊章」

【明細】^{メイ} くはしくまかなり。

【明章】^{メイ} あきらかにあらはす。禮記に「聽天下之內治、明章婦順」

【明規】^{メイ} あきらかなるのり。阮瑤「傳告後代人、以此篇明規」

【明旌】^{メイ} あきらかにあらはす。子華子「明旌善類、而誅勦醜厲」

【明晦】^{メイ} あきらかなるとくらきと。賢きと愚なると。梁武帝「相去既路遠、明晦亦懸殊」

【明淨】^{メイ} けがれなくきよし。晉書に「火珠皎然明淨、以瓢取吞之」

【明淑】^{メイ} あきらかにしてきよし。馮衍「以明淑之德、秉大使之權」

【明清】^{メイ} あきらかなり。書經に「今天相民作配在下、明濇于單辭」

【明朝】^{メイ} ほがらかなり。淮南子に「文彩明潤潤澤」

【明教】^{メイ} あきらかなるをしへ。又、教をあきらかにす。史記に「魏王曰、寡人不肖、未嘗得聞明教」

【明敏】^{メイ} さとし。北史に「唐邕少明敏、有才幹」

【明堂】^{メイ} むかし、王者の諸侯を朝參せしめし殿堂の名。又、朝廷。孟子に「明堂者、王者之堂也」

【明嬪】^{メイ} あざやかにうつくし。鮮嬪。李成「春山明嬪、夏木繁陰」

【明詔】^{メイ} あきらかなるみこと。董仲舒「陛下發德音、下明詔」

【明犀】^{メイ} 角のひかるさい。洞冥記に「吹勒國貢犀四頭、狀如水兕、角表裏有光、因名明犀」

【明智】^{メイ} あきらかにしてちふあり。崔駰「求莫辨於明智」

【明綯】^{メイ} あきらかにしてあやあり。蘇軾「岡巒回合、金碧爛明綯」

【明朝】^{メイ} あすのあさ。高適「霜覺明朝又一年」

【明發】^{メイ} 夜のあけんとするころ。詩經に「明發不寐、有懷二人」

【明盛】^{メイ} 道あきらかにしてさかん

り。王融「幸哉明盛世、壯矣帝王居」
 【明視】シイ 〔動〕うさぎの異名。禮記に「凡祭宗廟之禮、免曰明視」
 【明察】シイ あきらかに見抜く。〔審察、彰察〕。韓非子に「不明察、不能燭私」
 【明解】シイ あきらかにしる。又、あきらかにときあかす。後漢書に「練達事體、明解朝章」
 【明聖】シイ 知徳あきらかにさとし。又、その人。漢書に「高皇帝、明聖威武」
 【明經】シイ 聖賢の書をあきらめ知る。漢書、平當傳に「以明經爲博士」
 【明著】シイ 古、我國の大學寮にて、經書を修めし科。
 【明善】シイ あきらかなり。晉書に「功勳明著、賞勳隨之」
 【明肅】シイ あきらかにして整ふ。南史、江革傳に「爲政明肅、豪彊憚之」
 【明義】シイ 道理をあきらかにす。書經に「敦信明義、崇徳報功」
 【明殿】シイ 墓の側に立つるとの。五代史に「其國君死葬、則于其墓側、起屋、謂之明殿」
 【明推】シイ あきらかにほかる。程琳「天載悠遠、無容明推」
 【明慎】シイ あきらかにしてつつしむ。易經に「君子以明慎」
 【明道】シイ あきらかなるみち。又、みちをあきらかにす。漢書に「明其道不」

計其功
 【明滅】シイ あかるくなり又くらくなる。杜甫「回首鳳翔縣、旌旗晚明滅」
 【明照】シイ あきらかなるひかり。元稹「曉日初明照」
 【明辟】シイ 聰明なる君。書經に「周公拜手稽首曰、朕復子明辟」
 【明暉】シイ あきらかなり。范成大「圓景明暉倚雲立」
 【明聞】シイ あらはれきこゆ。國語に「諸稽郢曰、今天王既封殖、越國以明聞於天下」注に「明、顯也」
 【明微】シイ かななるをあきらかにす。禮記に「夫禮者君之柄也、所以別嫌明微、價鬼神、考制度、別仁義也」
 【明遠】シイ あきらかにして深遠なり。晉書に「雅量弘高、遠見明遠」
 【明暢】シイ あきらかにしてのぶ。宋史に「爲言事、委曲敷釋、中書言吐明暢」
 【明暉】シイ あきらかなるひとみ。元稹「波澄雨明暉」
 【明箴】シイ あきらかなるいましめ。高允「敬承嘉誨、永佩明箴」
 【明賞】シイ あきらかにほむ。韓非子に「先王明賞以勸之、嚴刑以威之」
 【明慧】シイ あきらかにさとし。〔察慧〕。彌衡「明慧聰善」
 【明輝】シイ あきらかにかがやく。鸚鵡賦に「合火德之明輝」

【明殺】シイ 智あきらかにしてつよし。唐書、吐蕃傳に「性明殺、用兵有制節」
 【明銳】シイ あきらかにするどし。唐書、元稹傳に「積性明銳、遇事輒舉」
 【明德】シイ あきらかにして人道にかなひたるおこなひ。書經に「黍稷非馨、明德惟馨」天よりうけたるくもりなき本性。大學に「大學之道、在明明徳、在親民、在止於至善」
 【明穎】シイ あきらかにしてさとし。宋書、三王傳に「幼而明穎、姿顏美麗」
 【明確】シイ たしかにしてあきらかなり。【明辨】シイ あきらかにわかさまふ。禮記に「慎思之、明辨之」
 【明曉】シイ あきらかなり。あきらかに通す。南史、孔頴傳に「明曉政事」
 【明器】シイ 葬式の用具。儀禮に「既夕陳明器于乘車之西」注に「明器、祔器也」
 【明瞭】シイ あきらかなり。郭熙「高遠者明瞭、深遠者細碎」
 【明懸】シイ あきらかにしてさかんなり。顏延之「著軫豈明懸、善遊皆聖仙」
 【明闇】シイ あきらかなるとくらさと。論衡に「明闇不能並知」
 【明燭】シイ あかるきとしび。としびをあかるくす。抱朴子に「明燭宵舉、飛蟲羣起」
 【明燦】シイ あきらかなり。雲谷雜記に「是夕果晴、星斗明燦」

【明達】シイ あきらかに通す。漢書に「高祖不修文學、而性明達、好謀能聽」
 【明燭】シイ あかりを取るあな。方鳳「天光一道燭屏內、知此明燭從何穿」
 【明燭】シイ あかるくしてかわけり。左傳、疏に「以所居下濕墜埃故、欲更於明燭之處」
 【明鮮】シイ あきらかにあざやかなり。章應物「夏條綠已密、朱萼綴明鮮」
 【明聰】シイ 目あきらかに耳さとし。智識すぐれたるにいふ。宋之間「天高難訴、遠負明聰」
 【明曜】シイ あきらかにかがやく。晉書に「明曜參日月、功化侔四時」
 【明鏡】シイ よくひかるかがみ。漢書に「清水明鏡、不可形逃」あきらかにす。漢書、衛姬傳に「深説經義、明鏡聖法」
 【明斷】シイ あきらかに断す。あきらかなる判斷。唐書に「憲宗英果明斷、欲治僭叛、一以法度」
 【明識】シイ あきらかにものをしる。遜遜「雅才明識、敏行能文」
 【明證】シイ あきらかなるあかし。潛夫論に「曲水惡直繩、重罰惡明證」
 【明麗】シイ あきらかにしてうつくし。碧雞漫志に「春雨始晴、景色明麗」
 【明耀】シイ あかるくひかる。述異記に「帝問方朔、何謂洞穴珠、朔曰、河底有穴、深數百丈、中有赤蜂、蜂生此珠、徑寸、明耀絕世」
 【明辯】シイ あきらかなる辯舌。隋書、李子雄傳に「明辯有器幹、帝甚任之」
 【明靈】シイ あきらかなるみたま。玉海に「眞歲星之玉氣、赫上帝之明靈」
 【明顯】シイ あきらかにあらはる。淨住子に「洞達三世、了照萬有、卓然明顯、英聖超羣」
 【明鑑】シイ あきらかなるかがみ。よきてほん。唐書に「明鑑所以照形、往事所以知今」
 【明驗】シイ あきらかなるしるし。法苑珠林に「譬六趣之明驗」
 【明地】シイ あからさまに。【明庶風】シイ 東方よりふくかぜ。史記に「明庶風居東方、衆物盡出也」
 【明礬石】シイ 〔礬〕明礬製造の原料とする硫酸及び礬土の化合物。
 【明七才子】シイ 明代に相結んで徒をつくりし七人の詩人。學山錄に「陸萬間、李于麟、王世貞、吳國倫、徐中行、宗臣、梁有譽、謝茂秦、號七才子、見錢謙益所記」
 【明十才子】シイ 明代に相結んで徒をつくりし十人の詩人。學山錄に「李夢陽、與同時者、何景明、徐禎嗣、邊貢、顧璘、鄭善夫、陳沂、朱應登、康海、王九思、號十才子、見李夢陽傳」

【明月之珠】シイ やみよにもひかりを發するたま。李斯「垂明月之珠、服太阿之劍」
 【明月爲燭】シイ あきらかなる月を以て燈火に代ふ。唐書に「陸羽嘗問、孰爲往來者、對曰、太虛爲室、明月爲燭、與四海諸公共處、未嘗少別、何有往來」
 【明目張膽】シイ 奮發して事に當るにいふ。唐書、韋思謙傳に「丈夫當敢言、地須要明目張膽以報天子、焉能碌碌保妻子耶」
 【明見萬里】シイ 聰明なるに喩ふ。後漢書に「瞿書既至、河西、咸驚以爲天子明見萬里之外」
 【明明赫赫】シイ あきらかにかがやく。詩經に「明明在下、赫赫在上」
 【明眸皓齒】シイ あきらかなるひとみと白き齒と。美人を形容するにいふ。杜甫「明眸皓齒今何在、血汚遊魂歸不得」
 【明珠暗投】シイ あきらかなる光輝を發する珠を闇中に投ず。至寶も人に體るに道を以てせざれば御つて、怨を招く義。史記に「明月之珠、夜光之璧、以闇投入於道路、人無不按劍相眄者、何則無因而至前也」
 【明若保身】シイ 理に順ひ事を處して身を全うす。詩經に「既明且哲、以保其身」

【易轍】易 車の通過の道をかふ。晉書に「愛易轍之勤、而得覆車之軌」

【易行道】易 佛。彌陀の弘願力によりて佛となるをいふ。難行道の對。毘婆娑論に「菩薩求阿毘跋致、有二種道、一者難行道、一者易行道」

【易子橋骸】易 子をかへて食ひ、骸をかきて食ふ。籠城して困厄するをいふ。左傳に「華元曰、敝邑易子而食、析骸以爨」

【易之憂患】易 易經を作りし人の憂患ありしをいふ。歐陽修「易之憂患、詩之怨刺」

【易地皆然】易 人その地位を換ふれば皆同じ行をなす。孟子に「禹稷顔子、易地則皆然」

【易衣並食】易 一枚の服を相かへて著け、二三日を並せて一日の食をなす。極めて貧しき有様をいふ。禮記に「易衣而出、並日而食」

【易樂多哀】易 たのしみ易き者は哀しむことも亦多し。心のかかるるしきが故なり。文中子に「易樂者必多哀、輕施者必好奪」

【昔日】昔 むかし。さきのひ。

【昔昔】昔 昨夜といふに同じ。列子に「精神流散、昔昔夢爲國君」

【昔彦】昔 前代のすぐれたる士。王融「端溪懸昔彦、測水謝前修」

【昔者】昔 又、昨日の義にもいふ。孟子に「曰、子來幾日矣、曰昔者」

【昔時】昔 むかし。駱賓王「昔時人已沒、今日水猶寒」

【昔然】昔 ひさしき貌。詩經に「知而不已、誰昔然矣」

【昔愁】昔 過去のうれへ。賀知章「送子成今別、令人起昔愁」

【昔歲】昔 今ぞ。きねん。左傳に「昔歲入陳、今茲入鄭」

【昔談】昔 むかしなした。顏延之「琢玉成器、無爽昔談」

【听】听 キン、コン。許斤切。文。

【厩】厩 ひので(日出)あきらかなり(明)。

【易】易 ヤウ。與章切。陽。

【五書】易 ひらく(開)とびあがる(飛揚)ながし(長)ひかり(光)おほし(衆)に(衆)開なり、日、勿に从ふ

【星】星 セイ、シヤウ。先青切。青。の點たる貌。ほとほり(二十八宿の)草の名。姓。

【星斗】星 ほし。晉書に「馳車獻號、高蓋成陰、星斗呈祥、金陵表慶」

【星火】星 流星の火光。轉じて、事の急なるに喩ふ。李密「郡縣逼迫、催臣上道、州司臨門、急於星火」

【星布】星 ほしの如く散布す。後漢書に「屯騎羅而星布」

【星光】星 ほしのひかり。朱熹「微月墮西嶺、爛然衆星光」

【星行】星 いそぎて行く義。魏志に「晨夜星行、遠致本州」

【星次】星 ほしのやどり。唐書に「考正星次、爲一代之制」

【星芒】星 ほしの光のほさき。張正見「學劍動星芒」

【星河】星 あまの川。河圖括地象に「川德布精、上爲星河」

【星夜】星 ほしある夜。晉書に「夏盡熱又兼星夜」

【星津】星 ほしのやどり。陳後主「星津雖可望、詎得似人精」

【星星】星 ほつほつと白き貌。謝靈運「戚戚感物歎、星星白髮垂」

【星移】星 年月うつりゆく。王勃「物換星移幾度秋」

【星移幾度秋】星 天文のわざ。五代史に「周傑以星術事人」

【星宿】星 ほしのやどり。漢書に「畫論三書傳、夜觀星宿」

【星夜】星 夜の中にいたつ。

【星槎】星 世界をめぐる舟。宋之間「賓至星槎落、仙來月宇空」

【星馳】星 いそぎてはしる。潘岳「羽檄星馳、鉦鼓日戒」

【星傳】星 急を要する宿驛の乗馬。權徳輿「星傳指湘江」

【星算】星 天文の術。梁書、陶弘景傳に「尤明陰陽五行風角星算」

【星漢】星 あまのがは。魏文帝「星漢西流、夜未央」

【星屬】星 あかりとり。藝林伐山に「小者曰星屬」

【星霜】星 としつき。杜牧集に「經幾年、曰星換星霜」

【星營】星 ほし。薩都刺「露帳旌旗天接水、星營鼓角月連山」

【星羅】星 ほしの如くつらなる。西都賦に「列卒周匝、星羅雲布」

【星讀】星 天文と未來書と。晉書に「禁郡國不得私學星讀」

【星驚】星 いそぎてはしる。傅休奕「電發星驚」

【星行電征】星 いそぎてゆく。風俗通に「星行電征、數日歸」

【映】映 エイ、ヤウ。於敬切。敬。

【映空】映 空にうつる。杜甫「哀荷且映空」

【映帶】映 うつりあふ。王羲之「有清流激湍、映帶左右」

【映發】映 うつりあらはる。宣和畫譜に「丘慶餘善畫、中獨以墨之淺深、映發、亦極形似之妙」

【映徹】映 うつりとほる。世説に「雖不能休、明一世、足以映徹九原」

【映輝】映 うつりひかる。陸佃「丹樓翠閣、映輝湖山」

【映紅】映 すだれにうつる。李商隱「映紅山脚、一名映山紅」

【映日果】映 「植」いちじくの異名。

【眩】眩 ケン、ゲン。煖絹切。眩。ひのひかり(日光)。

【咄】咄 ホツ、ホチ。普没切。月。ハイ、ヘ。イ、へ。普没切。咄。ハイ、ヘ。ひので(日出)はる、晴。

【咄咄】咄 日出でて未だ明かならざる貌。楚辭に「時咄咄兮旦日」

【春】春 シュン。昌舒切。眞。尺尹切。眞。はる(春)いたす(出)。

【春水】春 はるのみづ。顧愷之「春水滿四澤、夏雲多奇峯」

【春分】春 啓蟄の次に来る氣節。三月廿一日頃。晝夜平分の時なり。晉書に「以春分之夕、見於丁、以秋分之夕、見於丙」

【春光】春 はるのけしき。春宴錄に「春光且莫去、留與醉人看」

【春江】春 はるのかは。蘇軾「春江水暖鴨先知」

【春坊】春 皇太子の御殿。又、皇太子(東宮)宮僚備要に「太子宮曰春坊」

【春服】春 はるぎ。論語に「暮春者、春服既成」

【春官】春 禮法・祭祀の、ことを掌る官。周禮に「春官宗伯曰禮官之屬」

〔日部〕春味

【春約】ハルノまつり。禮記に「天子諸侯宗廟之祭、春曰禘。」

【春意】ハルノ長閑なる心ばへ。杜甫、碧草遠、春意沉湘萬里秋。

【春驚蟄】ハルノ名。戶教坊記に「春驚蟄、高宗曉、登律、長坐聞、驚蟄、命樂工白明達、寫之、遂有此曲。」

【味死】シヤ。上書に用ゐる語。言ふ所不當ならん死を以て謝すといふより起る。

【昇】ヘン、ベン。皮變切。饒。ひかり(日光)。あきらかなり(明)。

【味】マイ。慣用音。やく、むさばる(食)。樂の名、東夷の樂。

〔日部〕味昨味昇胆胸昏昭

【昨】サク、ザク。在各切。藥。昨、前日。江淹「送君如昨日、橫前露已團。」

【昭】セウ。之遙切。蕭。昭、示萬嗣、永永不朽。

【昭】セウ。之遙切。蕭。昭、示萬嗣、永永不朽。

【時機】ツナリ。はづみ。魏徵「應時機」

【時世】ツナリ。流行のよそほひ。白居易

【時不可失】ツナリ。よきをりの逃すべからざるをいふ。戦國策に「敵不可

【時雨之化】ツナリ。教化の普く及ぶをいふ。成語考に「學業感師之造成、曰三仰

【時殊風異】ツナリ。時節が違へば、風俗も亦従つて異なり。宋書に「一國之事、

【時差之莫】ツナリ。その時節の食物を神前に供ふ。韓愈「使建中遠具時差之莫、

【時異事異】ツナリ。時節が違へば、人の行事も亦従つて異なり。漢書に「使秦儀與饒竝生於今之世、曾不得事掌

【時難得而易失】ツナリ。よきをりの逃すべからざるをいふ。史記に「夫功者難成而易敗、時者難得而易失也」

【晃】ツナリ。あきらか(明)ひかる、ひかり(光)ひかる(耀)てる。

【晃昱】ツナリ。ひかりかがやく。拾遺記に「仙宮則晃昱明燦也」

【晃晃】ツナリ。かがやく貌。鹽池賦に「光日

【晃曜】ツナリ。かがやく。曹植「光采晃曜、

【晒】ツナリ。晃に同じ。

【皎】ツナリ。古了切。篠。或は、皎に作る。

【皎皎】ツナリ。あきらかなる貌。楚辭に「夜皎皎兮既明」

【晉】ツナリ。即刃切。震。子賤切。震。

【晉晉】ツナリ。進。さしはさむ(挿)おさふ(抑)長六尺六寸ある鼓の名。いしづき(易)の卦の名。水の名。

【晉鼓】ツナリ。長さ六尺六寸ある両面のつづみ。元史に「路鼓一在桃之東南、晉鼓一在其後」

【响】ツナリ。あきらか(明)おほいなり。音の俗字。

【响响】ツナリ。あきらかなる貌。始雨切。養。まひる(正午)。

【眈】ツナリ。ツナリ。呼晃切。養。カウ、ガウ。呼浪切。濛。

【眈眈】ツナリ。あつし(熱)ひでり(旱)。

【眈眈】ツナリ。瞳に同じ。

【眈眈】ツナリ。他刃切。蒙。カウ、トウ。あかし。

【眈眈】ツナリ。楚洽切。洽。サフ。楚洽切。洽。

【眈眈】ツナリ。うつらふ。カン。各汗切。翰。

【眈眈】ツナリ。なまび(半乾)。カク。各汗切。翰。

【眈眈】ツナリ。於肝切。翰。

【眈眈】ツナリ。あきらかなる貌。詩經に「羔裘晏兮、三英粲兮」

【晏如】ツナリ。おちつきて平氣なり。高適「四時常晏如、百口無饑年」

【晏息】ツナリ。やすんじいふ。詩經に「嗟爾君子、無恆晏息」

【晏晏】ツナリ。はるのすゑ。梁元帝墓要に「三月日未暮、晏晏」

【晏晏】ツナリ。あきのすゑ。朱熹「風高木落、晏晏」

【晏晏】ツナリ。ゆふぐれに鳴るかみなり。杜審言「日氣含殘雨、雲陰送晚雷」

【晏晏】ツナリ。ゆふぐれからす。歐陽修「晚鳥藏柳樓、晚鳥」

【晏晏】ツナリ。なつのすゑ。陸賈王「荷香銷、晚夏、菊氣入清秋」

【晏晏】ツナリ。おきてさる。蘇軾「飛鷹悔前失、黃犬悲晚悟」

【晏晏】ツナリ。夕方のかきり。白居易朝「睡足始起、晚酌醉即休」

【晏晏】ツナリ。ゆふぐれのふえの音。元好問「一聲鶯、晚笛、數點入秋雲」

【晏晏】ツナリ。日くれて高きにのぼる。高啓「晚登臨海觀、側傍懷古情」

【晏晏】ツナリ。鐘會「早植晚登、君子德也」

【晏晏】ツナリ。ゆふぐれのけしき。張何「晚景秀、晴江轉春」

【晏晏】ツナリ。ばいめし、願瑤「人家溪樹裏、晚飯柁樓前」

【晏晏】ツナリ。ゆふげのけむり。ゆふがすみ。唐太宗「晚煙含樹色」

【晏晏】ツナリ。ゆふひ。王勃「浦樓低、晚照、鄉路隔風塵」

【晏晏】ツナリ。おそく暖氣を帯ぶ。張廷琰「晚照」

七畫

【哽】ツナリ。カウ、キヤウ。古杏切。梗。ひのひかり(日光)ひたか

【哽哽】ツナリ。カン、ケン。戸版切。滑。日出づる貌、ひので

【哽哽】ツナリ。朗宕切。漾。ラウ。朗宕切。漾。

【哽哽】ツナリ。あきらか(明)に同じ。シユン。子峻切。震。

【哽哽】ツナリ。はやし(早)あきらか(明)。

【哽哽】ツナリ。慣用音。無遠切。阮。ベン、モン。無遠切。阮。

【晚】ツナリ。ひぐれ(暮)おくる、おそし(後)。

【晚晚】ツナリ。おくる、おそし(後)。劉長卿「黃雀啾啾爭晚禾」

【晚晚】ツナリ。老いたるよはひ。高適「晚年學垂綸」

【晚晚】ツナリ。ゆふひのひかり。董思恭「梁前朝影出、橋上晚光舒」

【晚晚】ツナリ。おそく成り遂ぐ。韓非子に「大器晚成、大音希聲」

【晚晚】ツナリ。おそきのはな。梁簡文帝「晚花與薰風、俱落」

【晚晚】ツナリ。おそきな。范成大「早種已垂垂、晚苗猶剪剪」

【晚晚】ツナリ。ゆふつかたのかぜ。李白「蓮舟颺晚風」

【高】ツナリ。キヤウ、カウ。香雨切。養。あきらか(明)。

【日部】晏 咳 曷 哽 暄 响 眈 眈

【晨煙】あさげのけぶり。あさがす

【晨照】あさのひかり。あさやけ。宋

【晨露】あさのつゆ。鮑照「飢猿莫下

【晨暉】あさひのひかり。高閣「重光

【晨暮】あしたといふべし。又、あけ

【晨潮】あさしほ。番禺記に「晨潮下、

【晨霧】あさひ。朱熹「千嵐蔽夕陰、

【晨露】あさめし。束皙「馨爾夕膳、

【晨霧】あしたのかすみ。吳筠「羽蓋

【晨霧】あしたのしも。王融「亭亭雙

【晨霧】あさかぜ。温庭筠「影亂晨風

【晨霧】あけがたのきり。嵇康「梁

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

【晨霧】あさはやく入り夜お

愈者、非爲其能晨入夜歸也」

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【晨星落落】あけがたのそらに星

【白】あふぐ(仰)したふ(暮)かた

【衣】星の名うつくし(部)南方よ

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

【景天】(動)はたるの異名。古今注に

陽修「尤忌赤頭、號爲景迹」

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景雲】あけがたの雲。慶雲。易經、

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

【景】あまねきめぐみ。薛蓬「欲識

本
字
の
み

不ニ相曉悟コ

【曉鳥】ワカ あけがらす。羅鄴「夢斷南窗啼曉鳥」

【曉梵】ワカ あさの讀經のこゑ。陸龜蒙「曉梵陽鳥當石磬」

【曉習】ワカ あきらかにまなぶ。後漢書に「每存憂濟、又曉習邊事」

【曉雪】ワカ よあけのゆき。曙雪。溫庭筠「綠嶺參差曉雪」

【曉教】ワカ さとしをしふ。埤雅に「故鶴鳴二、以曉二教一」

【曉達】ワカ あきらかに通ず。南史に「曉達吏事、自強不息」

【曉喻】ワカ さとす。漢書に「欲以曉喻衆庶、不亦難二乎一」

【曉鼓】ワカ あかつきのつづみのおと。李咸用「曉鼓軍容肅」

【曉暇】ワカ あさの閒のひま。王勃「酌丹墀之曉暇、候青禁之宵餘」

【曉解】ワカ さとり知る。あきらかにしる。左傳、疏に「明者達也、曉二解事務一、照二見幽微一也」

【曉飯】ワカ あさめし。岑參「夜眠楚煙濕、曉飯湖山寒」

【曉鴉】ワカ あげがらす。蘇軾「吹笛墮秋葉、讀書隨曉鴉」

【曉暎】ワカ あさひ。劉宰「要上扶桑看曉暎」

【曉霞】ワカ あかつきのかすみ。劉兼「舞

衣新繡曉霞鮮

【曉霧】ワカ あかつきのしも。(晨霧)。王安石「初疑宿雨沙、稍怪曉霜稠」

【曉霧】ワカ よあけのきり。(晨霧)。陶弘景「曉霧將歇、猿鳥亂鳴」

【曉霞】ワカ あかつきのあられ。梁簡文帝「曉霞飛銀鬚、浮雲暗未開」

【曉露】ワカ あかつきのつゆ。謝朓「惜曉露之方晞」

【曉響】ワカ あきらかにさとす。後漢書に「曉響曲直、退無怨者」

【曉霞】ワカ あさざり。徐彦伯「青潭曉霞籠仙驛」

十三書

暉

エキ、ヤク。夷益切。暉。ひかり(光)。

暎

キヤウ、カウ。許兩切。暎。シヤウ、サウ。書兩切。暎。あきらか(明)。

暎

あつし(熱)。乙六切。暎。ケウ。吉了切。暎。カウ、ゴウ。下老切。暎。あきらか(明)。

暎

あきらか(明)。

暎

エン。以晴切。暎。さらす(暎)。

暎

アイ。烏代切。暎。かさす(暎)。

暎

あきらかならず。物のまさらはしきにいふ。蔡邕「觀暎味之利、而忘昭哲之害」

暎

おほはれてくらし。おほふ。楚辭に「暎暎其暎莽兮」

暎

くらき親。王維「悠悠長路人、暎暎遠郊日」

暎

タイ、テ。徒對切。暎。しげる(茂)。

暎

シユ、ニユ。日朱切。暎。ひのいろ(日色)。

暎

ひのいろ(日色)。舊唐書に「曲學所習、暎味所守」

暎

キフ、コフ。去急切。暎。さらす(暎)。

暎

アイ。於蓋切。暎。ひのいろ(日色)。

暎

シヨ、ソ。常恕切。暎。あかつき(暎)、あけぼの(暎)

暎

した(日)。

暎

あけぼの太陽。あさひ。王

欠

欠

きたり。史記に「勾踐十年國富、報強兵、恥會稽之恥。」
棘 トウ、ツ。他東切。東。遠く聞ゆる鼓の聲。

十畫
棘 イン。羊進切。震。こつづみ(小鼓)。

塌 説文に「申に从ひ、東の聲」
 ①ケツ、ケチ。丘傑切。屑。
 ②丘塌切。屑。

十一畫
聲 ①アイ、ニャウ。養丁切。青。②ヂ、ニ。女夷切。支。つぐ(告)。

十二畫
替 テイ、替に同じ。タイ。替に同じ。テン、トン。他兼切。鹽。ます(益)。

十七畫
餽 ヒ。婢支切。支。ます(益)。

月部

部首

月 ヲツ、グワチ。魚厥切。月。影) ①一歳を十二分したる。②つきを十二分したる。③つきのあるゆふべ。謝靈運「新明弦月夕」

【月下】 月の光のさすところ。又、月くだる。王勃「景沈西夢、月下東濱」

【月旦】 ①朝日。②許劭の故事より人物の批評をいふ。後漢書に「初劭與從兄靖、俱有高名、共覈論鄉黨人物、每月輒更其品題、故汝南俗有月旦評」

【月光】 つきのひかり。李白「牀前看月光、疑是地上霜」

【月次】 つきなみ。①月やどる。陸倕「歲運闌茂、月次姑洗」

【月姉】 月の異名。司空圖「月姉殷勤留不住」

【月夜】 つきよ。舊唐書に「常子客舍、月夜獨吟」

【月季】 「植」かうしんばらの異名。報未「月季應天上物」

【月食】 月蝕に同じ。易經に「日中則昃、月盈則食」

【月面】 つきの如くうるはしき顔。宋濂「歌扇但疑遮月面」

【月計】 一箇月の勘定。經組堂雜志に「有三月計、然後歲計可知」

【月兔】 月の異名。(蟾兔、銀兔)。唐明皇「月兔落高爐、星狼下急箭」

【月桂】 ①つきかけ。月中に桂樹ありといふ傳説より月光をつきのかつらといふ。②科第に登るをいふ。避暑錄に「世以登科爲折桂、其後以月中有桂、故以謂之月桂」今「Lauzel」を月桂といひて勝利の象徴とするは泰西の思想なり。

【月朔】 つきのはじめ。書經に「季秋月朔、辰弗集于房」

【月俸】 月月の給料。宋史に「眞宗、祥符年間、加文武職官月俸」

【月宮】 つきのみや。韋莊「瑤池宴罷歸來醉、笑說君王在月宮」

【月城】 西のはて。遠きくに。齊書に「月城來賓、日際奉土」

【月晦】 つこもり。三十日。劉長卿「月晦逢休澣、年光逐宴移」

【月陰】 つきかけ。江淹「展展曙風急、團團明月陰」

【月將】 月月に進歩す。詩經に「維予小子、不聰敏、止、日就月將、學有緝熙于光明」

【月梅】 つきにてらさるるうめの花。陳與義「月梅疎影夜香聞」

【月華】 つきのひかり。梁元帝「共向」

【日部】 棘 棘 塌 聲 替 餽
 【月部】 月

江頭「眺月華」
 月卿「執政の大臣。馬祖常」行觀諸俗期「星使、歸奏蕃釐拜月卿」
 月華「つきのかさ。庾信「星芒一丈」
 月輪「地球が日と月との間に挟まりて、日の光を遮るる爲に、月影の隠るること。宋書に「朔則交會、望則月蝕」
 月朔「つき見のうてな。顔延之「風觀要」
 月爾「種」ぜんまい。爾雅に「蕪、月爾」
 月魄「月の異名。梁簡文帝「珠生月魄、鐘應秋霜」
 下拂明月輪「つきのわ。杜甫「翩然紫塞關、下拂明月輪」
 月慶「月月にあてがふ扶持米。元史に「敵子近郊、命宿衛受月慶」
 月露「つきのつゆ。李白「山明月露白、夜靜松風歇」
 月彎「つきのなりになる。蘇軾「茫茫夜潭靜、皎皎秋月彎」
 月靈「月の異名。齊書、樂志に「月靈誕慶、雲瑞開祥」
 月下老「縁結びの神。續幽怪錄に「章固旅次宋城、遇老人、向月檢書、因問、囊中赤繩、云、繫夫婦之足、雖仇家異域、此繩不可易」
 月窟水「月の中の窟窟中より湧

き出づといふ水。李白「渴飲三月窟水、飢餐天上雪」
 月白風清「月はしるく風はきよし。蘇軾「月白風清、如此良夜何」
 月明星稀「蜀先主の奔走を譏れる魏の武帝の句にて、その短歌行に「月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、無枝可依」
 月章星句「文章のよきを稱賛していふ語。許有孚「博得三月章星句」
 月盈則食「盛んなるものは必ず衰ふることあるに喩ふ。易經に「日中則昃、月盈則食」
 月滿則虧「前に同じ。史記に「語曰、日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天地之常數也」
 月麗于箕「月、畢星にかかる。雨ふる兆といふ。詩經に「月麗于畢、俾滂沱矣」
 月麗于箕「月、箕星にかかる。風吹く兆といふ。詩經に「月麗于箕、風揚砂矣」
 月落烏啼霜滿天「曙天のさまを歌へる句。張繼「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠」

ある、あり、實在、(州國)はたす(果)う(得)とる(取)ただす(實)あきらか(案)たもつ(保)また(又)に通ず。
 説文に「月に从ひ、又の聲」又、九經字樣に「月に从ふ、月に从ふは譌なり」
 有力「うでちからあり。史記に「秦武王有力好戲」
 有力者「其窮、而運轉之」
 達「子上下、敬哉有土」
 王諸呂「長大臣有口者」
 北「極北の地。詩經に「投界有北」
 有功「いさなあり。漢書に「彊勉行、道則德日起、而大有功」
 有年「五穀よく熟す。詩經に「我取其實、食我農人、自古有年」
 有司「やくに入。書經に「文王問、汝兼于庶言、庶獄庶慎、惟有利之牧夫、是訓用達」
 有光「ひかりあり。ほまれあり。書經に「子湯有光」
 有名「名高し。韓愈「愈也道不加修、而文日益有名」
 有初「はじめあり。詩經に「靡不有初、鮮克有終」
 有私「公平ならぬ心あり。後漢書、

第五倫傳に「或問倫曰、公有私乎」
 有形「かたちあり。文子に「有形則有聲、無形則無聲」
 有志「こころざしあり。禮記に「孔子曰、大道之行也、與三代之英、丘未之逮也、而有志焉」
 有事「せしきことあり。平生と變りたることあり。論語に「有事弟子服其勞」
 有苗「南方の蠻族。書經に「惟時有苗弗率」
 有秋「よき收穫あり。白居易「海内時無事、江南歲有秋」
 有限「かぎりあり。徐陵「散有限之微財、供無期之久客」
 有信「まことあり。漢書、高帝紀に「上曰、稀常爲吾使、甚有信」
 有毒「害をなす。左傳に「臧文仲曰、君無謂邾小、蜂蟻有毒、況國君乎」
 有益「えきあり。漢書に「日有益、月有功」
 有害「がいあり。漢書に「通渠有三利、不通有三害」
 有章「文飾あり。詩經に「其容不改、出言有章」
 有終「結尾あり。詩經に「靡不有初、鮮克有終」
 有頃「しばらくして。戰國策に「居有頃、倚柱彈其劍」

有情「こころあり。莊子に「夫道有情有信、無爲無形」
 有無「あるとなきと。晉書に「均、勞逸、通有無」
 有爲「うでまへあり。孟子に「將大有爲之君、必有所不召之臣」
 有業「李白「莫戀漁樵興、人生各有爲」
 有閒「しばらくして。東京賦に「無然有閒、乃莞爾而笑」
 有鄰「同類のもの集り來る義。論語に「子曰、德不孤、必有鄰」
 有意「こころあり。史記、蘇秦傳に「今乃有意西面而事秦」
 有罪「つみあるもの。宋史に「毋縱有罪」
 有道「道德あり。又、道德ある人。論語に「就有道而正焉」
 有數「數ふるばかりなり。少なし。白居易「如我與君心、相知應有數」
 有隙「二人の間仲悪し。漢書に「曹參與蕭何善、及爲相有隙」
 有漏「佛「世俗の凡夫の稱。金剛經註に「終是有漏之因、而无解脱之理」
 有餘「文不足」
 有趣「おもむきあり。孟浩然「沿河自有趣、何必五湖中」

有德「道によりて行ふ人。管子に「授有德、則國安」
 有禮「禮。動植物の如く生活死枯の變りあるもの。古の諸侯の名。國語に「少典娶于有嬌氏」
 有職「つかさどるところあり。荀子に「治國有道、人各有職」
 有識「學者ものしり。見識ある人。桓温「斯有識之所悼心」
 有力者「いさほひある人。呂氏春秋に「有力者賢、暴傲者尊」
 有頂天「佛「九天中の最も高き處。法華經に「從阿鼻獄、上至有頂」
 有羞僧「佛「未だ得道せざる僧。大智度論に「持戒不破、身口清淨、能別好醜、未得道、是名有羞僧」
 有髮僧「かみをそらざる僧。客越志に「寺屋盡傾、惟一有髮僧在」
 有慙徳「徳の人に及ばざるをばづ。書經に「成湯放桀、南巢、惟有三有慙徳」
 有識晒「見識ある人のあざけり。隋書、蘇夔傳に「頗爲有識所晒」
 有名無實「名前のみ美にして實質の、これに伴はざるにいふ。漢書、黃霸傳に「澆淳散機、竝行偽貌、有名無實」

【有_二何面目_一】人にあはす面目なし。漢書、趙苞傳に「食_レ祿而避_レ難、殺_レ母以全_レ義、有_二何面目_一、立_二于天下_一」
 【有_二卦無卦_一】陰陽師のいふ幸運の年まはりに當ると當らざると。
 【有_二始無終_一】著手すれども成功せざるにいふ。晉書に「小人有_レ始無_レ終、不能_レ如_二貫高之流_一也」
 【有待_二之身_一】後來事を爲さんと時機を待つ身。禮記に「愛_二其死_一、以_レ有待也、養_二其身_一、以_レ有_レ爲也」佛、凡夫の身。法華經科註に「初心有待、若得_二供養_一、所_レ修事成」
 【有象無象】宇宙間に存する有形無形の物の總稱。萬物。
 【有_二脚陽春_一】行く處として恩を施さざるなきにいふ。開元遺事に「宋璟愛_レ民恤_レ物、時人咸謂_二有_レ脚陽春_一」
 【有_二爲轉變_一】佛、うきよの事物のうつりかはり易きをいふ。
 【有道之士】道ある人。列子に「列禦寇、蓋有道之士也」
 【有識之士】事理に明かなる人。亢倉子に「有識之士、行_レ危而色不_レ疎、言疎而理不_レ拔」
 【有生者必有死】生きたるものは必ず死す。揚子法言に「有生者必有死、有始者必死_レ終、自然_二之道也_一」
 【有志者事竟成】志あらば

事遂に成就すべし。後漢書に「帝_レ光武_一謂_二耿弇_一曰、常以爲落落難_レ合、有_レ志者事竟成也」
 【有_二朋自遠方_一來】學問の道が遠ければ名自ら顯はれ、朋また遠方よりたづね來る。論語に「有_二朋自遠方_一來、不_レ亦樂_二乎_一」
 【有_二始者必有_レ終_一】事物には必ず終極あり。揚子法言に出づ。
 【有_二治人_一無_レ治法】法の活用は人による意。荀子に「有_二亂君_一無_レ亂國、有_二治人_一無_レ治法」
 【有_二數存_二于其間_一】理の存するにいふ。莊子に「得_二之于手_一、應_二之于心_一、口不能_レ言、有_レ數存_二于其間_一」
 【有_二德者必有_レ言_一】内に徳ある者は、よく言ふことあるものなり。論語に「子曰、有_レ德者、必有_レ言、有_レ言者、不_レ必有_レ德」
 【有_二是父_一斯有_二是子_一】子の賢その父に似るをいふ。孔叢子に「子曰、有_二此父_一、斯有_二此子_一、道_二之常也_一」
 【有_二文事_一者必有_二武備_一】治に居て亂を忘るるにいふ。孔子の言。史記に出づ。
 【有病不治恒得_二中醫_一】病をそのまゝに爲し置くと、中等の醫を得るにひとし。庸醫の病に害あるをいふ。漢書、藝文志に出づ。

【有_二陰德_一者必有_二陽報_一】かげにて徳行ある者は必ず陽に善果を得るなり。淮南子に「有_二陰德_一者、必有_二陽報_一、有_二隱行_一者、必有_二昭名_一」
 【有_二智無智_一校三十里】智ある者と智なき者との差の甚だしきをいふ。世説に「魏武嘗過_二曹娥碑下_一、楊脩從、碑背上題作_二黃絹幼婦_一、外孫齋白八字、魏武問_二脩解_一、不_レ答、曰_レ解、魏武曰、卿未_レ可_レ言、待_二我思_一之、行三十里、魏武曰、吾已得_レ、令_二脩別記_一所_レ名、脩曰、中郎魏武之記與_レ脩同、歎曰、我才不_レ及_二卿_一、乃覺_二三十里_一」
 【有_二機事_一者必有_二機心_一】機巧の事を爲すものは機巧心あり。莊子に「有_二機械_一者、必有_二機事_一、有_二機事_一者、必有_二機心_一」
 【有_二羅網_一者必有_二羅網_一】羅網の水くつつかざるにいふ。淮南子に「有_二羅網_一者、必有_二羅網_一、有_二羅網_一者、必有_二羅網_一」
 【有_二死之心_一而無_二生之氣_一】死を決し生を希はざるにいふ。戰國策に「將軍有_二死之心_一、而士卒無_二生之氣_一」
 【有_二非常之事_一然後立_二非常之功_一】無事の世には功を立てがたき意。司馬相如「蓋世必有_二非常之人_一、然後有_二非常之事_一、有_二非常之事_一、然後立_二非常之功_一」

四畫

阮

カン、ケワン。虞遠切。阮。月のひかりかすかなり。

朋

とも(同門、學友)ななま(與)むれ(羣)たぐひ(比類)つゝのたる(兩尊)ふたつの貝(古、錢貨單位の二百十六倍)。

【朋友】ともたち。(友朋)。詩經に「朋友攸_レ攝、攝以_二威儀_一」
 【朋比】かたよりにくみす。唐書に「楊虞卿兄弟、朋_二比貴勢_一」
 【朋知】ともたち。謝靈運「再與_二朋知_一辭」
 【朋徒】ななま。後漢書、儒林傳に「朋徒相視_二意散_一」
 【朋曹】ともがら。ななま。何遜「樞機慎_二僕隸_一、媒孽畏_二朋曹_一」
 【朋義】ともたちのみち。韓維「尤見_二朋義_一敦_二」
 【朋會】ともたちのつどひ。梅堯臣「飲酒衆所_レ嗜、未_レ若_二朋會_一樂」
 【朋愛】いづくしむとも。張說「斗酒貽_二朋愛_一、踟躕出_二御溝_一」
 【朋儔】ともたち。(侶儔)。蘇軾「我年二十無_二朋儔_一、當時四海一_レ子由」
 【朋儕】前に同じ。(同儕、等儕)。元稹「銀輪屈_二朋儕_一」

朋

前に同じ。張說「當時好_二朋獨_一、朋儕少_二相過_一」

朋類

前に同じ。魏志に「鄧艾心懷_二至忠_一、而性剛急、不能_レ協_二同朋類_一」

朋黨

ななまを結べる團體。歐陽修「朋黨之說、自古有_レ之」

朋黨

同志の相須つて學識を進むるをいふ。易經に「麗澤兌、君子以_レ朋友講習」

阮

ク、ノク。女六切。屋。ついでに月の東方に見る(と縮阮)。

阮

阮古切。曩。あきらか(明)。

阮

漢、ヘン。通遠切。先。頻に通ず。わかつ。

阮

テ、ドン。直遠切。阮。月落ちて後、なほ光明の残れること。

阮

フク、ホク。房六切。屋。ハク、ホク。獨角切。覺。

【服】フク、ホク。房六切。屋。ハク、ホク。獨角切。覺。① 同。② 同。③ 同。④ 同。⑤ 同。⑥ 同。⑦ 同。⑧ 同。⑨ 同。⑩ 同。⑪ 同。⑫ 同。⑬ 同。⑭ 同。⑮ 同。⑯ 同。⑰ 同。⑱ 同。⑲ 同。⑳ 同。㉑ 同。㉒ 同。㉓ 同。㉔ 同。㉕ 同。㉖ 同。㉗ 同。㉘ 同。㉙ 同。㉚ 同。㉛ 同。㉜ 同。㉝ 同。㉞ 同。㉟ 同。㊱ 同。㊲ 同。㊳ 同。㊴ 同。㊵ 同。㊶ 同。㊷ 同。㊸ 同。㊹ 同。㊺ 同。㊻ 同。㊼ 同。㊽ 同。㊾ 同。㊿ 同。

〔望〕 周禮威勇而多智、能望塵知敵數。○客の來るを待つ義。晉書に「石崇與潘岳、詔事賈謐廣成君、每出崇降車路左、望塵而拜」。○孟子に「民望之、若大旱之望雲霓也」。○長上の人に謁せんことを願ふ義。先づその面を拜するをいはずして履を望まんといふなり。陸遊「袖詩叩東府、再拜求望履」。○東府、再拜求望履。○樓對明月。○劉楨望羣結不解、貽爾新詩文。○望樓、ものみやぐら。左傳、注に「樓車、車上望樓」。○望夫石、遠方に行く夫の離別を悲み、遙にその後姿を望み、立ちたるまま死にて化成せりといふ石。神異經に「武昌婦望夫、化而爲石」。○望雲之情、子の親を思ふこと。唐書に「仁傑登太山、反顧、白雲似飛、謂左右曰、吾親舍其下」。○望、カウ、浩に同じ。

〔朝〕 テウ。陟遙切。蕭。○つと(早)○あした(あさ)○あつまる(會)○やくし(官廳)○我が(君主の治)○一人の君主在位間の稱。○説文に「旦なり、朝に从ふ、舟の聲」。○朝士、周代の官名。周禮に「朝士掌建邦外朝之禮」。○朝廷に仕官せる士。劉禹錫「休唱貞元供奉曲、當年朝士已無多」。○あさゆふ。韓愈「惟朝夕芻米僕貨之資、是急」。○あしたにのぼる。張耒「終身軒冕亦何頼、況有朝升而暮黜」。○朝化、朝廷の教化。隋書に「申國威于萬里、宣朝化于一隅」。○朝右、朝廷の高官。南史、何承天傳に「性剛復、不能風意朝右」。○朝市、官市と市場と。○午前市の市。周禮に「朝市朝時而市、商賈爲主」。○朝旭、あさひ。(初旭)韋承慶「春露融于朝旭」。○あさひのひかり。宋史に「鷓鴣詞朝光發、萬戶開擊臣謁」。○朝列、朝廷にて百官の列位。儲光羲「想像南幽下、恬然謝朝列」。○朝次、朝廷の席次。後漢書に「修身行義、應在朝次」。○朝衣、朝廷に出づる制服。岑參「北

山疎雨點朝衣」。○一國の大政の出づる所。禮記に「朝廷之美、濟濟翔翔」。○朝事、早朝の祭事。禮記に「建設朝事、燔燎糴醴」。○朝社、朝廷と社稷と。王微「壯情并驅馳、猛氣揮朝社」。○朝命、朝廷の命令。耶律楚材「奉表遵朝命、尊王建義旗」。○朝服、朝廷に出づるもの。論語に「吉月必朝服而朝」。○朝宗、諸侯の天子に謁見する義。○轉じて、河水の海にあつまり注ぐをいふ。書經に「江漢朝宗于海」。○朝來、あさひやくより。晉書に「西山朝來、致有爽氣」。○天子の威光。後漢書、趙岐傳に「邪卿出疆、專命朝威」。○朝宴、朝廷のさかもり。顏延之「陪園廻天顧、朝宴留聖情」。○朝柄、政の權力。漢書に「常掌國事、世執朝柄」。○朝廷のめぐみ。舊唐書、李元通傳に「吾荷朝恩、作藩東夏、當守臣節、以忠報國」。○朝直、朝廷にまゐる。鄭谷「朝直叨居省閣閑」。○帝王のいへ。戴復古「朝家遣使嚴祀典」。

〔醇〕 トン。他昆切。元。つきのひかり(月光)。

八 畫

〔朝班〕 朝廷にての席次。會要に「景龍三年左臺御史崔沘、彈朝班不肅」。○朝座、前に同じ。宗文「東臺差朝座、西桃獻夜宮」。○朝哺、あさの膳。陳子昂「朝哺夕膳、候色承歡」。○朝飢、あさう。李白「他筵不下箸、此席忘朝飢」。○朝規、朝廷ののり。沈約「必能學朝規于邊鄙」。○朝眷、朝廷のめぐみ。魏書に「荷朝眷、未敢仰從」。○朝野、朝廷と民間と。張協「昔在西京時、朝野多歡娛」。○朝來、朝廷のやくにん。沈佺期「天人開祖席、朝來候征麾」。○朝堂、一國の大政の出づる所。後漢書、黃瓊傳に「瓊練達官曹、爭議朝堂、莫能抗奪」。○朝務、朝廷のつとめ。又、まつりごと。南史、齊豫章王嶷傳に「嶷不參朝務、而言事、密謀多見信納」。○朝寄、朝廷よりの委任。晉書、謝安傳に「安雖受朝寄、然東山之志、始末不渝」。○朝從、朝見と從行と。史記、淮陰侯傳に「信知漢王畏惡其能、常稱病不朝從」。○朝哺、あしたとゆふべと。白居易

「朝哺頌餅餌、寒暑賜衣裳」。○天子の機嫌をうかがふ。左傳に「襄公八年春、公如晉、朝且聽朝聘之數」。○朝朝、まいあさ。梁簡文帝「綠葉朝朝黃、紅顏日日異」。○朝雲、あさのくも。高唐賦に「旦爲朝雲、暮爲行雨」。○朝飧、あさめし。杜甫「朝飧是草根、暮食乃樹皮」。○朝陽、あさひ。(旭陽)詩經に「梧桐生矣、于彼朝陽」。○朝會、朝廷にあつまる。晉書に「元熙元年、改元不朝會」。○朝暉、あさひのひかり。(晨暉)杜甫「千家山郭靜朝暉」。○朝綱、朝廷ののり。薛能「練紙應無用、朝綱自在倫」。○朝敵、天子に敵するもの。○朝憲、朝廷ののり。梁書、謝幾卿傳に「性通脫、會意便行、不拘朝憲」。○朝嘲、あさなく。禽經に「山鳥朝嘲、水鳥夜嘲」。○朝儀、朝廷に於ける儀式。周禮に「正朝儀之位、辨其貴賤之等」。○朝謁、朝廷に至りて謁見す。杜甫「權門傾朝謁、何如隱書眠」。○朝暎、あさひ。(晨暎、曉暎)張九齡「俯滋含宿露、衆妍在朝暎」。

〔朝隱〕 隱退の心にて官に仕ふ。揚子法言に「或問、柳下惠非朝隱者歟」。○朝隣、あしたに雲氣上る。詩經に「蒼兮蒼兮、南山朝隣」。○朝露、あさのしも。左思「秋風何烈烈、白露爲朝露」。○朝觀、天子にまみゆ。孟子に「朝觀訟獄者、不之益、而之啓」。○朝弊、朝廷ののり。(皇弊)武后「上不汨於朝弊、下無招於官謫」。○朝謨、朝廷ののり。沈約「朝謨謹肅、宰略遐震」。○朝闕、帝王の居所。李中「慷慨辭朝闕、遐遙涉路塵」。○朝霧、あさのさきり。(曉霧)七命に「踐朝霧、越春衢」。○朝議、朝廷の相談。歐陽修「前年辭諫、朝議不容乞」。○朝鐘、あさのかねの音。王褒「空林鳴暮雨、虛谷應朝鐘」。○朝露、あさのつゆ。漢書に「人生如朝露、何久自苦如此」。○朝暎、あさひ。李德裕「含煙煙於夕景、泣香露于朝暎」。○朝權、まつりごとの權力。(政權)晉書、陶侃傳に「侃季年懷止足之分、不與朝權」。○朝議、あさのもや。江淹「朝議方卷、郵氣已廓」。

【木主】シヨク おはひ。位牌。史記に「爲文王木主、載以車爲中軍」

【木母】ホク ●「植」梅の異名。夷堅志に「木母、梅也」●母の木像。通鑑に「始居文太后憂、依三闕作木母」

【木奴】ホク ●「植」柑橘の異名。玉堂閑話に「柑號木奴、橘亦曰木奴」

【木石】ホク ●木と石と。孟子に「與木石居、與鹿豕游」●情なきものな

【木本】ホク ●木の根もと。國語に「伐木不自其本、必復生」

【木瓜】ホク ●「植」ほけ。詩經に「投我以木瓜、報之以瓊瑤」

【木桃】ホク ●「植」さんざし。詩經に「投我以木桃、報之以瓊瑤」

【木匠】ホク ●たいく。清異錄に「木匠總號運斤之藝」

【木耳】ホク ●「植」きくらげ。本草に「木耳生于朽木之上、無枝葉、乃濕熱餘氣所生」

【木豆】ホク ●きづくりのたかつき。爾雅に「木豆謂之豆、竹豆謂之蓬」

【木狗】ホク ●くろ犬に似たるもの。莫越集に「木狗生廣東左右江山中、形如黑狗、能登木」

【木柿】ホク ●こっぱ。晉書に「詔修戰艦、木柿蔽江而下」

【木星】ホク ●太陽系中の第九位にある遊

星。平均直徑約三萬六千里にして、五個の衛星を有し、十一年と三・四・八日に太陽を一週す。

【木客】ホク ●きくらげ。玉壺遐覽に「神仙傳有木客、薪於山中」●(動)山に棲む怪獸。又、狒狒。

【木屐】ホク ●足駄の類。後漢書に「延熹中京都長者、皆著木屐」

【木理】ホク ●木材にある年輪。もくめ。酉陽雜俎に「房怪其木理成形、問之」

【木斛】ホク ●「植」木の名。本草に「木斛中虛如木、長尺餘、但色深黃光澤耳」

【木訥】ホク ●身飾りけなく言にぶし。論語に「剛毅木訥近仁」

【木魚】ホク ●(佛)誦經する時、たたく鳴す佛具。北史に「隋大業十年、頌水魚符於京官」

【木偶】ホク ●でく。人形。史記に「見木偶人與土偶人、相與語」

【木通】ホク ●「植」あけびの異名。

【木筆】ホク ●●「植」こぶしの異名。本草に「辛夷初發如筆、北人呼爲木筆」●ふで。唐書に「以木爲筆、玉爲印」

【木戟】ホク ●「植」くちなしの異名。

【木犀】ホク ●「植」もくせい。楊萬里、覺來簾外木犀風」

【木強】ホク ●素樸にしてかざりなし。史記に「勃爲人、木強敦厚」強は又、彊に作る。

【木賊】ホク ●「植」とくさ。

【木蜜】ホク ●「植」なつめの異名。本草に「枳椇一名木蜜、其木皮溫無毒」

【木照】ホク ●かるわざ。淮南子に「木照者非砂勁」

【木像】ホク ●木にて作りたる似姿。葛長庚「木像入廟、而汗流」

【木蓮】ホク ●「植」ふようの異名。木芙蓉。花木志に「木蓮、葉似芙蓉、花類蓮」

【木槿】ホク ●「植」むくげ。禮記に「仲夏之月、木槿榮」

【木劍】ホク ●木にて作れるつるぎ。通鑑に「取朝服木劍以進」

【木蔭】ホク ●かげ。(樹陰)。玉潤雜書に「木蔭聽鳥聲」

【木魅】ホク ●老木の精。洞天清錄に「山精木魅之能爲祟者」

【木器】ホク ●木にて作れる瓶。史記に「以木器瓶渡軍」

【木燧】ホク ●木の火きり。白虎通に「鑽木燧、取火教民」

【木蘭】ホク ●「植」一種の香草。又、もくれんげ。風平「蘭馨、附之木蘭兮」

【木鐸】ホク ●木の舌を有する鈴なり。振りて衆をいましめしめしより、教を施して一世を指導する人にとふ。論語に「天將下夫子爲木鐸」

【木乃伊】ホク ●Mummy。支那にて、木乃伊(イ)と誤譯せしもの轉訛。藪を塗

りて腐敗を防ぎたる死體。(死臘)。輟耕錄に「回回地、有年七十八歲老人、自願捨身濟衆者、絶不飲食、惟澡身噴蜜、經月便溺、皆蜜、既死、國人殮以石棺、乃滿川蜜浸、鑄志歲月於棺蓋、瘞之、俟三百年後、啓封、則蜜劑也、凡人損折肢體、食少許、立愈、雖彼中亦不多得、俗曰蜜人、番言木乃伊」●轉じて、生物體の化石。

【木天蓼】ホク ●「植」またたび。本草集解に「木天蓼所在皆有、生山谷中」

【木居士】ホク ●木にて造れる神像。韓愈「火透波穿不計春、根如頭面幹如身、偶然題作木居士、便有無窮求福人」

【木長官】ホク ●松の異名。潛牧嶺上に古松一本あり、盤錯して奇怪なり、嘗て兄弟あり、牆に閉き、有司に訴へんと欲し、夜行きてその下に憩ふ、運明色を辨す、相視れば乃ち伯仲なり、遂に各悔い咎め、争を息めて還る、因りて松を名づけて木長官と爲す云云。杭州志に見ゆ。

【木芙蓉】ホク ●「植」ふように同じ。王安石「水邊無數木芙蓉、露滴胭脂色未濃」

【木患子】ホク ●「植」むくろじの實。

【木槿患】ホク ●客死してかへるを得ざるをいふ。説苑に「孟嘗君將西入秦、有客入曰、臣之來也、過于淄水上、見一土偶人與木槿人語、木槿謂土偶

人曰、子先士也、持子以爲偶人、偶人大雨、水潦並至、子必沮壞、應曰、我沮乃反吾眞耳、今子東園之桃也、刻子以爲梗、遇天大雨、水潦並至、必浮于泛泛乎、不知所止、今秦四塞之國也、有虎狼之心、恐其有木槿之患、子、是孟嘗卒不致西歸秦」

【木假山】ホク ●木を以て山の形を作りしもの。又、箱庭の義とす。五雜俎に「余在德平、葛尚寶園中、見木假山一座」又、蘇洵に木假山記あり。

【木蘭樹】ホク ●「植」むくろじの木。

【木蘭湖】ホク ●「植」けんぼなし。

【木蘭辭】ホク ●女丈夫木蘭が男子に扮して徵兵に應じ、戦を畢へて恙なく郷里へ歸りたることを敘べたる七言古詩なり。滄浪詩話に「木蘭歌最古、然朔氣傳金柝、寒光照鐵衣之類、已似太白矣」

【木人石心】ホク ●感情なき人をいふ。晉書、夏統傳に「此吳兒、是木人石心」

【木牛流馬】ホク ●その形牛馬に象り、機械仕掛にて運行する車、兵糧運搬の用に供す。諸葛亮の創製にかゝる。

【木石爲徒】ホク ●世に求むる心なく、僻地にわびすまひするをいふ。柳宗元「用是更樂瘖默、與木石爲徒、不復致意」

【木強則折】ホク ●木の強きものは、風

雪などに折れ易し。淮南子に「兵強則滅、木強則折、革固則裂、齒堅於舌、而先之敝」

【木從繩則正】ホク ●曲れる木も墨繩をあてて削れば、正しく成る。書經に「木從繩則正、君從諫則聖」

【木實繁者披其枝】ホク ●その枝強き者は、その主をあやふくするに喩ふ。史記に「木實繁者披其枝、披其枝者傷其心」

【朮】ホク ●ヒン、ピン。匹切切。震。あさぎれ(麻片)。

【未】ホク ●ビ、ミ。無沸切。未。●ひつじ(十二支の一、時刻にては午後二時、方角にては西南)●くら(味)●いまだ、いまだし、●あらず、す(不)●いまだ、いまだ(否)●將來。

【未了】ホク ●まだをばらず。李白「江上相逢借問君、語聲未了風吹斷」

【未月】ホク ●六月の異名。

【未央】ホク ●いまだなかに至らず。詩經に「夜如何、其夜未央」

【未成】ホク ●いまだ出来あがらず。史記に「毛羽未成、不可以高聳」

【未決】ホク ●いまださまらず。

【未完】ホク ●いまだをばらず。

【未知】 いまだ知らず。
 【未定】 いまだ定まらず。尹文子に「雉免在野、衆人逐之、分未定也」
 【未返】 いまだかへらず。駱賓王「逝將歸而未返」
 【未來】 現在の後に來るべき時。又、後生。(將來、當來)。求心録に「未來心不可得」
 【未明】 よあけ(黎明)。
 【未炊】 いまだかしがす。楊炯「夫軍井未達、如臨盜水之源、軍竈未炊、似對嗟來之食」
 【未凋】 いまだしぼまず。陸游「秋葉紅未凋」
 【未衰】 いまだおとろへず。蘇軾「當年我作表忠碑、坐覺江山氣未衰」
 【未婚】 いまだ結婚せず。杜甫「昔別君未婚、兒女忽成行」
 【未敢】 いまだあへてせず。左傳に「季孫宿曰、寡君猶未敢、況下臣君之隸也」
 【未萌】 變故いまだ生ぜず。漢書に「所以安社稷、絶未萌也」
 【未然】 いまだ然らず。いまだ到來せず。漢書に「明者起福于無形、消患于未然」
 【未開】 いまだ開けず。いまだ開かず。元稹「丁寧採芳侶、須識未開叢」
 【未發】 いまだ外に發せず。いまだ事

起らず。
 【未詳】 いまだつまびらかならず。
 【未遂】 いまだ成しとげず。劉滄「東西未遂、歸田計、海上青山久廢耕」
 【未聞】 いまだききたることなし。
 【未熟】 いまだみものらず。禮記に「五穀不時、果實未熟」修業のたからざること。
 【未練】 いまだなれず。心残り。
 【未滿】 いまだ或一定の數にみたり。
 【未濟】 易の卦の名。易經に「未濟亨、小狐汔濟、濡其尾、无攸利」
 【未了因】 佛前世の因縁を現世に於て、未だ結びつくさざる意。蘇軾「與君世世爲兄弟、更結來生未了因」
 【未亡人】 寡婦の自稱。左傳に「夫人聞之、泣曰、先君以是舞也、習戎備也、今令尹不尋諸仇讐、而於未亡人之側、心不亦異乎」
 【未死心】 死後なほ忠義奉公の心の存する義。馬子才「可憐一片西湖土、埋卻英雄未死心」
 【未見書】 いまだ見たることなき書物。五雜俎に「讀未會見之書、歷未會到之山水、如獲至寶、嘗異味、一段奇快、難以語人也」
 【未曾有】 昔より絶えてなし。觀无量壽經に「歎未曾有、郭然大悟」
 【未數蓮】 佛全く開かざる蓮花。和

密念佛抄に「觀音手執未數蓮、作開敷勢、即此表示也」
 【未雨綢繆】 禍を未萌に防ぐないふ。詩經に「迨天之未陰雨、徹彼桑土、綢繆戶」
 【未罷免俗】 いまだ世俗と縁を絶つこと能はず。晉書に「未罷免俗、聊復爾爾」
 【未測深淺】 事情の測り知り難きをいふ。吳質「即以五日到官、初至承前、未知深淺、然觀地形、察土宜、四帶恒山、連岡平代、北鄰柏人、乃高帝之所忌也」人の心底の測り知るべからざるをいふ。北史、魏高陽王雍傳に「少儼不恆、孝文曰、吾亦未測此兒之淺深」
 【未滿瓶】 事成らんとし、失敗するに喩ふ。易經に「汔至亦未滿、井羸其瓶、凶」
 【未離欲者】 佛三界の見惑のみを斷じ、欲界の思惑を斷じ得ざるもの。
 【未嘗入城府】 僻地に居住して未だ嘗て城下に行きたることなし。後漢書に「龐公者、南郡襄陽人也、居峴山之南、未嘗入城府」
 【未死誰手】 權力の誰か手に歸するかを知らずといふ義。北史に「若遇光武、當竝驅中軍、未知鹿死誰手」

【未】

ハツ、マナ。莫撥切。昆。
 ①すゑ、こすゑ(梢)②はし(端)③いただし(顯)④くづ、こななし(無)⑤よわし(弱)⑥とほき、とつひに(終)⑦なかれ(勿)⑧うすし(薄)⑨あさし(淺)⑩ひくし(低)⑪やし(賤)⑫而末民困⑬工商のため。漢書に「官富實、而末民困」⑭すゑの利の義、商工の利を得いふ。後漢書に「理國之道、舉本業、而抑末利」⑮道德の頹廢せる時代。又、滅亡に近き時代。(洩季世)。左傳に「叔向曰、齊其如何、晏子曰、末世也」⑯のちの世。⑰身分卑き家來。崔瑗「惟我末臣、頑蔽無聞」⑱本山より分れたるてら。⑲商工等の業。昔は農業を以て本となししが故なり。晉書に「農夫苦其業、而末作不可禁也」⑳「瀧川之民、好末技、不田作」㉑あさはかなる言葉。㉒大尾。㉓するの時。曹植「子生末季、沈溺流俗」㉔本社につきたる小社。㉕佛滅後の時期に立てた

る三名目の一、正法五百年、像法千年の後、一萬年の間の稱。末法燈明記に「於末法中、但有言教、而无行證」
 【未宦】 いやしき役。高適「盛時慙阮步、未宦知周防」
 【未派】 すゑのながれ。羅隱「正憂未派滄海」
 【未流】 子孫。又、未派。人物志に「末流之質、不可勝論」
 【未俗】 あしき事に染みたるならはし。漢書に「今末俗之弊、政事煩多」
 【末孫】 遠き子孫。大戴禮に「禹崩、十世乃有末孫桀、武丁後九世、乃有末孫紂」
 【末書】 注釋の書。
 【末班】 すゑの位次。元稹「觀象樓前奉末班」
 【末座】 しもご。すゑの座席。章碣「小儒末座傾頭目」
 【末席】 前に同じ。姚康「自慙陪末席、便與九霄通」
 【末疾】 手足のやまひ。左傳に「風淫末疾、雨淫腹疾」
 【末造】 末代に爲したる事柄。すゑの世。禮記に「諸侯之有冠禮、夏之末造也」
 【末產】 商工の産業をいふ。管子に「故末產不禁、則野不辟」
 【末路】 生涯の終。又、物事のなれの

はて。漢書に「秦係曲臺之宮、懸衡天下、至其晚節末路、張耳陳勝、連從兵以叩函谷、咸陽遂危」
 【末期】 しにきは、いまはのきは。
 【未滅】 未は薄、滅は輕なり、刑罰を寬にして輕くする義。左傳に「仲尼曰、叔向古之遺直也、中貽三數、叔魚之惡、不爲未滅」
 【未歲】 としのくれ。鄭谷「令終歸故里、未歲道如初」
 【末裔】 子孫。(後胤)。急就篇、注に「楚左史倚相、末裔爲左氏」
 【末葉】 すゑの世。又、後胤をいふ。盧思道「周氏末葉、仍值辟王」
 【末僚】 下級の官吏。朱勣「早造末僚、預參下席」
 【末端】 はし。
 【末節】 枝葉のこと。禮記に「舖筵席、陳尊俎、列蕪豆、以升降爲禮者、禮之末節也」
 【末摩】 佛(梵語 Manan)斷末摩の略。命の終らんとするとき、多く斷末摩苦受に逼られ、別物あることなきをいふ。翻譯名義集に「梵語末摩此云死穴、或云死節、以病觸此處有悶絕生、故雖死而心頭熱也、緣第八識未捨故」
 【末輩】 下につくやから。
 【末學】 未熟なる學問。陳書に「沈不

【末本】 書上書曰、臣末學小生、詞無足算、
【末本】 つまらぬわざ。王僧孺「章句
小才、蟲豸末藝」
【末大必折】 枝葉大なれば本根
折る。以て支族大にして本家を亡すに
いふ。左傳に「末大必折、尾大不掉」
【本】 ホン、ボン。布付切。阮。
○もと、もとづく(原)○はじめ
(始)○むかし(舊)。
説文に「木下を本といふ、木一その下に
在るに从ふ」
【本分】 本來の分限。荀子に「見端不
レ如見本分」
【本心】 まごころ。孟子に「此之謂レ失
レ其本心」
【本支】 もととすゑと。李白「七葉運ニ
皇化、千齡光ニ本支」
【本末】 もととすゑと。はじめとをば
り。史記に「本末相順、終始相應」
【本位】 基本とする標準。
【本色】 固より有せるいろ。きぢ。文
心雕龍に「雖レ跡ニ本色、不能レ復化」
【本旨】 本來のむね。蔡邕「前儒特爲ニ
章句者、皆用ニ其意、傳非ニ其本旨」
【本邦】 わがくに。
【本志】 もとよりのこころざし。韓愈
「悼ニ本志之變化、中夜涕泗交頤」
【本性】 もとよりのうまれつき。詩
經、疏に「言ニ后妃之本性也」

【本初】 はじめ。(太初)。
【本來】 もとより。
【本始】 はじめ。史記に「從臣嘉觀原
念ニ休烈、追ニ誦本始」
【本門】 「佛」衆生本有の妙理を明す
法門。法華經科註に「本門破ニ執近之
情、生ニ本地深信」
【本俗】 昔よりのならはし。
【本則】 おほもとの規則。
【本指】 本來のむね。史記、張耳傳に
「具道ニ本指」
【本紀】 歴史の中にて帝王の、ことを
紀したる部分。史記に十二本紀、十表、
八書、三十世家、七十列傳と分ちたるに
始まる。
【本事】 「佛」佛又は菩薩の本傳本紀
をいふ。法華經に「或説修多羅伽陀及本
事」
【本悟】 眞正なるさと。眞悟。楞
嚴經に「所得ニ密言、遂同ニ本悟」
【本祖】 せんそをもととす。禮記に
「萬物本乎天、人本乎祖」
【本根】 おほもとの。舊唐書に「本根一
搖、憂患不淺」
【本能】 「哲」Faschid. 生來自然に有す
る一定の性向。
【本眞】 本來のまこと。漢書、揚雄傳
に「事有ニ本眞、陳ニ施於億」
【本貫】 原籍地。十六國春秋に「韓熙

戰本貫齊州、隱ニ居嵩嶽」
【本務】 必ずつとむべきつとめ。隋
書、序に「夫孝三皇五帝之本務、萬事之
紀綱也」
【本國】 わがくに。己のうまれたるく
に。(郷國)。
【本教】 人の基となるをしへ。禮記に
「衆之本教曰レ孝」
【本然】 もとより然るべき意にいふ。
【本惡】 わるもののかしら。(元惡)。
禮記、疏に「雖レ觸ニ刑禁、而非ニ其本惡」
【本朝】 わが朝廷。又、わがくに。(皇
朝、國朝)。漢書に「望之雅意在ニ本朝」
【本統】 もと。宋史に「所以ニ本統、
明ニ尊ニ尊也」
【本幹】 れもと。史記に「強ニ本幹、弱ニ
枝葉ニ之勢也」
【本源】 おほもとの。杜甫「乘心
識ニ本源、於事少ニ滯礙」
【本業】 農業。後漢書に「修ニ神農之本
業、分、採ニ軒轅之奇策」
【本意】 まごころのぞみ。まごころの、
ころ。後漢書に「孔子垂ニ經典、皋陶造ニ
法律、原其本意、皆欲ニ禁ニ民爲レ非也」
【本義】 まごころの意義。宋史に「朱
熹易本義十二卷」義にもとづく。荀子
に「禹湯本義勝レ信、而天下治」
【本綱】 もととすべくくり。韓非子に
「吏者民之本綱也」

【本領】 舊よりの領地。○その人
の得意とするところ。
【本態】 もとのすがた。白居易「好蜚
黑白失ニ本態」
【本論】 おほもとの議論。
【本趣】 もとのおもひ。晉書に「此亦
籍之胸懷本趣也」
【本錢】 もとときん。舊唐書に「各與ニ本
錢一千貫」
【本據】 よりどころ。(根據)。後漢書
に「利既難ニ要、將ニ失ニ本據」
【本懷】 本來ののぞみ。ほんまう。
【本願】 もとのねがひ。晉書に「今日
之舉、非ニ本願ニ也」
【本草學】 支那、古代の植物學。
【本支百世】 宗族の永遠に繁榮す
る義。詩經に「文王孫子、本支百世」
【本地垂跡】 「佛」日本の神も、天
竺なる本地の佛の跡をこの地に垂れて
出現せるものとし、天照太神を天竺の
阿彌陀佛の垂跡とし、八幡太神を觀世
音なりなど唱ふる佛家の説。兩部神道
の説もこれより起れり。
【本來面目】 口に説く能はざる心
の眞性。傳燈錄に「道明求ニ法于六祖、六
祖曰、那箇是明上座、本來面目」
【本來無一物】 心虛無にして、一物
をも存せざる義。傳燈錄に「菩提本非
樹、明鏡亦非臺、本來無ニ一物、何處惹

塵埃」
【本然之性質】 本然の性
は、純然たる天より附與せられたる性
にして、氣質の性は、血氣混融して後、
生ずる性なりと説く程朱學派の説。朱
子語類に「有天地之性、有氣質之性、
天地之性、則太極本然之妙、萬殊而一本
也、氣質之性、則二氣交運而生、一本而
萬殊也」
【札】 サツ、サチ。側八切。點。
○ふだ(薄く)小き木筒○かきもの、
ふみ(文書)○わかじに(天死)○かい
(權)○さげ(甲葉)○はやりやみ(疫癘)
○やぶる(敗)○物の聲○むくい(報)。
【札札】 鳴無韻、但札札然。
【札厲】 あらあらしくげし。列子に
「土氣和無ニ札厲」
【札翰】 てがみ。かきもの。魏書に「開
習ニ尺牘札翰」
【札贖】 物かけるふだ。柳宗元「冥ニ特
札贖一分、搖ニ動禍機」
【札瘥天昏】 札は大疫にて死ぬる
こと、瘥は小疫なり、天はわかじにな
り、昏は生れて未だ三月に満たずして
死ぬるなり。左傳に「鄭國不天寡君之二
三臣、札瘥天昏」

【朱】 シユ、ス。鐘輪切。虞。
○あか、あけ○あかし○あかい
ろの塗料○あかいろのもの○赤心木
(松柏の屬)○株に通ず。
【朱口】 朱の口。古詞に「朱口發ニ
豔歌、玉指弄ニ嬌絃」
【朱干】 赤くぬりたるたて。禮記に
「朱干玉戚、冕而舞ニ大武」
【朱天】 西南の天。淮南子に「西南方
曰ニ朱天」
【朱光】 赤きひかり。曹植「揮羽遊
清風、悍目發ニ朱光」太陽。謝朓「朱
光既夕、涼雲始淨」
【朱朱】 「動」雞の異名。風俗通に「雞
本朱氏翁所レ化、故呼レ雞曰ニ朱朱」
【朱汗】 血のいろなせるあせ。勢する
甚だしきなり。杜甫「馬鬣朱汗落、胡舞
白題斜」
【朱明】 夏の異名。漢書に「朱明盛長、
敷ニ與萬物」
【朱砂】 しゅとすするすな。南史に「給ニ
黃金朱砂膏青雄黃等」
【朱粉】 赤色の、な。五代史に「免冠

【机木】「植」に似たる木、さるな。山海經に「單狐之山多机木」注に「狀如楡、可燒以糞田」。

【机案】つくろ。(几案)。補履切。紙。

【朽】キウ、ク。許久切。有。(瘳に同じ、臭)。

【朽木】くちたる木。轉じて、無用の人ないふ。論語に「宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可朽也、於予與何誅」。

【朽折】くちて折る。白居易「畫梁朽折紅窗破」。

【朽老】年とりて氣力おとろふ。又、その者。(衰老。南史に「朽老筋力盡、徒歩還南門」)。

【朽釘】くちたるくぎ。寺塔記に「藉一物、如朽釘」。

【朽索】くちたる繩。書經に「臨民廉乎、若朽索之馭六馬」。

【朽株】くちたるかぶ。司馬相如「枯木朽株、盡爲害矣」。

【朽骨】くちたるほね。晉書に「生繁華于枯葉、育豐肌于朽骨」。

【朽條】くちたるなは。易林に「朽條腐索、不堪施用」。

【朽敗】くさりくづる。後漢書、劉平

等傳に「器物取朽敗者」。

【朽散】くさりちる。宋書、後廢帝紀に「鄧水材官朽散、十不兩存」。

【朽滅】くちほろぶ。李白「豐功利生人、天地同朽滅」。

【朽腐】くちやぶる。易林に「冬蔽朽腐、當風于道」。

【朽穢】くちげがる。韓愈「今無故取朽穢之物」。

【朽斃】くちやぶる。易林に「山石朽斃、稍崩墮落」。

【朽樹】くさりたる木。陳與義「空中朽樹抱孤條」。

【朽檜】くちたるひのき。李建勳「朽檜枝斜綠憂垂」。

【朽壤】くちやぶる。晉書に「軍旅樂器在庫、遂至朽壤」。

【朽壤】くづれたる土。國語に「山有朽壤、而自崩」。

【朽斷】くちてきる。歐陽修「惟尋舊讀書、簡編多朽斷」。

【朽爛】くちたたる。通典に「沈水者朽爛、而心節獨生」。

【朽】ク、ウ、ヤウ。除耕切。庚。ウ、都挺切。週。ウ、都挺切。庚。ウ、都挺切。青。ウ、都挺切。週。ウ、都挺切。青。ウ、都挺切。週。ウ、都挺切。青。

【束】シ。七賜切。實。束に異なり。はり、のぎ(草木の茎)。

【杆】セン。親然切。先。ぶたうがき。

【杆】ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【杆】みづのみ、ゆのみ(飲水器)自ら足れりとせる貌。ゆあみだらひ(浴器)ひく(牽)。

【杆】自ら足れりとせる貌。荀子に「杆杆富人、豈不貧而富哉」。

【杆】居寒切。寒。ウ、チ。羽俱切。斃。

【杆】せんだん(檀)やまぐは(栢)て、(槌)たて(盾)雁れたる木。

【朽】チ、ウ。汪胡切。虞。鳥故切。遇。コ、ク。洪孤切。虞。て(泥銀)。

【朽】セ、セ。初加切。麻。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【朽】セ、セ。初佳切。佳。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【朽】セ、セ。初佳切。佳。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【朽】セ、セ。初佳切。佳。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【朽】セ、セ。初佳切。佳。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【朽】セ、セ。初佳切。佳。ウ、チ。羽俱切。斃。ウ、チ。羽俱切。斃。

【柘】シユン。松倫切。眞。鉏の柄に用ゐる一種の木。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

【机】ヘン、ホン。扶殿切。鹽。ヘン、ホン。扶殿切。鹽。

〔木部〕 柘 机 柘 杆 李 杏 杲 材 村

